

弥生時代後期集落の 消長よりみた古墳時代前期 有力首長墓系譜出現の背景 なぜそこに古墳は築かれたのか

An Analysis of the Rise and Decline of Late Yayoi Settlements
as Factors behind the Emergence of Clusters of Prominent Chiefs' Tombs
in the Early Kofun Period : Why Did Mounded Tombs Appear There?

杉井 健

SUGII Takeshi

はじめに

①2つの先行研究

②熊本県地域における弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落の消長

③熊本県地域における弥生時代後期の銅鏡および鉄器・鍛冶遺構の動向

④熊本県地域における古墳時代前期の古墳動向と弥生時代後期の情勢

⑤古墳時代前期有力首長墓系譜出現の背景

おわりに

【論文要旨】

熊本県地域における弥生時代後期から古墳時代前期の集落動向、および古墳時代前期の有力首長墓（前方後円墳）築造動向を検討した結果、弥生時代後期にきわめて優位な地域であった菊池川中流域などには有力な前期古墳は築造されず、一方、相対的に劣位であった宇土半島基部地域にきわめて有力な前期の首長墓系譜が形成されたことが明確となった。河川や平地部のありかたをみれば、宇土半島基部地域に比べて菊池川中流域は水田稲作をはじめとする農耕の生産力が圧倒的に高いと考えられるが、そうした生産性の高さが古墳時代前期における古墳の築造や集落の維持には直結していない。すなわち、少なくとも熊本県地域では、弥生時代後期の拠点的大規模集落の領有圏がそのまま古墳時代前期の有力首長墓築造の基盤にはなっていないのである。

宇土半島基部地域は、甕棺や武器形青銅器などといった北部九州地域を特徴づけるさまざまな弥生文化要素の分布南限域である。近畿地方中央部にあった中央政権は、古墳にさまざまな階層的要素をもちこみ、それによって生み出された秩序にもとづいてみずからの中心的立場を確立していくが、その地理的射程は、前方後円墳分布域を根拠にすれば、弥生時代に水田稲作が主要な生業として定着した範囲であったと考えられる。その場合、北部九州地域の主要な弥生文化がおよぶ南端域であった宇土半島基部地域は、中央政権側からみた内なる世界の最前線の位置にあたる。すなわち、外なる世界に対する内なる世界の共同性を象徴する場所としてとくに重視されたからこそ、宇土半島基部地域に大規模な前方後円墳がいち早く築造されたと推測した。

このように従来の経済基盤を越えたところに前方後円墳の築造がなされる場合があることは、古墳が相当の政治性を帯びた存在であることを如実に示している。

【キーワード】 弥生時代後期、古墳時代前期、集落、首長墓系譜、熊本県地域

はじめに

一定地域において複数の有力古墳が少しずつ時期を違えながら連続して築造される現象をみいだしたとき、古墳時代研究者はしばしばそれを首長墓系譜として認識する。ただ、その一定地域の地理的範囲をどのように規定するのかについての定まった基準は存在せず、その判断は個々の論者にゆだねられている。とはいえ、まずは中小河川の水系ごとに地域区分することが多いのではなからうか。おそらくそれは、首長墓系譜を生み出す経済基盤が水系ごとに営まれる水田稲作にあるとの認識にもとづいている。つまり、土地への強い執着を生じさせる水田稲作であるからこそ、水系ごとに密接な結びつきが形成され、それが古墳築造の母体になるとの認識である。これは水田稲作を経済基盤とする社会にあっては、十分に説得力のある論理である。しかし、たとえば兵庫県明石市五色塚古墳などのように、周囲に大きな可耕地がほとんど存在しない場所に大規模な前方後円墳が築かれる場合があることはよく知られている。こうした点については、古墳の可視性に関連づけて理解するなど、これまでもさまざまに議論されてきたが、本稿では、熊本県地域を例にとり、弥生時代後期集落と古墳時代前期有力首長墓の立地分析等を通じて、あらためて古墳築造の、あるいは首長墓系譜形成の背後には何があるのか、考えてみることにしたい。

①……………2つの先行研究

はじめに、地域圏と首長墓系譜との関係にかんする2つの先行研究を振り返っておこう。

都出比呂志の視点 1つは都出比呂志によるものである〔都出1989〕。都出の論にかんしまず確認すべきなのは、その根幹には小経営に対する都出特有の考え方が存在する点である〔杉井2014〕。すなわちそれは、狩猟採集社会にあっても基本的な経済単位は小経営であるというものである。つまり、人類はその歩みをはじめた当初から小経営を基本としており、大型獣の狩猟、灌漑、非自給物資の交換等を通じて小経営どうしが連鎖し、より大きな社会単位が形成されていくとの構想である。これにもとづき、都出は、消費生活の最小単位を竪穴式住居1棟に認め、そうした住居が数棟集まって世帯共同体が、さらに同一水系にあるいくつかの世帯共同体が結び付いて農業共同体が形成されると説く。そして、京都府南部から大阪府北部にかけての淀川流域の検討を通じて、「桂川流域や淀川右岸の場合、これらの首長系譜の一単位は弥生時代の中期・後期における拠点的大集落を核とする農業共同体的結合の単位と密接な関係を有している。古墳時代前期の首長は弥生時代以来の農業共同体の領有圏の一単位を基盤としており、かつ領有圏の範囲が古墳時代にも継続している」〔都出1989：p.377〕と述べ、首長墓系譜を生み出す基盤となった農業共同体の領有圏の一単位を「首長系譜の基礎単位」〔都出1989：p.383〕と呼んだ。さらに、淀川水系に「16系譜の首長墓が出揃うのは古墳時代前期後半であるが、これに先立つ前期初頭において、いち早く首長墓を築きえたのは、木津川流域では山城町椿井大塚山古墳、桂川流域では向日市元稲荷古墳、淀川右岸では高槻市弁天山B1号墳、淀川左岸では交野市雷塚古墳の各系譜のみであり、これら四つの水系の地域圏に一古墳というあらわれかたをする」〔都出1989：p.377〕と指摘し、これら4つの「盟主的首

長の母体となった乙訓や三島などの地域を『大地域』と仮称〔都出 1989 : p.383〕した。以上の内容を、小さな社会集団から順に整理すれば、次のようになる。

- ① 竪穴式住居 = 消費単位
- ② 世帯共同体 = 数棟の竪穴式住居 = 小経営の単位〔都出 1989 : p.467〕
- ③ 農業共同体 = 複数の世帯共同体 = 首長系譜の基礎単位、一例：向日グループ
- ④ 大地域 = 複数の農業共同体 = 盟主的首長の母体、一例：乙訓地域

つまり、都出は、古墳時代首長の存立基盤が、弥生時代に中小河川の水系ごとに形成された「農業共同体」的結合の領有圏にあること、そして「大地域」には複数の農業共同体を代表する盟主的首長が存在することを示したのである。

伊藤淳史の視点 こうした都出の論を再検討し、弥生時代後期に最有力であった農業共同体がかならずしも古墳時代前期初頭に盟主的首長を輩出するものでないことを示したのは伊藤淳史である〔伊藤 2005〕。伊藤は、淀川流域のうち山城地域（京都府の範囲）に焦点をしばり、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡動態と古墳時代前期初頭の古墳動向を比較した。そして、たとえば乙訓地域では、「久世グループ（中久世遺跡等）、向日グループ（森本遺跡等）、今里グループ（今里遺跡等）といった、弥生期の共同体領域」があり、うち向日グループの領域に出現期の盟主墳、元稲荷古墳が築造されるが、「少なくとも庄内期から布留期にかけての遺跡動態をみる限りにおいて、森本遺跡を含む向日グループが最有力との評価は難しい」と述べる〔伊藤 2005 : p.298〕。また、木津川右岸においては、その下流域（旧巨椋池後背低地）のグループが「庄内期に大規模な低地開発を成し遂げ」、「木津川水系、ひいては山城地域においても最有力の集団と評価される」が、出現期の盟主墳である椿井大塚山古墳は「優勢な空間と評価しがたい」中流域に築かれている点を指摘する〔伊藤 2005 : p.298〕。そして、「初期の大型古墳の被葬者については、共同体の首長がより成長してそのまま空間的な支配を拡大するような存在ではなく、在地の領域経営に直接関係しない全く異なる次元で成立している位置にある。弥生時代の農業共同体の支配領域を直接継承しているのは、いわば『中間層』や『中間首長』である共同体単位の首長であり、大型古墳の被葬者ではない」と論じた〔伊藤 2005 : p.300, 傍点は杉井による〕。つまり、都出のいう「大地域」の盟主的首長は、1つの農業共同体の順調な発展のなかから出現するような存在ではなく、農業共同体の紐帯を越えたより「広域的な集団関係の進展」〔下垣 2012a : pp.16-17.〕のなかで生み出される存在であることを指摘したのである。

共通する都出と伊藤の視点 こうして都出と伊藤の論を並べてみると、首長墓系譜の母体と農業共同体の領有圏の対応・非対応にかんして、いっけん両者が対立しているようにみえるかもしれない。しかし、「大地域」をその存立基盤とする盟主的首長の古墳、すなわち盟主墳の「移動は、それぞれの地域の自主的な動きなのではなく、全国的に連動した現象と理解しよう」〔都出 1988 : p.13〕という都出の著名な首長墓系譜論を想起すれば、都出が盟主的首長の登場をたんなる農業共同体の発展のなかのみでとらえているわけではないことは明らかである。すなわち、農業共同体のみならず大地域をも越えたより大きな社会・政治動向のなかで盟主墳の動きを理解しようとしている点で、都出の視点は伊藤のそれに通じている。

したがって、問題にすべきなのは、伊藤が述べるように「地域内においてなぜその場所に盟主墳

が築かれているのか、資料の現状ではその説明が見つからない」ことなのである〔伊藤 2005：p.302の注8〕。では、熊本県地域を題材にすれば、出現期の有力古墳の築造をどのようにとらえることができるのか。弥生時代後期集落の分析から検討を始めることにしたい。

②…………熊本県地域における弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落の消長

1 熊本県地域の地理的状況と地域区分

まず、熊本県地域の地理的状況を確認しておこう。

地理的位置 熊本県地域は九州島西側の中央に位置する。熊本県地域の西側は、北から有明海、八代海という2つの内海に面し、他方、東側には九州山地が横たわる。そのため、沖積平野はすべて西側の内海沿いにあり、有明海側では北から玉名平野、熊本平野が、八代海側では八代平野が広がっている。ただし、八代平野より南の八代海沿岸にはけわしい山地がせまっていて、鹿児島県地域の出水平野にいたるまで大きな平野は存在しない。有明海と八代海を画する宇土半島、および八代海西側に連なる天草島嶼部にも平野は少ない。一方、東側の九州山地においては、県北東部に位置する阿蘇カルデラ、および県南部の人吉盆地にまとまった平地をみることができる。

そうした熊本県地域は、前方後円墳分布の南西端にあたる。八代海北東岸に面した八代平野、および県南部の人吉盆地に前方後円墳が築かれており、これら球磨川流域が前方後円墳分布域の南西端をなしている。ただし注意が必要なのは、古墳時代前期の前方後円墳は八代平野までの分布にとどまる点である。したがって、弥生時代後期集落と出現期盟主墳との関係を探るという目的からすれば、八代平野までが本稿での検討対象である。

古墳時代の海岸線 さて、有明海、八代海とも干満差が大きな内海として知られ、とくに近世以降、大規模な干拓が行われてきた〔熊本県農政部 1971〕。そのため、古墳時代の地域圏を考えるうえで、当時の海岸線を復元することが重要である。しかし、それは容易なことではない。そこで、こころみに国土地理院発行の数値地図を用いていくつかの標高で海岸線を描いてみたところ、標高4mのラインが古墳時代の海岸線にもっとも近いのではないかと結論に達した。その理由は、標高3mで海岸線を描いた場合、近世後期(1800年代)に干拓がなされるまでは海に浮かぶ小島であった八代市大鼠蔵や小鼠蔵、高島等の山塊が陸続きになってしまうこと、他方、標高5mで描くと、地質学の成果によれば海峡になることはなかったとされる宇土半島基部地域〔佐藤 2003〕にも海が入り込み、宇土半島が九州島から切り離されてしまうことである。

こうしたことを根拠に、熊本県地域の古墳時代の海岸線を大略標高4mラインで表したいと思う。ただし、玉名平野にかんしては、『玉名郡誌』〔熊本県教育会玉名郡支会編 1923〕に付された「中古附上古玉名郡繁昌圖」を参照すれば、標高4mのラインでは陸地化が過ぎると判断されるため、「繁昌圖」にしたがって海岸線を補正し、玉名湾を表現する。また、熊本平野については、佐藤伸二によって弥生時代の海岸線が復元されており〔佐藤 1998：p.558〕、それと比べれば標高4mラインではやや海が深く入りすぎている可能性もある。しかし、いずれに合わせるべきなのか明確に判断で

きないため、遺跡分布と大きく矛盾する箇所を若干修正する以外は、ほぼ標高4mラインに合わせたい。八代平野についても、一部の修正以外は標高4mラインで海岸線を表現する。

地域区分 こうして作成した地図が、図1～3に用いたものである。これをもとに、熊本県地域の地域区分について考えておこう。(図1～3はカラー図版のため文末に掲載した。)

ところで、熊本県地域の古墳時代を考察するとき、熊本平野を西に流れる白川の下流域を境にしてその北部と南部に地域区分されることがある。白川下流域に前方後円墳が分布しない点を念頭におけば、こうした地域区分に一定の意味を認めることは十分に可能である。たとえば、この地域区分にしたがい、古墳時代中・後期における埋葬施設構造の地域差を明らかにした高木恭二・藏富士寛の視点はきわめて示唆に富む[高木・藏富士1998]。しかし、以前にも指摘したことがあるが、2つの内海ごとに、すなわち有明海側と八代海側に大きく二分する視点も有効である[杉井2010]。とくに八代海沿岸でもその北半部は、砂岩製箱式石棺や石障系横穴式石室などの在地墓制を共通して発達させるなど、地域的な一体性が顕著である[杉井編2009]。また、宇土半島を、有明海と八代海を画する存在と認めることによって、境界域としての宇土半島基部地域の地理的重要性がよりいっそう明確になる。このことは、後述するように、宇土半島基部地域にいち早く前期の前方後円墳が築造されることの背景を探るうえでも重要な論点になると考える。

以上の観点により、本稿では熊本県地域を北部の有明海側と南部の八代海側に大きく区分する(図1, 表1)。それぞれの内海には九州山地に源を発する河川が流入するが、有明海側では菊池川や白川、緑川が、八代海側では氷川や球磨川がその代表的なものである。そうした河川の流域ごとに小地域を区切ることを基本とするが、熊本平野や宇土半島、天草島嶼部など、地形的なまとまりを優先させた地域もある。以下に、若干説明しておこう。

熊本県地域の北部を流れる菊池川の流域は、主としてその下流域と中流域に区分する。阿蘇外輪山の北西斜面を発した菊池川は、菊鹿盆地を西流したのち狭窄部にいたり、そこで流れを南に変えて玉名平野に到達する。その狭窄部から玉名平野までの南流域を下流域、菊鹿盆地周辺を中流域と認識する。菊池川下流域左岸に合流する木葉川の最上流域は、金峰山東麓を南流する井芹川との分水界にあたる。その木葉川から井芹川へのルートは現在のJR鹿児島本線のルートと一致する。

菊鹿盆地のほぼ中央で菊池川の左岸に合流する合志川は、いまでは菊池川の一支流である。しかし、以前にも指摘したように、とくに古墳時代中期においてはその流域に高熊古墳(熊本市北区植木町、前方後円墳)などの有力古墳が多く築かれることから1つの独立した地域ととらえる方が適切と考える[杉井2012]。また、合志川の支流、小野川をさかのぼって分水界を越え、今度は南流する坪井川を下ると熊本平野に達するが、この道筋は菊池川中流域の菊鹿盆地と白川下流域の熊本平野北部とを結ぶ古墳時代の重要な内陸ルートの1つである[杉井2012]。合志川流域はそうしたルートの中に位置する点でもきわめて重要な地域なのである。

熊本平野には多くの河川が存在しており、それら河川の流域ごとに地域を区切ることも十分に意味のあることだと考える。しかしここでは、井芹川、坪井川、白川それぞれの下流が近接して流れる北部と、加勢川、緑川、浜戸川が西流する東部に大きく区分することにしたいと思う。上述したように、井芹川・坪井川は、熊本平野北部と菊池川下・中流域とをむすぶ重要なルートを形成する。また、白川は熊本平野北部と阿蘇カルデラをむすんでおり、さらに東に進めば大分県南西部地域(大

表 1 熊本県地域の地域区分と弥生時代後期・古墳時代の代表的な遺跡・古墳

海域	地域区分				弥生時代後期の代表的な遺跡			代表的な古墳・墳墓 (▲は前方後円墳)				
	河川水系など				環濠集落	その他の遺跡 (左は青銅器出土遺跡)		前期	中期	後期		
有明海側	菊池川流域	下流域	平野部右岸	玉名湾周辺	西部	行末川流域			▲院塚			
				北部		築地館跡、塚原	山田松尾平、高岡原、大原	▲藤光寺				
			東部			柳町	岩崎城跡		伝左山	▲稲荷山		
			南部				玉名平野条里跡			▲大坊		
			平野部左岸			野部田		▲天水大塚	天水経塚			
		木葉川	下流域				稲佐津留					
			上流域			ラスギ?		▲山下				
		狭窄部	江田川	右岸			諏訪原	前田		▲若宮		
				左岸						▲江田船山		
				久米野川	下流域							
	中流域	和仁川上流域	西半部	右岸	岩野川下流域						▲チブサン	
					岩野川下流域左岸				竜王山	▲銭亀塚		
					菊池川沿い	方保田東原、桜町、古閑白石?					▲中村双子塚	
					上内田川中流域	蒲生・上の原、津袋大塚?			津袋大塚			
					上内田川上流域							
				左岸	岩原川流域					▲岩原双子塚		
					千田川流域				城尾屋敷			
				東半部	右岸	上内田川下流域	うてな					
					左岸	米原台地						▲木柑子フタツカサン
				上流域	河原川下流域					藤田上原		
	合志川流域	下流域	右岸			小野崎						
				左岸				北無田				
			中流域	右岸							慈恩寺経塚	
左岸							高熊?、石立、八反畑、藤巻			▲高熊		
上流域		左岸	塩浸川流域									
			豊田川流域			陣ノ内						
			下岩野川流域						▲塚園1号			
			小野川流域			石川			▲石川山 ▲横山			
矢護川下流域					古閑下							
矢護川上流域					井坂上ノ原							
					矢護川日向							
井芹川	上・中流域			五丁中原		扇田		富ノ尾				
坪井川	上・中流域			小糸山、梶尾								
白川	中流域	上流域	立野火口瀬以西		弓削山尻、法王鶴	石原亀甲、長嶺	梅ノ木、下南部					
			阿蘇カルデラ内	白川・黒川合流点	西弥護免	立石、瀬田美	中島宝満鶴					
	北半部	東側	阿蘇谷	宮山、狩尾・湯の口	小野原A、下扇原、下山西	陣内		▲長目塚				
			南郷谷	南郷、幅・津留		柏木谷		柏木谷	檜崎山5号			
熊本平野	北半部	東側	金峰山南麓									
			現井芹川下流域		戸坂	千原台、野添平						
			現坪井川・現井芹川下流域		上高橋高田							
			白川・現坪井川下流域		二本木、八島町							
			白川下流域				八ノ坪					
	東部	加勢川流域	江津湖周辺	江津湖、神水								
			秋津川流域			梨木、古閑北、古閑						
			木山川流域									
		緑川流域	下流域	矢形川流域	二子塚	塔平		井寺				
			右岸	御船川流域	御幸木部?			小坂大塚 ▲長塚				
浜戸川流域	下流域	右岸	新御堂			西天神原						
		左岸					▲琵琶塚 ▲花見塚					
宇土半島北岸							城1・2号					
宇土半島基部	北半部	東側	潤川流域	下流域	境目、畑中		▲潤野3号		▲男塚、▲女塚			
			上流域		古保山打越							
宇土半島南岸	南半部	東側	大野川流域		藪	城山	▲城ノ越、▲天神山					
							▲向野田					
宇土半島南岸							▲弁天山	▲国越、▲仁王塚				
砂川流域	左岸	丘陵部					清水甲					
氷川流域	右岸	丘陵部							▲大野窟			
		平野部						▲大王山1号	▲野津古墳群			
球磨川流域	下流域	右岸	平野部					▲有佐大塚				
			左岸			用七、上日置女夫木	西方園田		▲八代大塚			
佐敷川周辺	水俣川周辺	上流域	人吉盆地	西部	人吉市周辺				田川内1号			
				中部	錦町・あさぎり町周辺	中通、入口		楠木山	大蔵蔵尾張宮			
		東部	多良木町・湯前町周辺	夏女			▲亀塚	才園				
									千人塚、赤坂			
天草	三角・大矢野・松島地域			長野			千崎	千崎、カミノハナ				
島嶼部	上島南半以南地域			上木原			妻の鼻	楠浦新田				

野川上流域)や宮崎県北西部地域(五ヶ瀬川上流域)に到達する。つまり、井芹川、坪井川、白川のいずれもが熊本平野北部とその周辺地域とをつないでおり、そうした3つの河川の流れが集中する下流域を熊本平野北部地域として1つにとらえたいのである。こうした認識は、加藤清正によって河川改修がなされるまでは、いまの熊本城の南方付近でこれら3つの河川が1つに合流していた事実にも合致するものである。したがって、井芹川、坪井川、白川の流域については、その下流域と中・上流域とが地域区分のうえでは分離されることになる。さらに白川流域は、中流域と上流域にも区分され、阿蘇カルデラはその上流域に含まれる。一方、熊本平野東部地域については、加勢川、緑川、浜戸川の流域ごとに地域を細分する。また、加勢川流域においては湧泉地帯の江津湖周辺も1つの独立した小地域として認識する。

さて、八代海側では、いまでこそ広大な八代平野が広がっているが、干拓地をのぞけば平地は河川流域ごとに発達した小規模な沖積地に限定されるようである。したがって、砂川や氷川、球磨川などの河川流域ごとに地域区分することが適当である。なお、球磨川上流域は人吉盆地部にあたる。

有明海と八代海を画する位置には宇土半島と天草島嶼部が存在する。それらもそれぞれが独立した地域をなすが、なかでも宇土半島の基部地域は、有明海側と八代海側をつなぐ位置にある点で地理的にきわめて重要な地域である。宇土半島基部地域は、半島側からの丘陵がいったん途切れ、そこに幅のせまい平地部が形成されたのち、ふたたび東側に丘陵が広がるという地形をなす。現在その幅のせまい平地部をJR九州新幹線や鹿児島本線、旧国道3号線(現県道14号線)が通過していることから推測されるように、古来、そこは交通の要衝であったと考えられる。

2 土器編年

次に、熊本県地域における弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器編年を、甕形土器(以下、甕と表記)に視点をすえて概観しておこう(図4,表2)。

乙益重隆によって熊本県地域の弥生時代土器編年の大綱が示されて以降[乙益1964]、雑誌論文や発掘調査報告書における考察などといったさまざまなかたちで当該地域の弥生時代後期前後の土器編年が検討されてきた[引用・参考文献のうち(*)を付した文献]。本稿は土器編年を議論するものではないが、集落の消長を考察するうえでは、集落で出土した土器を編年的に位置づける作業が不可欠になる。そこで、これまでに提示されてきた諸論を参照しつつ、主として甕を基準に集落の消長を考えることにしたい。

熊本県地域の弥生時代後期の甕は脚台を有し、その口縁部がくの字形であることを特徴とする。それは、黒髪式とされる中期後半の甕からの型式変化でとらえられる。すなわち、黒髪式の甕も脚台をもつが、その口縁部形態は上面が内傾したT字形をなす(図4-1・2)。そうしたT字形口縁の内面側における突出部が縮小、消滅する方向に口縁部形態が変化し、くの字形口縁となるのである。中期と後期の甕は、このくの字形口縁の出現によって画される[木崎1996:p.228,原田1999b:p.33]。

その後、長胴化とともに胴部最大径の位置が上位から中位に移動し、またとくに白川流域では脚台が長くなるなどの変化を示す(同11~13)。しかし、本稿では外面調整の変化のみを問題とした。すなわち、ハケ目のみなのか(同3~8)、あるいはハケ目のほかにタタキ目もみられるのか(同9~13)で前後に二分する。

それらの次の段階に、脚台が失われた長胴丸底甕を置く（同14～16）。土器系統の分類をもとにした近年の議論では、この脚台を消失した長胴丸底甕の出現、すなわち甕の丸底化をもって古墳時代の開始と認識する見解が有力である〔檀2011b, 福田2011a・2011b・2012〕。脚台の消失は、土器の形態変化にとってはきわめて急激なものであり、順調な型式変化のなかで理解するには無理がある現象である。したがって、その変化の背景には脚台を付さない甕を用いる他地域からの強い影響があったことが想定され、そこに時代の画期をみいだす視点は十分に理解できるものである。ただ、のちにもみるように、長胴丸底甕の段階にまで環濠が維持される集落が少なくないことには細心の注意が必要であり、そのことは、時代をどこで区切るのか、あるいは環濠集落のありかたについての議論を呼ぶものと思われる。また、甕に脚台を付さないという情報がどの地域から直接もたらされたのかについても、まだ十分な議論が尽くされていないと思う。本稿の主題ではないのでここの検討は避けるが、きわめて興味深い問題である。

そして次に、球形胴丸底甕を置く。外面調整にタタキ目がみられ、その多くはいわゆる近畿第V様式系統(B系統)あるいは庄内式系統(C系統)の土器に相当すると思われる(同17～19)。そして、タタキ目をもたない布留式系統(D系統)の球形胴丸底甕(同20～22)が主体となる段階が次に来る。

以上のような基準で集落出土の甕を分類し、表2にはそれらの有無を段階的に示した。ただし、系統分類にもとづく土器編年研究から教えられるのは、異なった系統の土器であっても同時期に存在することは何らめずらしいことではないという点である〔久住1999, 檀2011b〕。なかでも、長胴丸底甕から球形胴丸底甕にかけてはその傾向が強いと思われる。そのため、表2は、あくまで型式ごとの出土の有無のみを示したものとしてみる方がよりふさわしいのかもしれない。しかし、集落動向の大局は十分に示していると考ええる。

そこで次項では、この表2をもとに、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての主要な集落の消長を地域ごとにみていくことにしたい。なお、表2には遺跡の内容を調査回数ごとに示してある。同一遺跡が複数の欄にわたって示される場合があるのはそのためである。

3 集落の消長

まず、熊本県地域の弥生時代後期集落にかんする近年の先行研究をいくつか振り返っておこう。

1つめは宮崎敬士によるものである〔宮崎1995〕。この論考で重要なのは、弥生時代後期の環濠集落の集成が行われ、それらの消長が明示された点である。そして、環濠集落分布の中心は菊池川流域にあること、ほとんどの環濠集落は弥生時代後期末に廃絶することが示された。また、現在も未報告のままである発掘調査資料についても解説が付されている点は、本稿を作成するうえで大いに参考になった。

2つめは原田範昭の論考で、熊本平野部を中心に、その弥生時代中期から後期の集落動向が分析された〔原田1999a〕。そのなかで、中期の拠点集落は有明海に面した低地や河岸段丘の低位面に、一方、後期は丘陵上に立地するとの指摘がなされた点は重要である。また、熊本平野周辺の遺跡については正式報告がなされていないものが多いため、原田が示した各遺跡の消長表はいまなおきわめて有用である。

3つめは西山由美子の論考である〔西山2009〕。そのなかで、熊本県地域では弥生時代の水田遺

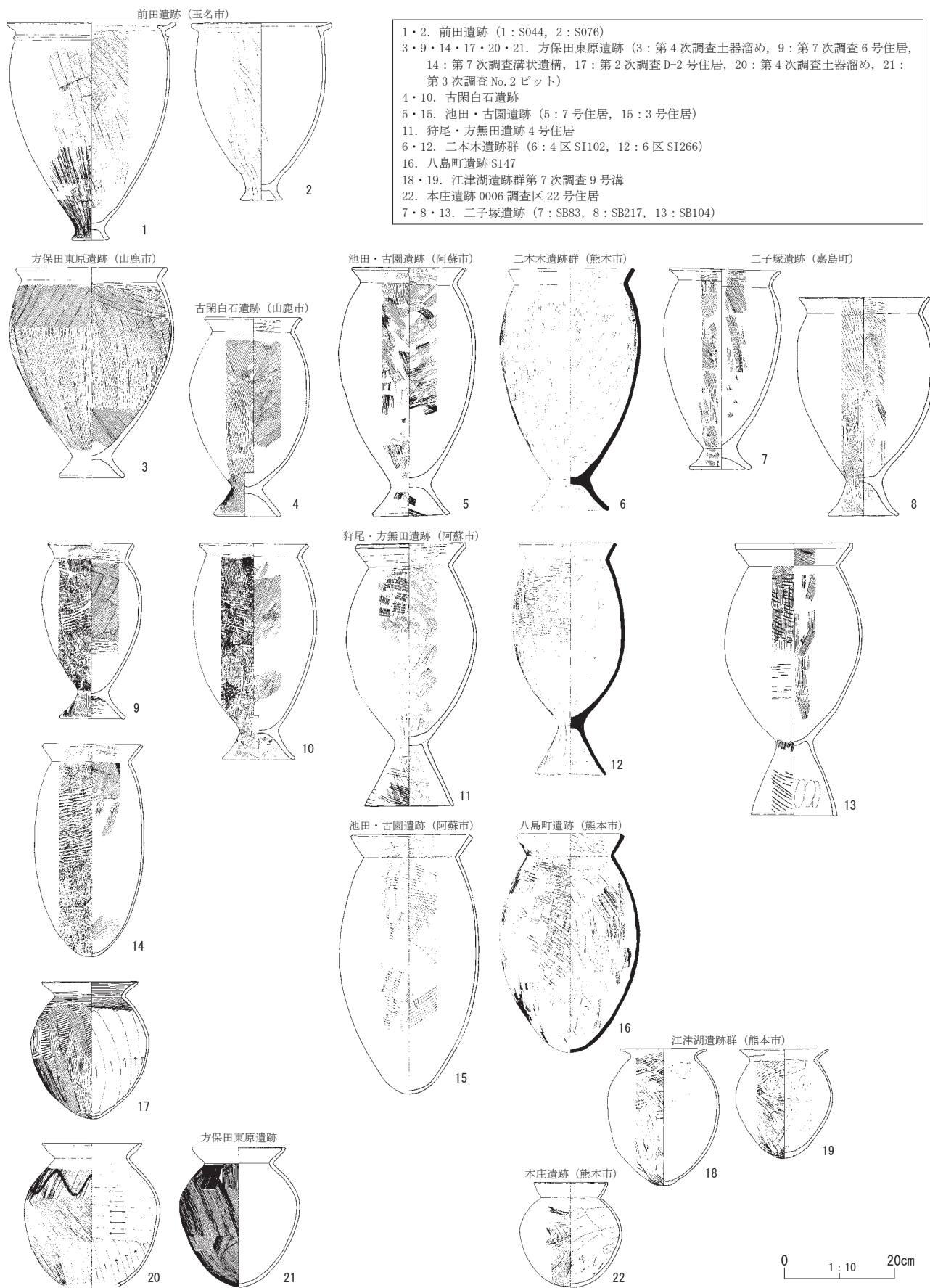


図4 熊本県地域における弥生時代後期前後の甕の変遷

構の検出例は2例のみと指摘され、当地域では生産域と集落を関連させた分析がきわめて困難であることが示された。

最後に福田匡朗による論考である〔福田2014〕。福田は系統分類による土器編年を行い、上述したように脚台が失われた長胴丸底甕の段階から古墳時代とみなすため、多くの弥生時代後期集落が古墳時代初頭あるいは前期にまで継続すると評価した。福田はそのことを「概ね長期に渡る拠点集落の衰退期は、古墳前期といえる」と表現する〔p.149〕。そして、「古墳前期以降まで存続と思われる集落としては、菊池川流域では菊池市小野崎遺跡、玉名市柳町遺跡、白川下流域の熊本市神水遺跡などが存在するが、集落数、遺構数ともに激減している」と指摘する〔p.151〕。弥生時代後期の集落がどの時代のどの段階で廃絶するのかについての評価は、土器編年と時代区分との対応関係をどのように考えるのかによって大きく異なってくる。したがって、集落廃絶時期についての福田の見解は上述の宮崎敬士とはまったく相違するが、しかし、弥生時代の終末から古墳時代の初期のある時期に一部をのぞいて多くの集落が廃絶に向かうという現象をとらえている点では共通する。ここでは、そのことを重視したいと思う。

では、以上のような先行研究をふまえ、以下で主要な集落の内容を検討していこう（表2、図2）。

（1）菊池川下流域

玉名湾周辺 上述したように、「中古附上古玉名郡繁昌圖」〔熊本県教育会玉名郡支会編1923〕にはいまの繁根木八幡宮付近にまで海が入り込んでいる様子が描かれている。それにもとづき図1～3では玉名湾を表現したが、その周辺は山田川流域を中心とした西部、繁根木川流域から菊池川下流域右岸を中心とした北部、菊池川下流域左岸の東部に区分される。

玉名湾周辺の西部では、2km四方程度の範囲に遺跡が密集する。小面積の調査が多いなか、6000m²以上が調査された築地館跡（玉名市、表2・図2-5）では断絶部を有する溝が検出された。環濠とその出入口部と思われる。集落はタタキ・ハケ調整脚台付長胴甕の段階（弥生時代後期後半）で断絶する。一方、山田松尾平遺跡（玉名市、10）では、脚台付長胴甕の段階からハケ調整球形胴甕の段階まで、すなわち弥生時代後期から古墳時代前期まで継続して集落が営まれており、南西に約1kmしか離れていない上述の築地館跡とはまったく異なった様相を示す。包含層からは破鏡1点が出土している。山田松尾平遺跡の南約500mに位置する高岡原遺跡（玉名市、12）は、小規模調査が多いため全体の様相をとらえにくいだが、遺構の分布密度が高い点、小型仿製鏡1点、鏡片1点が出土している点から、後期の有力集落の1つであったと推測される。タタキ・ハケ調整脚台付長胴甕の段階で集落が終焉を迎えるようである。集落ではないが、東南大門遺跡（玉名市、8）も注目される遺跡である。そこでは、弥生時代中期の甕棺墓群、およびその一部を破壊して造営された墳丘墓が検出された。墳丘墓の周溝からは貼石と思われる多数の石材や、脚台付長胴甕からハケ調整球形胴甕までを含む多くの土器が出土した。周溝からは古墳時代に属す型式の柳葉式銅鏃も1点出土しているため、墳丘墓の時期は古墳時代前期前葉の可能性が高い。熊本県地域では古墳時代の銅鏃はきわめて少なく、なかでも銅質の良好なものとしてはほかに後述する方保田東原遺跡（山鹿市）の出土品があるのみである。なお、近年、塚原遺跡⁽¹⁾や大原遺跡（いずれも玉名市岱明町、順に14・13）といった有力な後期集落の発見が相次いでいる。塚原遺跡では環濠が、大原遺跡では

破鏡 2 点、小型仿製鏡 1 点と弥生時代の銅鏃が検出されている。

玉名湾周辺の北部のうち、繁根木川右岸の台地上には、小園遺跡や岩崎城跡（いずれも玉名市、順に 16・17）といったタタキ・ハケ調整脚台付長胴甕の段階（弥生時代後期後半）で断絶する集落が存在する。一方、繁根木川左岸から菊池川右岸までの範囲は標高 5m 前後の低地となっており、その全体が玉名平野条里跡とされている。そのなかに柳町遺跡と両迫間日渡遺跡が立地しており、そのため名称が異なってもこれら 3 つの遺跡は相互に密接に関連している。したがって、玉名平野条里跡、柳町遺跡、両迫間日渡遺跡（いずれも玉名市、18～21）をまとめて検討すると、脚台付長胴甕の段階（弥生時代後期）には比較的菊池川右岸に近い場所に堅穴式住居が築かれていたが（玉名平野条里跡古閑前地区、21）、球形胴甕の段階以降（古墳時代前期）になるとその西側（両迫間日渡遺跡、柳町遺跡）や繁根木川左岸近く（玉名平野条里跡 C 地点）に居住域が移動するようである。なお、両迫間日渡遺跡では、弥生時代終末から古墳時代前期前葉、および古墳時代前期中葉から後葉の 2 面の水田遺構が検出されている。また、柳町遺跡では銅鏡片 2 点が出土している。

玉名湾周辺の東部では野部田遺跡（玉名市天水町、23）が重要である。熊本県地域における弥生時代後期の土器型式、野部田式の標識遺跡である[乙益 1964]。しかし、野田拓二も指摘するように[野田 1982]、乙益重隆によって示された甕のなかには球形胴のものも含まれるため、野部田遺跡出土土器は弥生時代後期後半から古墳時代前期の時期幅のなかでとらえられるべきものである。ただ、環濠と思われる幅 4m、深さ 1.2m の溝が検出されたと報告されている点は重要で[田辺 1953]、弥生時代後期の環濠集落であることを推測させる。また、環濠の埋没時期は不明ながらも、弥生時代後期後半から古墳時代前期にまで集落が継続した可能性が高い点も指摘できる。

木葉川流域 西流する木葉川が玉名平野に入る直前の右岸台地上に稲佐津留遺跡（玉東町、25）が、そのすぐ西側の木葉川河道沿いには北の崎遺跡（玉名市、24）が存在する。そこは、玉名平野の東方の出入口に相当する場所である。さて、稲佐津留遺跡では脚台付長胴甕から球形胴甕までが出土しているが、脚台を付さない長胴丸底甕の段階がきわめて希薄である。注目されるのは破鏡 1 面、小型仿製鏡 1 面のほか、巴形銅器片も 1 点出土している点で、弥生時代後期における有力集落の 1 つであったことは確実である。また、二対縦横タイプの半環状把手[杉井 1994]を有す山陰型甕形土器が山陰系の複合口縁甕や低脚坏をともなって出土している点も重要で、古墳時代前期前半には山陰地方ときわめて密な交流関係にあった様子がうかがえる。なお、熊本県地域で確認されている山陰型甕形土器はこれのみである。一方、北の崎遺跡では、集落がいったん弥生時代中期で断絶したのち、今度はタタキ・ハケ調整球形胴甕の段階（古墳時代前期初頭？）からふたたび居住が開始され、古墳時代中・後期にまで継続する。弥生時代中期は北の崎遺跡、後期は稲佐津留遺跡と弥生時代のあいだは両遺跡が補完関係にあるが、古墳時代前期には並存する。

木葉川の最上流域は、熊本平野北部へ流れる井芹川の最上流域でもあるため、地理的には菊池川下流域と熊本平野北部地域の間地点と評価すべき場所であるが、ここで言及する。当地域に所在するヲスギ遺跡（熊本市北区植木町、28）は、脚台付長胴甕でもハケ調整の段階（弥生時代後期前半）を中心とした集落および墓域である。環濠集落の可能性が指摘されている[宮崎 1995]。小型仿製鏡 1 点、弥生時代銅鏃 1 点が出土している。なお、ヲスギ遺跡のすぐ北には中細形銅矛 4 点が出土した轟遺跡（熊本市北区植木町）が位置しており、当地域は弥生時代中期から物資流通の 1 つ

の拠点であったことがうかがえる。

狭窄部 当初西流していた菊池川は、両岸に丘陵がせまる狭窄部で流れを南に変え、玉名平野に流れ出る。その狭窄部の最終地点、江田川の合流点付近に諏訪原遺跡（和水町，30）および前田遺跡（玉名市，29）が存在する。熊本県在住者以外には、江田船山古墳のある清原古墳群のすぐ北側といった方がわかりやすいだろう。さて、諏訪原遺跡は菊池川左岸の台地上に位置する大規模な環濠集落である。九州縦貫自動車道の建設にともなって発掘調査され、その後も小規模な調査が周辺で幾度か実施されている。しかし、九州道関連の調査については簡単な概要が示されたのみである。したがって、全体の様相には不明なところが多いが、脚台を付さない長胴丸底甕の段階で集落が断絶したと思われる。前田遺跡は菊池川右岸の自然堤防上にあり、黒髪式段階（弥生時代中期後半）からハケ調整脚台付長胴甕の段階（後期前半）までの集落である。タタキ・ハケ調整脚台付長胴甕は出土していない。

（2）菊池川中流域

結論を先取りするが、弥生時代後期において熊本県地域でもっとも有力な地域は、今から述べる菊池川中流域、およびその次に述べる合志川下流域である。環濠集落が近接していくつも営まれている点、多くの銅鏡がもたらされている点に特色がある。

菊鹿盆地西半部菊池川右岸沿い 菊鹿盆地西半部の菊池川右岸台地上には、1～1.5km程度の間隔において3つの環濠集落が並存する。西から桜町遺跡、古閑白石遺跡、方保田東原遺跡（いずれも山鹿市、順に33・34・36）である。それらのうち、桜町遺跡および古閑白石遺跡は脚台付長胴甕の段階（弥生時代後期）のうちに環濠が埋没し、集落の終焉を迎えると考えられる。一方、方保田東原遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期まで途切れることなく営まれた集落である。方保田東原遺跡のこうした性格については多くの先学が指摘しているが、ここでも若干の検討を行っておこう。

遺跡推定面積35万m²のうちおよそ3分の1が国史跡に指定されている方保田東原遺跡では、開発にともなう事前調査のほか、範囲・内容確認のための調査もさかんに実施されてきた。発掘調査担当者以外のものにとって、そうした小規模調査の内容を総括する作業はきわめて難しく、遺跡の全貌を明確に知りえない。そのため、当遺跡の内容を検討する際には、まずはもっとも基本となる初期の発掘調査報告書〔表2文献44：中村ほか編1982〕に頼ることになる。そこでは第1～4次調査の内容がまとめられ、出土土器がⅠ期からⅤ期に編年された。本稿との関連では、Ⅰ期が黒髪式以前、Ⅱ期がハケ調整脚台付長胴甕、Ⅲ期がタタキ・ハケ調整脚台付長胴甕、Ⅳ期が長胴丸底甕からタタキ・ハケ調整球形胴甕、Ⅴ期がハケ調整球形胴甕の段階におよそ対応する。そのⅡ期からⅤ期に相当する竪穴式住居が確認されているため、弥生時代後期から古墳時代前期まで、人が継続して居住していたことは明らかである。また、近江工業内トレンチ検出の1・2号溝はタタキ・ハケ調整脚台付長胴甕の段階、農協東側トレンチ検出の溝は脚台を付さない長胴丸底甕の段階で埋没しており、集落にともなう溝は弥生時代終末から古墳時代初期にかけての時期に機能を失っていることも知ることができる。この後者と同様、脚台を付さない長胴丸底甕の段階に埋没した溝は、第7次調査〔表2文献43：中村編1987〕や平成14年度調査151番地〔表2文献49：山口編2007〕などでも検出され

ており、それは弥生時代後期に掘削された溝の終焉時期の一端を示している。しかし、出土文化財管理センター建設予定地（第11次調査）で検出された10号溝〔表2文献50:中村編2008〕やサンチェリー工業地内の2・4号溝〔表2文献51:中村編2009〕などのように、タタキ・ハケ調整球形胴甕の段階、おそらく古墳時代前期初頭にまで機能が維持されたと考えられる溝も存在する点には十分な注意が必要である。こうした時期にまで続く溝は、後述の江津湖遺跡群（熊本市東区）をのぞいて他遺跡では確認できず、方保田東原遺跡を特徴付けるものと考ええる。さらに注目されるのは、第5次調査の3号西側溝〔表2文献45:中村ほか編1984〕や平成3年度調査32-2番地の3号溝〔表2文献46:中村編1992〕などのように、出土する甕のほとんどがタタキ・ハケ調整球形胴甕あるいはハケ調整球形胴甕である溝が確認されている点である。こうした溝が平面的にどのようにのびるのかは不明であるが、古墳時代前期に新たに掘削された溝が存在する点は重要で、首長居館にともなう溝となる可能性も考えられる。なお、2008年の段階で、青銅器は銅鏡10点、銅鏃9点、巴形銅器1点が出土しているとのことである〔表2文献51:中村編2009〕。篋被を有するものなど、古墳時代に位置付けられる銅鏃が数点含まれている。

菊鹿盆地西半部上内田川中流域 菊鹿盆地のほぼ中央において、菊池川の右岸には迫間川が、左岸には後述の合志川が合流する。その迫間川最下流域の右岸に注ぐのが上内田川で、これら両河川の下流の一部は山鹿市と菊池市の市境をなしている。そうした上内田川の中流域右岸に位置するのが、蒲生・上の原遺跡（山鹿市、38）と津袋大塚遺跡（山鹿市鹿本町、39）である。いずれも環濠集落で、蒲生・上の原遺跡は台地上に、津袋大塚遺跡は同じ台地の南東側中腹に立地している。両遺跡は600mほどしか離れていない。

津袋大塚遺跡では、ハケ調整およびタタキ・ハケ調整の脚台付長胴甕を包含する溝の一部が検出された。しかし、集落の全体像は不明である。一方、蒲生・上の原遺跡では、環濠の様相が一定程度明らかにされた。図5-1によって説明すれば、環濠は2条で一組をなし、当初は台地東端部を小さく囲うものであった（濠Ⅰ・Ⅴ）。ハケ調整脚台付長胴甕の段階である。濠Ⅰ・Ⅴが埋没すると、今度は濠Ⅱ・Ⅲが新たに掘削され、集落は西側に大きく拡大した。そして、タタキ・ハケ調整脚台付長胴甕の段階（弥生時代後期後半）のうちに集落は廃絶を迎えることになった。このように、近接する津袋大塚遺跡と蒲生・上の原遺跡は、その消長が類似すると考えられる。

菊鹿盆地東半部上内田川下流域 上内田川の下流域左岸台地上には、環濠集落のうてな遺跡（菊池市七城町、41）が存在する。1990～1991年調査で検出された溝は10号-A溝および10号-B溝の2条である。10号-A溝はハケ調整脚台付長胴甕、10号-B溝は脚台を付さない長胴丸底甕の段階に中心があり、タタキ・ハケ調整脚台付長胴甕の段階がきわめて希薄である。10号-B溝の廃絶後、同じ場所に方形周溝墓が築造される。周溝墓の時期は、タタキ・ハケ調整球形胴甕の段階（古墳時代前期初頭?）以降である。環濠の機能が停止したあとは、その場所が墓域として利用された状況がうかがえる。ただし、正式には未報告であるが、弥生時代後期の住居と同じ場所で古墳時代前期に位置付けられる住居も確認されているようであるから〔表2文献57:高木1990〕、環濠埋没後も集落は維持されたとみられる。なお、10号-A溝から小型仿製鏡片1点、弥生時代銅鏃1点、城ノ山Ⅱ区57号住居から小型仿製鏡1点〔南2007〕、城ノ上Ⅰ区31号住居から貨泉1点が出土している。

(3) 合志川流域

合志川は阿蘇外輪山の西側を発し、西流したのち菊池市と合志市、熊本市北区植木町の行政界付近で流れを北に変え、菊鹿盆地のほぼ中央で菊池川の左岸に合流する。その北流部を下流域、西流部のうち矢護川との合流点付近以西を中流域、以東を上流域と区分する。先にも記したように、合志川は菊鹿盆地と熊本平野北部地域とを結ぶルートの一部をなしている。

下流域 小野崎遺跡（菊池市七城町，46）は、菊池川と合志川にはさまれた台地の西端に位置する。およそ350棟の竪穴式住居や大量の土器を包含する多条の溝が検出された。また、銅鏡9点、銅鏡片3点、銅釘1点、弥生時代銅鏃1点と、上述の方保田東原遺跡に匹敵する数の青銅器が出土している。こうしたことから、きわめて有力な大規模環濠集落であったと推測される。脚台を付さない長胴丸底甕の段階まで環濠が維持された可能性が高い。しかし、報告書の記述が不十分なためその実態には不明なところが多い。北無田遺跡（熊本市北区植木町，48）は、合志川が西から北へその流れを変えた付近の右岸にある。脚台を付さない長胴丸底甕の段階以降（古墳時代前期）に営まれた集落である。報告書のなかで住居形態の変化と土器編年との対応関係が検討されており、長方形プラン2本主柱の住居から方形プラン4本主柱の住居への変化が生じたのは古墳時代前期後半（北無田Ⅲ期）と評価された〔檀2003〕。

中流域 合志川中流域の左岸台地上に石立遺跡、八反畑遺跡（いずれも合志市，順に50・52）が所在する。石立遺跡では、円弧を描きながら並行して走る3条の溝が検出された。環濠と考えられ、ハケ調整脚台付長胴甕から脚台を付さない長胴丸底甕の段階まで継続する。一方、八反畑遺跡でも環濠と思われる溝が検出されているが、その時期はハケ調整脚台付長胴甕の段階のみである。これら2つの遺跡よりやや東の左岸平野部には藤巻遺跡（菊池市泗水町，53）が存在する。その16区で検出された溝SD1601が環濠であると推測されている。ただ、報告内容のみからその継続時期等を読み取ることはきわめて難しく、今後のさらなる検討を必要とする。塩浸川は、石立遺跡や八反畑遺跡が立地する台地の南を北西に流れ、合志川中流域左岸に合流する。その塩浸川の最上流域に所在する陣ノ内遺跡（合志市，55）では、環濠と推定される2条の溝が検出された。中心とする時期は、脚台を付さない長胴丸底甕の段階と考えられる。

上生川は合志川の流れが西から北へ変わる箇所の左岸に合流し、南流する小野川はそうした上生川の最下流域左岸に合流する。石川遺跡（熊本市北区植木町，57）は、小野川右岸の台地上に位置している。集落の中心とする時期は、タタキ・ハケ調整脚台付長胴甕から脚台を付さない長胴丸底甕の段階までである。小型仿製鏡の破片が1点出土している。

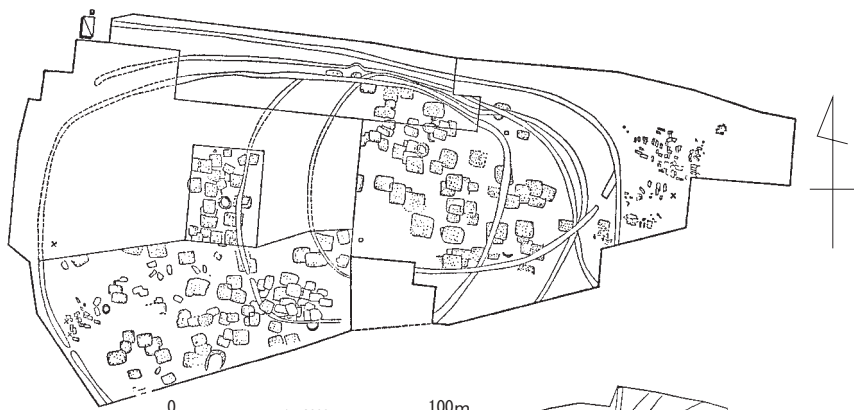
なお、下岩野川と小野川にはさまれた台地の北端に位置する高熊遺跡（熊本市北区植木町，49）では、高熊古墳（古墳時代中期中葉の前方後円墳）の周溝に切られた状態の溝が検出され、タタキ・ハケ調整脚台付長胴甕の段階を中心とした土器が出土した。これも弥生時代後期の環濠集落であったと考えられる。

(4) 井芹川上・中流域

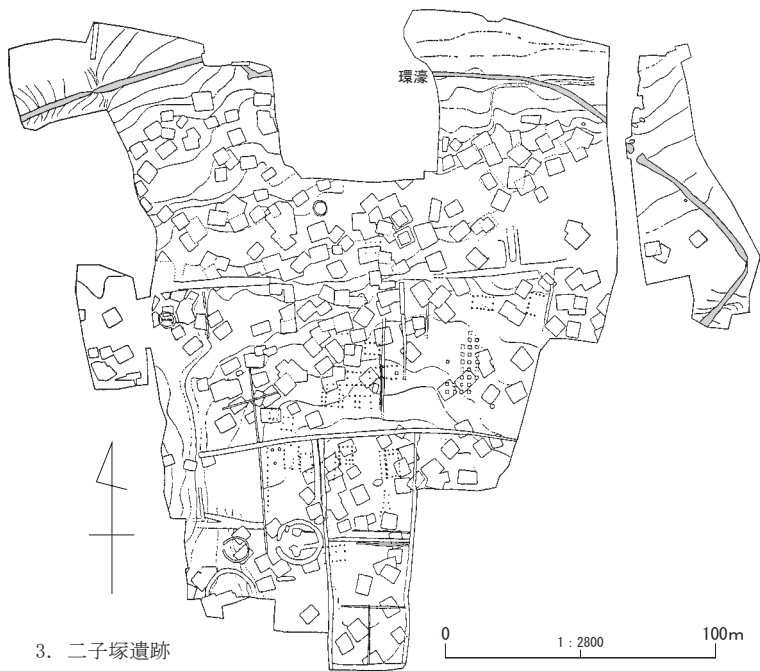
木葉川とその源流地域をともしする井芹川は、金峰山西麓を南流し、現在、花岡山の北側を南西に流れたのち金峰山南麓で坪井川右岸に合流する（図1）。しかし、井芹川が花岡山の北側を流れる



1. 蒲生・上の原遺跡



2. 西弥護遺跡



3. 二子塚遺跡

図5 熊本県地域における弥生時代後期の環濠集落

ようになったのは、昭和初期（1931～1935年）に実施された付け替え工事以後である。それ以前は花岡山の東側を南に流れており、加藤清正による河川改修が行われるまでは、いまのJR熊本駅近くで白川に合流していた。

そうした井芹川中流域右岸の台地上に五丁中原遺跡（熊本市北区貢町・和泉町，63）が存在する。簡単な報告しかなされていないため詳細は不明であるが、巴形銅器1点、小型仿製鏡1点、弥生時代銅鏃1点が出土していることからもうかがえるように、有力な環濠集落であったことは確実である。五丁中原遺跡のすぐ南、谷筋を1つへだてた台地上に所在する扇田遺跡（熊本市北区貢町，64）は、ハケ調整脚台付長胴甕段階の小集落である。その報告書において、弥生時代後期初頭ないし前半のうちにおさまる扇田遺跡から、後期中頃から後期後半を盛期とする五丁中原遺跡へ集落が移動した可能性が指摘されている〔表2文献79：林田編2004：p.224〕。

（5）坪井川上・中流域

上述したように、合志川とその支流の小野川、そして坪井川をつたうルートは、菊鹿盆地と熊本平野北部地域とを結ぶ重要な内陸ルートである。そうした坪井川の上・中流域には、有力な弥生時代後期集落がいくつか分布する。

小糸山遺跡群（熊本市北区明德町，66）は坪井川上流域の右岸、梶尾遺跡群（熊本市北区梶尾町，68）は左岸の台地上に立地する。いずれも弥生時代後期の環濠集落と考えられるが、正式報告がなされていないため、集落の継続時期など詳細は不明である。中流域の左岸台地上に位置する清水町遺跡群（熊本市北区八景水谷，69）では破鏡1点が出土している。小規模な調査が幾度か行われているようであるが、詳しい内容を知りえない。中流域右岸台地上の徳王遺跡（熊本市北区高平，70）でも小型仿製鏡が1点採集されている。弥生時代後期後半から終末にかけての堅穴式住居が検出されたと報告されているが、これも詳細がわからない。

調査内容を詳しく分析できない遺跡が多いため、当地域はこれまであまり取り上げられてこなかった。しかし、上で述べた集落の動向など、いま以上に注視されるべき地域である。

（6）白川中流域

白川は阿蘇カルデラに源を発する（図1）。カルデラ盆地は中央火口丘群によって南北に分離され、南側の南郷谷を西流するのが白川、北側の阿蘇谷を西流するのが黒川である。白川はカルデラ西部で黒川と合流し、立野火口瀬をぬけて急流部を下り、洪積台地（肥後台地）を貫流したのち立田山の南をぬけて沖積低地にいたり、有明海に流入する。そのうち、立田山より西の沖積低地部を下流域、それより東の洪積台地部を中流域、いまの天津町以東を上流域とする。

さて、白川中流域左岸には神園山、小山山という2つの山塊が隣接して存在するが、それら山塊と白川にはさまれた辺りには、有力な弥生時代後期集落が集中して分布する。弓削山尻遺跡（熊本市東区石原・平山町，79）は、ハケ調整脚台付長胴甕の段階から脚台を付さない長胴丸底甕の段階までの環濠集落である。その西に隣接する石原亀甲遺跡（熊本市東区石原，78）では小型仿製鏡2点が出土している。これら2遺跡は同一集落の可能性があるが、いずれも未報告であるため詳細な検討は難しい。弓削山尻遺跡、石原亀甲遺跡の対岸、白川右岸沿いに所在する法王鶴遺跡（熊本市

北区龍田町弓削, 77) も環濠集落であるが, その存続時期はタタキ・ハケ調整脚台付長胴甕の段階(弥生時代後期後半)までである。法王鶴遺跡の北東約 1.2km, 白川右岸沿いに位置する梅ノ木遺跡(菊陽町, 81) は弥生時代中期から続く集落である。ハケ調整脚台付長胴甕の段階(後期前半)まで継続する。梅ノ木遺跡の東に隣接する六地藏遺跡(菊陽町, 82) も同様の存続期間である。一方, 梅ノ木遺跡, 六地藏遺跡の対岸, 白川左岸沿いに位置する鹿帰瀬遺跡(熊本市東区鹿帰瀬町, 83) は, タタキ・ハケ調整脚台付長胴甕の段階(後期後半)を中心とする集落である。

以上の遺跡から南にやや離れた台地上には長嶺遺跡群(熊本市北区長嶺東, 75)が存在する。ハケ調整脚台付長胴甕の段階から脚台を付さない長胴丸底甕の段階までの集落である。小型仿製鏡が 1 点検出されている。長嶺遺跡群が立地する台地を西に下った白川左岸沿いには, 西谷遺跡, 下南部遺跡(いずれも熊本市東区下南部, 順に 73・74) が所在する。いずれもハケ調整脚台付長胴甕の段階(後期前半)を中心とする集落である。

(7) 白川上流域

白川上流域は, 立野火口瀬以西と阿蘇カルデラ内に大きく二分され, さらに阿蘇カルデラ内は, 黒川が流れる阿蘇谷と白川が流れる南郷谷, 白川・黒川の合流点付近に区分される。

立野火口瀬以西 立野火口瀬以西では, 西弥護免遺跡(大津町, 84) が重要である(図 5-2)。現在の白川河道から北にやや離れた右岸丘陵上に位置する環濠集落である⁽²⁾。4 重にめぐる溝が検出され, 集落が次第に拡張されていったと想定されている[隈 1983]。環濠の内部に竪穴式住居が, 外部に土壙墓が分布する。ごく簡単な概報しか公表されていないため詳細は不明であるが, 弥生時代後期後葉から終末がほとんどであるとの報告内容やわずかに示された土器などを根拠にすれば, タタキ・ハケ調整脚台付長胴甕から脚台を付さない長胴丸底甕の段階に中心があると推測できる。小型仿製鏡 1 点が出土している。なお, 中広形銅戈 2 点の出土で知られる大松山遺跡(大津町) は, 西弥護免遺跡のすぐ南東に位置している。白川沿いにも弥生時代後期の集落が点在している。左岸では西から中島宝満鶴遺跡や立石遺跡など, 右岸では瀬田裏遺跡などがある(いずれも大津町, 順に 85・88・89)。多くはタタキ・ハケ調整脚台付長胴甕段階までの集落であるが, 瀬田裏遺跡は脚台を付さない長胴丸底甕の段階まで継続する。立石遺跡では弥生時代銅鏃 1 点, 瀬田裏遺跡では器種不明の青銅器片 1 点が出土している。

阿蘇カルデラ内-阿蘇谷 阿蘇カルデラ内のうち, 阿蘇谷ではその西半部に弥生時代後期の集落が集中して分布する。それに対して東半部にはまったく分布していない。

阿蘇谷西端近くの黒川左岸にある宮山遺跡(阿蘇市, 93) では 1 条の溝が検出されており, 環濠集落と考えられる。脚台を付さない長胴丸底甕の段階まで継続する集落である。

宮山遺跡の北東約 1.5~3km, 黒川右岸沿いに位置するのが狩尾遺跡群(阿蘇市, 94~97) である。狩尾遺跡群として報告されたのは, 西から順に狩尾・湯の口遺跡, 狩尾・方無田遺跡, 狩尾・前田遺跡, 池田・古園遺跡という 4 つの遺跡である。しかし, それらの位置関係をみると, 前三者が近接し, 後一者の池田・古園遺跡のみがやや東に離れている。池田・古園遺跡は, むしろ後述の小野原 A 遺跡の方に近い。そのため, 狩尾遺跡群を考える際には, 狩尾・湯の口遺跡, 狩尾・方無田遺跡, 狩尾・前田遺跡の 3 つと池田・古園遺跡は別個にあつかう方が適切である。さて, 狩尾

遺跡群のなかで環濠と思われる溝が検出されているのは狩尾・湯の口遺跡である。ハケ調整脚台付長胴甕の段階から脚台を付さない長胴丸底甕の段階までの集落である。箱式石棺内から破鏡1点が、住居埋土から鉋を加工したと思われる無茎銅鍔1点が出土している。鉄器や鉄滓の出土がきわめて多い点が注目されるが、これは阿蘇カルデラ内に立地する弥生時代後期の遺跡に共通する特徴である。小野原 A 遺跡、下扇原遺跡（いずれも阿蘇市、順に 98・99）は、池田・古園遺跡（池田遺跡）のすぐ東に立地し、小野原遺跡群としてまとめて報告された。狩尾遺跡群とは異なり、タタキ・ハケ調整脚台付長胴甕の段階までの集落である。多量の鉄器や鍛冶関連遺物のほか、ベンガラも大量に検出された。下扇原遺跡では、銅釦も2点出土している。下山西遺跡（阿蘇市、100）は、黒川からやや南に離れた低い台地上に位置している。ハケ調整脚台付長胴甕の段階から脚台を付さない長胴丸底甕の段階までの集落で、小型仿製鏡1点、弥生時代銅鍔1点のほか、鉄鍔も多数出土した。黒川の北側、遠見ヶ鼻（大観峰）の西側にある外輪山湾入部のほぼ中央の低地に位置する陣内遺跡（阿蘇市、102）は、タタキ・ハケ調整脚台付長胴甕から脚台を付さない長胴丸底甕の段階を中心とする。本稿の内容とは直接関係しないが、当遺跡では古墳時代後期の竪穴式住居が検出されており、古墳時代以降の阿蘇谷の集落動向を考えるうえで注目される。

阿蘇カルデラ内－南郷谷－ 南郷谷では、その東半部でいくつかの集落が確認されている。南鶴遺跡（南阿蘇村、104）は、白川右岸に所在する環濠集落で、200軒近い竪穴式住居が密集した状態で検出された。弥生時代中期後半から脚台を付さない長胴丸底甕の段階まで継続する有力集落と思われるが、報告内容が不十分なため詳細を知りえない。小型仿製鏡片1点のほか、数多くの鉄器が出土している。幅・津留遺跡（南阿蘇村および高森町、105）は、白川左岸の台地上に位置する。そこは南郷谷の東端近くにあたる。2014年度までの発掘調査で、弥生時代中期後半から後期末までの大規模な環濠集落であることが明らかとなった。墓域と居住域とが溝によって区画されている様子も確認されている。まだ正式な報告がなされていないため詳細な分析はできないが、多量の鉄器が出土している点からも、きわめて有力な弥生時代後期の集落であったことがうかがえる。弥生時代後期には、阿蘇谷だけではなく、南郷谷においても活発に鉄器製作が行われていたことを示している。

(8) 熊本平野北部地域

井芹川、坪井川、白川の流れが集中する各河川下流域の一角を熊本平野北部地域ととらえる。注意が必要なのは、上でも記したように、かつての井芹川は花岡山の東側を南へ流れ、いまの JR 熊本駅近くで白川に合流していたことである。花岡山の北側を西流する現在の流路は、昭和初期の付け替え工事によるものである。また、坪井川もかつては熊本城の東方で白川に合流していた。それより下流の現在の流路は、加藤清正によって造られた人工の流路である。

さて、現井芹川の下流域のうち、金峰山と花岡山にはさまれた辺りには、千原台遺跡群（熊本市西区島崎、106）、戸坂遺跡（熊本市西区戸坂町、107）、野添平遺跡（熊本市西区谷尾崎町、108）が所在する。いずれもハケ調整脚台付長胴甕の段階からタタキ・ハケ調整脚台付長胴甕の段階までの集落である。戸坂遺跡からは小型仿製鏡1点、弥生時代銅鍔1点が出土している。なお、千原台遺跡群と野添平遺跡では古墳時代前期後半になってふたたび集落が営まれている。現井芹川と現坪

井川の合流点付近に位置するのは上高橋高田遺跡（熊本市西区上高橋，109）である。標高3m前後の低湿地で、有機質の遺物が多数検出された。未報告のため詳細は不明であるが、弥生時代では中期に中心があると思われる。古墳時代前期後半から中期にも集落が営まれている。破鏡2点が出土しているが、時期の位置付けが難しい⁽³⁾。

白川下流域のうち、現坪井川の右岸には二本木遺跡群（熊本市西区田崎，110）が、左岸には八島町遺跡（熊本市西区蓮台寺，111）が所在する。二本木遺跡群の中心部は古代の官衙跡として著名であるが、その南端付近で弥生時代後期の集落が検出された。すぐ南側の八島町遺跡とは一連の集落である可能性がある。いずれの遺跡もハケ調整脚台付長胴甕からタタキ・ハケ調整脚台付長胴甕の段階を中心とする。ただし、八島町遺跡でわずかながら脚台を付さない長胴丸底甕が出土している点には注意を要する。二本木遺跡群では小型仿製鏡1点、破鏡1点、八島町遺跡では小型仿製鏡2点が出土している。

白川下流域左岸から南へ突出した半島状地形の先端付近に八ノ坪遺跡（熊本市南区護藤町，114）が所在する。現在では緑川下流域の右岸にあたる。興味深いのは、報告書において、弥生時代中期中頃にいったん廃絶した集落が後期後半になって再興するが、地下水位が上昇したため掘立柱建物主体の集落構成になると考察されている点である〔表2文献133：林田編2008〕。沖積低地における集落のあり方の一端を示したものとして注目に値する。

弥生時代の集落ではないが、白川左岸沿い、いまの熊本大学医学部構内に立地する本庄遺跡（熊本市中央区本庄，115）も取り上げる。布留式系統の土器が多数出土する遺跡である。重要なのは、直角に屈曲する古墳時代前期の溝（0104調査地点30号溝）が確認されている点で、方形区画になる可能性も考慮される。当遺跡は、古墳時代前期の有力な集落としてきわめて重要な存在である。

（9）熊本平野東部地域

熊本平野東部地域を流れる緑川は、いまではその下流で加勢川や浜戸川と合流し、有明海に注いでいる。しかし、標高4mラインで海岸線を表現すると、加勢川、緑川、浜戸川はそれぞれが独立した河川として描かれる。

加勢川流域 加勢川は、いまの水前寺成趣園の湧水に発し、江津湖の南で木山川や秋津川、矢形川からの流れを集めて西流し、有明海に流入する。加勢川の一部をなす江津湖も湧水によって形成された湖である。ただし、江津湖が現在のような大きさになったのは、加藤清正によって加勢川右岸に江津塘が構築されて以降である。

そうした江津湖の左岸周辺に、江津湖遺跡群（熊本市東区若葉・広木町，116）、神水遺跡（熊本市中央区神水本町ほか，118）が所在する。江津湖遺跡群では、その南端近くの下江津湖東側において、環濠の一部と思われる溝が検出された（第7次調査区9号溝，第23次調査区SD06）。タタキ・ハケ調整脚台付長胴甕の段階からタタキ・ハケ調整球形胴甕の段階（古墳時代前期初頭？）までの溝と思われる。また、ハケ調整球形胴甕の後半段階（古墳時代前期後葉）で方形周溝墓が集落の一部を破壊して築造されていることも確認された。神水遺跡は、上江津湖の北側、加勢川の左岸に位置している。小規模な調査が数十次にわたって実施されているため全体像の把握が困難であるが、中期前半から続く弥生時代集落の終焉はタタキ・ハケ調整脚台付長胴甕の段階であると思われる。

る。銅鉈1点、銅釦1点、弥生時代銅鏃2点、青銅製刃器片1点が出土している。報告書での吉田麻子の考察によれば〔表2文献149：吉田編2008〕、連続する溝である第5次調査区7号溝と第13次調査区SD0002、および第40次調査区の溝SD002が弥生時代後期の環濠となる可能性が高い。なお、古墳時代前期の溝であるが、第38次調査区SD001と第40次調査区SD004が一連となって東西約39mの方形区画を形成すると思われる点はきわめて重要である。上述した本庄遺跡検出の方形区画と合わせ、熊本平野部における古墳時代前期の首長居館の可能性のある遺構として、とくに注目しておきたい。

秋津川右岸に位置する古閑遺跡（益城町，121）は、野田拓二による古式土師器編年、古閑期の標識遺跡である〔野田1982〕。脚台を付さない長胴丸底甕およびタタキ・ハケ調整球形胴甕の段階の集落である。脚台付の甕が見出せないとの報告〔高野1975〕がある点は、集落形成時期を考えるうえで重要である。梨木遺跡、古閑北遺跡（いずれも益城町，順に119・120）は、古閑遺跡から北へ1kmしか離れていないが、ハケ調整脚台付長胴甕の段階を中心としており、その存続時期は古閑遺跡とはまったく異なっている。

矢形川右岸台地上に位置する二子塚遺跡（嘉島町，125）は、ハケ調整脚台付長胴甕の段階からタタキ・ハケ調整脚台付長胴甕の段階までの環濠集落である（図5-3）。破鏡3点、小型仿製鏡片1点のほか、鍛冶遺構や多量の鉄器が出土している点で、熊本平野東部地域の有力集落の1つと評価できる。二子塚遺跡のすぐ北東、同じ台地上に位置する塔平遺跡（益城町，124）も同時期の集落である。

緑川下流域 御幸木部遺跡群（熊本市南区御幸木部，126）は、緑川下流域右岸の低地に立地する。現在では加勢川の右岸にあたるが、標高4mで海岸線を表示すると当遺跡の北側に海が入り込む地形となったため、加勢川の流路を描くことができなかつた。緑川の沖積作用によって形成された土地だと考えられる。表2に示した御幸木部遺跡群の内容は、熊本県実施の2004年度調査によるものである。タタキ・ハケ調整脚台付長胴甕の段階の集落が確認されている。この熊本県調査地の北東約100mでは2003年度に熊本市によって調査が行われ、弥生時代後期の環濠と考えられる溝が確認されているという〔表2文献160：岡本編2006〕。注意しておきたい。

浜戸川下流域 北側を緑川、南側を浜戸川にはさまれた台地の西端付近に、新御堂遺跡（熊本市南区城南町，128）が所在する。そこは浜戸川の右岸にあたり、対岸の左岸台地上には国指定史跡の塚原古墳群が存在する。新御堂遺跡は弥生時代中期から後期の有力集落であると考えられる。報告書の記述をもとにすれば、集落は中期中葉に形成が開始され、環濠は後期前葉に構築された。しかし、環濠は短期間で廃棄され、後期後葉には継続しない。環濠は2重にめぐららしい。報告内容が不十分なため、土器をもとに時期を検討することは難しいが、環濠集落の中心とする時期はハケ調整脚台付長胴甕の段階（後期前半）であると思われる。本調査において破鏡2点、小型仿製鏡2点、弥生時代銅鏃3点、大泉五十1点、調査以前には巴形銅器1点、銅鏡片1点、貨泉1点、半両銭1点が出土しており、こうした青銅器の多さはとくに注目される。

(10) 宇土半島基部地域

九州島西岸の中央で西方に突出する宇土半島は、有明海と八代海を画する存在である。宇土半島

の中央には東西にのびる脊梁山地が横たわっているが、その山地は半島の付け根において断絶し、そこに幅のせまい低地部が形成される。低地部の東側にはふたたび丘陵が広がっている。つまり、宇土半島の基部地域は、幅のせまい通路状の低地部をはさんで東西に丘陵がのびるという地形をなす。そのため、当地域は北半部の有明海側と南半部の八代海側に区分され、さらにそれぞれが東側と西側に細分される。

有明海側（北半部） 宇土半島基部地域有明海側の東側には潤川が流れている。境目遺跡（宇土市，133）は、潤川下流域左岸の台地上に位置する。正式報告がなされていない小面積の調査が多いため、遺跡の詳細をとらえることはきわめて困難である。しかし、「弥生時代中期前半から後期終末まで途切れない上に、古墳時代前期まで継続している」[表2文献168：金田2002a：p.58]と記述されていることからもうかがえるように、当地域における弥生時代中期から古墳時代前期の有力集落の1つであることは確実である。環濠の可能性のある弥生時代中期前半の溝も検出されている。古墳時代前期の土器の出土も多い[表2文献169：杉井2002a]。詳しい内容が不明なため、これまで取り上げられることは少なかったが、注目されるべき遺跡である。境目遺跡の西に隣接して、これも弥生時代「中期から後期まで時期的な途切れはない」との指摘がなされた畑中遺跡（宇土市，134）が存在する[表2文献171：金田2002b：p.69]。境目遺跡のすぐ南東に位置する上松山遺跡（宇土市，132）では、タタキ・ハケ調整球形胴甕の段階（古墳時代前期初頭？）に、集落域が方形周溝墓を主体とする墓域に移行した様子が確認されている。潤川上流域に所在する古保山打越遺跡（宇城市松橋町，131）は、ハケ調整脚台付長胴甕の段階からタタキ・ハケ調整脚台付長胴甕の段階までの集落である。

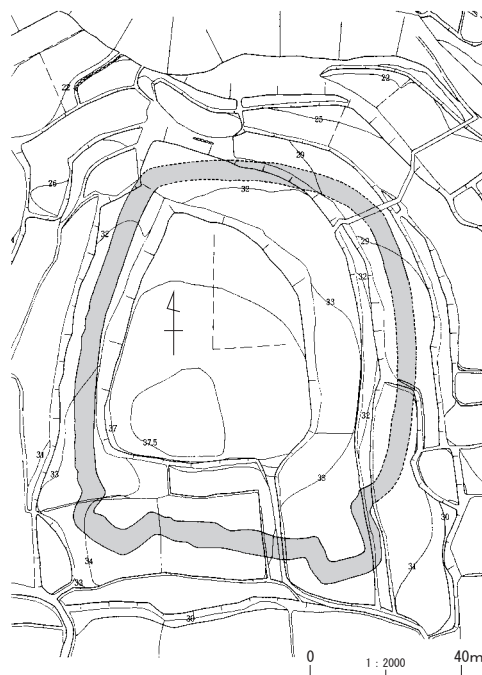


図6 宇土市西岡台遺跡の首長居館

有明海側の西側では、城山遺跡と西岡台遺跡（いずれも宇土市、順に136・137）が重要である。宇土市には、宇土氏・名和氏による中世宇土城と、小西行長が築城した近世宇土城が存在するが、城山遺跡は近世宇土城地点に、西岡台遺跡は中世宇土城地点に所在する。両遺跡は東西に隣接し、東側にあるのが城山遺跡である。いずれの場所も独立丘陵地形をなす。城山遺跡では、弥生時代前期に集落の形成が開始され、環濠が掘削される。環濠は前期末に埋没する。中期では甕棺墓が検出されているが、集落の様相は不明確である。後期については、タタキ・ハケ調整脚台付長胴甕の段階に集落の中心時期がある。しかし、古墳時代前期の土器も多く出土していることから、弥生時代後期後半から古墳時代前期に続く集落であった可能性が高い。一方、西岡台遺跡では、2箇所の張り出し部を有する古墳時代前期の溝が丘陵頂部を囲うことが確認され、首長居館と評価された（図6）。溝内側での計測で東西約80m、南北約93mの規模をもつ。これら両遺跡がきわめて近接している点、西岡台遺跡では弥生時代の土器が出土していない点から、弥生時代から古墳時代への移行期に、城山遺跡から独立した首長が西岡台遺跡に居館を築いた状況を想定することも可能である。なお、西岡台遺跡のすぐ西に位置する轟遺跡（宇土市、138）でも、弥生時代中・後期の土器、さらには銅鏡片1点が出土している。縄文時代の貝塚として著名な遺跡であるが、弥生時代以降にも集落が営まれている点に注意しておきたい。

八代海側（南半部） 大塚台地遺跡（宇城市松橋町、140）は、宇土半島基部地域八代海側の東側、大野川右岸台地上に位置している。報告内容が不十分なため詳細を知ることは難しいが、タタキ・ハケ調整脚台付長胴甕の段階を中心とする集落であると思われる。松橋前田遺跡（宇城市松橋町、139）は大塚台地遺跡のすぐ北に隣接する。タタキ・ハケ調整球形胴甕の段階からハケ調整球形胴甕の段階にかけて（古墳時代前期）の集落であると考えられる。

(11) 球磨川下流域

八代平野の大部分は干拓地である。かつては、いまのJR鹿児島本線から国道3号線のあたりにまで海が入っていたと推測される。そのため、八代平野として1つにまとめるよりは、そこを流れる3つの河川の流域ごとに地域区分する方が適切である。すなわち、砂川、氷川、球磨川の3つである。それらのうち、球磨川の下流域には注目すべき弥生時代の集落が存在する。

右岸 球磨川下流域右岸の低地部には、島田遺跡、用七遺跡、上日置女夫木遺跡、西片百田遺跡、西片園田遺跡、西片町遺跡（いずれも八代市、142～146）といった遺跡が密集して立地する。JR九州新幹線の八代駅周辺一帯である。これら遺跡は、もっとも北の島田遺跡、中央の用七遺跡・上日置女夫木遺跡・西片百田遺跡、南の西片園田遺跡・西片町遺跡の3箇所に小区分できるが、その全体に目を配った遺跡動向は山内淳司によって整理されている〔表2文献187：山内ほか編2010〕。以下では、それを参考に記述を進めることにしたい。

さて、もっとも北に位置する島田遺跡では、弥生時代前期の集落が確認されている。しかし、中期の竪穴式住居は検出されておらず、次に確認できるのはハケ調整脚台付長胴甕の段階（後期前半）の住居である。そして、ハケ調整球形胴甕の段階（古墳時代前期）になると、遺跡の南部に集落が営まれるようになる。中央の用七遺跡、上日置女夫木遺跡、西片百田遺跡のなかでもその北部に位置する用七遺跡、上日置女夫木遺跡（表2文献185・186報告分）では、脚台を付さない長胴丸底甕

の段階において、弥生時代中期から続く集落域が方形周溝墓を主体とする墓域へ変化することが確認されている。また、用七遺跡では銅鉞1点、珠文鏡1点が、上日置女夫木遺跡（表2文献185報告分）では小銅鐸1点と舌1点が出土している。一方、中央でも南部の上日置女夫木遺跡（表2文献187・188報告分）と西片百田遺跡では、ハケ調整脚台付長胴甕の段階（後期前半）を中心とする時期、およびハケ調整球形胴甕の段階（古墳時代前期）に集落が営まれている。しかし、方形周溝墓は検出されていない。南の西片園田遺跡、西片町遺跡は、報告時の遺跡名称は異なるが、その調査対象地点はほぼ同じ場所である。包含層ながら、ハケ調整球形胴甕の段階のなかでも古墳時代前期後半に位置付けられる土器が多く出土している。

以上のように、球磨川下流域右岸の低地では、その北部から南部へ居住域を移動させながら、弥生時代前期から古墳時代前期まで継続して集落が営まれている。青銅器の出土などからみても、この集落は当地における拠点の1つであったと考えられる。

左岸 球磨川下流域左岸の低地には下掘切遺跡（八代市，147）が存在する。ハケ調整脚台付長胴甕段階の土器を含む溝が検出されている。掘り込みが浅いようにも思うが、居住域を囲う環濠の可能性のあるものとして注意しておきたい。また、上東式と思われる土器の出土にも注意を払いたい。

4 小結

前節の検討からわかるのは、弥生時代後期においては、八代海側に比べて有明海側が圧倒的に優位なことである。なかでも、方保田東原遺跡をはじめとする大規模な環濠集落が密集している点で、菊池川中流域と合志川下流域、すなわち菊鹿盆地周辺地域の優位さは特筆される。それに続くのは、白川中・上流域や熊本平野東部地域、井芹川・坪井川の中・上流域、菊池川下流域などの地域である。これらに対して、遺跡の内容に不明なところが多いとはいえ、宇土半島基部地域は、相対的に劣位な立場にあると考えざるをえない。

しかし、弥生時代後期から古墳時代前期にまで継続した集落の分布をみると、弥生時代後期における地域的な優劣とは若干異なった様相をみてとることができる。脚台付長胴甕の段階からハケ調整球形胴甕の段階まで継続したとみられる遺跡を列記すれば、菊池川下流域では玉名湾西部の山田松尾平遺跡（表2・図2-10）、玉名湾北部の玉名平野条里跡（柳町遺跡・両迫間日渡遺跡）（18～21）、玉名湾東部の野部田遺跡（23）、木葉川下流域の稲佐津留遺跡（25）、菊池川中流域では菊鹿盆地西半部の方保田東原遺跡（36）、東半部のうてな遺跡（41）、熊本平野東部地域では江津湖左岸の江津湖遺跡群（116）と神水遺跡（118）、宇土半島基部地域では有明海側東側の境目遺跡（133）、西側の城山遺跡（136）、球磨川下流域では右岸の上日置女夫木遺跡一帯（142～146）となる。つまり、弥生時代後期にはけっして優位な地域であったとはいえない宇土半島基部地域や球磨川下流域においても、古墳時代前期にまで続く集落が存在するのである。そうしたなか、弥生時代後期に優勢を誇った白川中・上流域で古墳時代前期の集落がほとんどみられない点は注目に値する。とくに阿蘇谷では、タタキ・ハケ調整球形胴甕段階以降の古墳時代前・中期集落は知られていないのである。

さらに注意を要するのは、古墳時代前期の首長居館の構成要素とも目される溝が検出された遺跡の分布状況である。それを示せば、古墳時代前期掘削の大規模な溝が検出された菊鹿盆地所在の方

保田東原遺跡（36）、方形区画の可能性のある溝が検出された白川下流域所在の本庄遺跡（115）と江津湖左岸所在の神水遺跡（118）、そして丘陵頂部全体を囲う溝が検出された宇土半島基部地域所在の西岡台遺跡（137）である。これらのうち、方保田東原遺跡と神水遺跡は弥生時代後期から続く有力集落であるが、本庄遺跡と西岡台遺跡は古墳時代前期になって新たにその営みをはじめた遺跡である。つまり、首長居館の可能性のある遺構が新たな場所にも出現している点に注目したいのである。

以上のことからうかがえるのは、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期に、熊本県地域では少なくない集落の再編が行われている可能性である。もちろん、方保田東原遺跡のようにその優位性を保ち続ける遺跡も存在する。しかし、多くの環濠集落が終焉を迎えること、白川中・上流域では集落さえあまりみられなくなること、それに対して首長居館の可能性のある遺構が前代からの系譜を引かない場所にも出現することなどをみれば、当該時期は熊本県地域における集落の大きな変革期であったと判断できる。

③……………熊本県地域における弥生時代後期の銅鏡および鉄器・鍛冶遺構の動向

次に、先行研究をもとにして、熊本県地域における弥生時代後期の銅鏡および鉄器・鍛冶遺構の動きを整理しておこう。

銅鏡 遺跡から出土した青銅器の内容については前章のなかでも逐一記してきたが、ここでは南健太郎の研究によりながら〔南2007〕、銅鏡の分布状況をまとめておきたい。

南は、熊本県地域における弥生時代の遺跡から出土した銅鏡を集成し、それを漢鏡3期から7期までに時期区分したうえで、その分布および出土状況を検討した。そして、漢鏡6期までの銅鏡については方保田東原遺跡と小野崎遺跡を中心とする菊池川中流域、および新御堂遺跡のある緑川流域（本稿では熊本平野東部地域）に分布の中心があることを指摘した。つまり、弥生時代後期においては、集落動向でもその優位性が顕著であった菊池川中流域、そして熊本平野東部地域に銅鏡分布の核が形成されているのである。これはなにも銅鏡に限ったことではなく、巴形銅器や銅鏃などの青銅器全般にみられる傾向である。それに対して、宇土半島基部地域以南では弥生時代の青銅器の分布はきわめて希薄なのである。

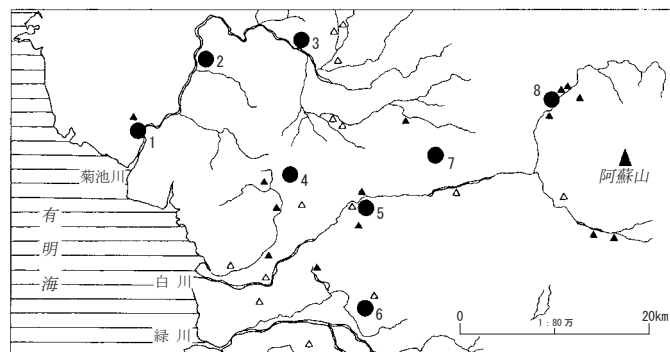
しかし、南は、漢鏡7期の鏡群については南関町「大場箱式石棺、阿蘇市狩尾湯の口遺跡、熊本市上高橋高田遺跡で出土」がみられるが、菊池川中流域や緑川流域にはみられなくなることも指摘している〔p.20〕。この南の指摘はきわめて重要で、熊本県地域における三角縁神獸鏡の出土が今後は宇土半島基部地域以南（宇土市城ノ越古墳1面、伝八代郡1面、伝葦北郡2面）に限られる点〔肥後考古学会1983〕を合わせて考えれば、集落動向と同じように、銅鏡の流通状況においても、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期に大きな変化が生じていることがうかがえるのである。

鉄器・鍛冶遺構 よく知られているように、熊本県地域のなかでも阿蘇地域は、弥生時代後期における鉄器の出土がとくに多い地域である〔野島2009：p.45の第22図〕。そのため、前章でも、阿蘇カルデラ内の遺跡にかんしては鉄器や鍛冶関連遺物の出土について注意深く記述した。しか

し、弥生時代後期における鉄関連遺物・遺構の豊富さは、阿蘇地域の周辺にも共通する現象である。村上恭通はこのことを、弥生時代「後期中葉を迎えると、熊本、大分県内の各集落遺跡における鉄器出土量が急激に増加する。熊本県阿蘇山を中心として西麓の肥後・白川、菊池川流域および東麓の豊後・大野川上中流域は、鉄器を出土する集落が弥生時代で最も密集する地域である」と表現する [村上 2007 : p.81]。そして、菊池川や白川流域における鍛冶遺構の分布を示しながら (図 7)、当地域においては「鍛冶遺構は弥生時代後期中葉から終末期にかけての集落址で数多く調査され、その分布密度は日本列島で最も濃い」と記すのである [同 : p.82]。これを含めて村上恭通の一連の研究 [村上 1992a・1992b・1997・2007・2010] から知ることができるのは、熊本県地域のなかでも菊池川、白川、緑川の流域、すなわち本稿の地域区分では有明海側のなかでも熊本平野東部地域以北が、弥生時代後期における鉄器や鍛冶遺構分布の集中地域であることである。それに対して、宇土半島基部地域以南における同時期の鉄器の出土はほとんど目立たない。これは、上述した弥生時代の銅鏡の分布とまったく同じ状況である。

こうした鉄器や鍛冶遺構の分布に変化が現われるのは古墳時代前期である。前章での検討からも明らかなように、熊本県地域の弥生時代後期集落の多くが、タタキ・ハケ調整脚台付長胴甕の段階、あるいは脚台を付さない長胴丸底甕の段階に断絶するが、それは村上によって図 7 に示された諸遺跡 (図 7 原典の村上 1997 の第 2 図ではすべての遺跡名を明示) にもあてはまることである。たとえば、村上が I 類鍛冶炉を有するなどとした 8 つの遺跡のうち古墳時代前期にまで継続する遺跡は、方保田東原遺跡 (図 7-3) のみである。そうした方保田東原遺跡でさえ、古墳時代前期になると鍛冶の痕跡は不明瞭になる。つまり、熊本県地域においては、弥生時代後期に盛んに行われていた鉄器生産が古墳時代前期には継続しないのである。すなわち、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期に、熊本県地域では、鉄器生産においてもきわめて大きな変化が生じているのである。

さらに注意が必要なのは、銅鏡にかんしては古墳時代前期になると三角縁神獸鏡の分布がみられた宇土半島基部地域以南であるが、そこにおいても鉄器生産の痕跡はみられない点である。つまり、威信財流通にかかわる銅鏡と必需物資生産にかかわる鍛冶の動向は、異なった原理に左右されていた可能性が示唆されるのである。



●: I 類鍛冶炉を有するか、あるいは高温操作の鍛冶が可能であったと推定される集落址
 ▲: II 類鍛冶炉を有するか、あるいは鉄器生産関連遺物出土の集落址
 △: 鍛冶工房の存在が推定される集落址
 1: 下前原遺跡 2: 諏訪原遺跡 3: 方保田東原遺跡 4: 小糸山遺跡群 5: 山尻遺跡
 6: 二子塚遺跡 7: 西弥護免遺跡 8: 狩尾遺跡群

図 7 村上恭通が提示した熊本県地域の鍛冶遺構の分布 [村上 2007 より]

④……………熊本県地域における古墳時代前期の古墳動向と弥生時代後期の情勢

では、熊本県地域では古墳時代前期の有力古墳はどの地域に築造されるのであろうか。当該地域の古墳動向については、これまでもさまざまに議論され、私も幾度か言及してきた〔杉井2003b・2004・2010〕。今回、本稿での地域区分に合わせ、かつ新知見も加えて、かつての首長墓系譜変遷図〔杉井2010〕を改訂し、図8を作成した。これをもとに古墳時代前期における熊本県地域の古墳動向を概観し、前章までにみた弥生時代後期集落の動向と比較してみよう。

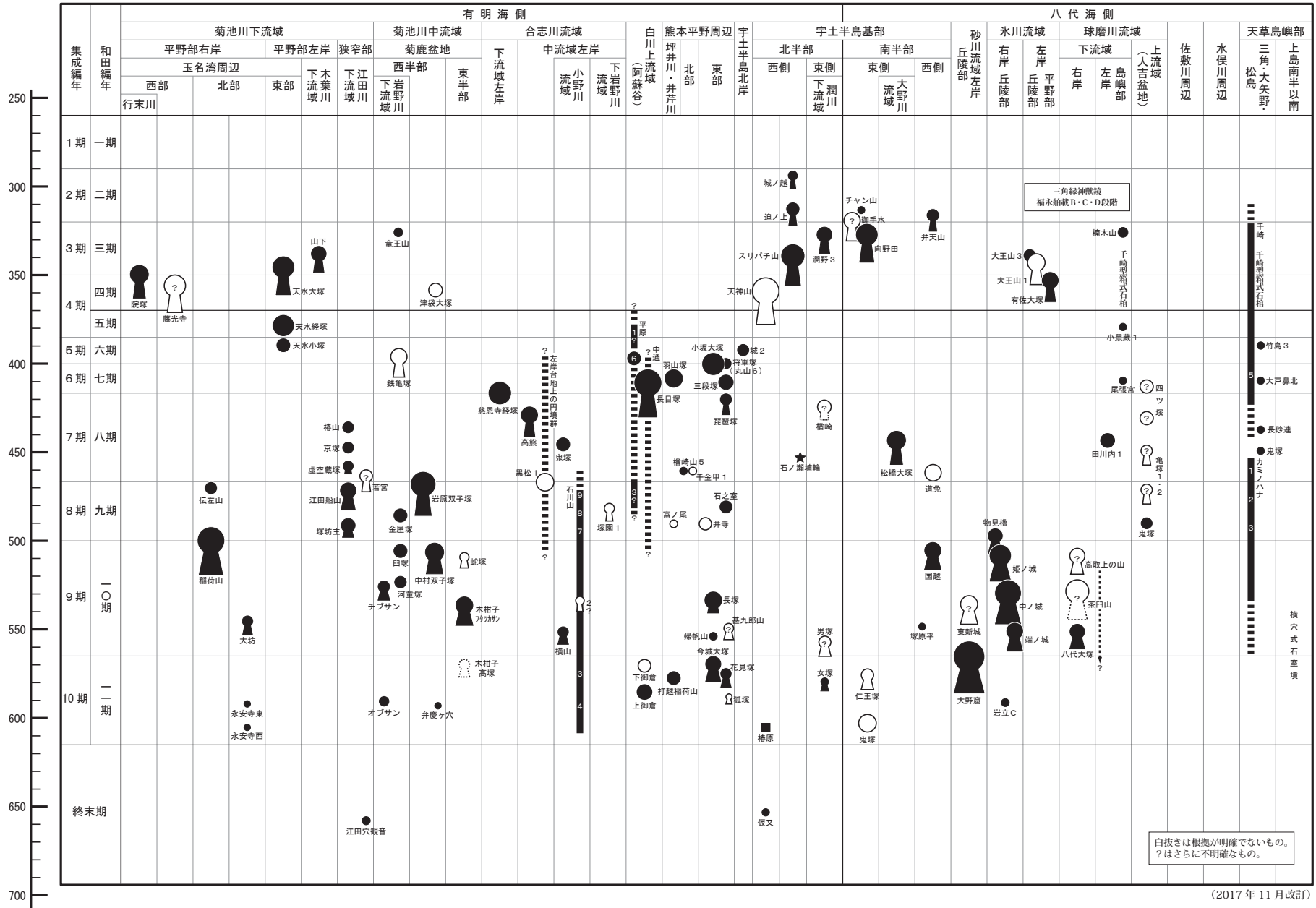
宇土半島基部地域 熊本県地域でもっともはやくに前方後円墳が築造されたのは、宇土半島基部地域である（図3・8）。そこは幅のせまい通路状の低地部をはさんで東西に丘陵がのびるという地形をなすが、その東西の丘陵上に多くの前方後円墳が連続して築造された。しかも、東西いずれにおいても、その有明海側（北半部）と八代海側（南半部）の双方に前方後円墳がみられるのである。具体的に示せば、有明海を臨む西側丘陵のほぼ中央に城ノ越古墳、迫ノ上古墳、スリバチ山古墳（順に図3-8・9・10）が、西側丘陵北側の有明海に面する位置には天神山古墳（7）が、南側の八代海側には弁天山古墳（15）が築かれている。また、東側丘陵では、有明海側の潤川下流域に潤野3号墳（11）が、八代海を臨む丘陵上には御手水古墳、向野田古墳（順に13・14）が位置している。

これらのなかで、最古の前方後円墳と考えられるのは城ノ越古墳である〔杉井2002〕。前方後円墳集成編年（以下では集成編年と記述）〔広瀬1991〕の2期に位置づけられる。みかん園の開墾によって墳丘は完全に失われてしまったが、赤色顔料が付着した安山岩板石の破片が確認されていることから、主体部は箱式石棺であった可能性が高い。舶載三角縁四神四獣鏡1面が出土している。福永伸哉による舶載鏡編年〔福永2005〕のB段階の鏡である。城ノ越古墳は、そのあとに続く2基の前方後円墳、迫ノ上古墳、スリバチ山古墳とともに、宇土半島基部地域における有力な首長墓系譜の1つを形成していたと考えられる。

これに並ぶ首長墓系譜は、東側丘陵にある向野田古墳の系譜である。向野田古墳は、女性首長が葬られた前方後円墳として全国的に著名である。このすぐ東側にある御手水古墳については、まったく情報がないため、向野田古墳との時期的前後関係さえも不明である。しかし、長さ4.2m以上の竪穴式石室を主体部とするチャン山古墳（円墳、12）と合わせて、これらの古墳は宇土半島基部地域におけるもう1つの有力な首長墓系譜をなしていたと思われる。

こうしたいくつかの古墳のまとまりがどの集落と関係するののかについては、高木恭二による考察がある〔高木2001〕。それによれば、城ノ越古墳の系譜（高木の緑川・轟群）に対応するのは、首長居館では西岡台遺跡、一般集落では城山遺跡などとされる。また、向野田古墳の系譜（高木の松山群）に対しては、首長居館は不明であるが、一般集落では八代海側の潤川左岸台地上にある松橋前田遺跡などがあてられている。また、有明海側の東側、潤川下流域左岸に位置する境目遺跡については、潤野3号墳の系譜（高木の立岡群）との関係が想定されている。

このように、古墳時代前期の宇土半島基部地域では、複数の有力な首長墓系譜が並存していた。こうした状況は、同時期のほかの熊本県地域ではみることができない。集落や銅鏡、鉄器・鍛冶遺



(2017年11月改訂)

図8 熊本県地域における首長墓系譜 [杉井 2010を改訂]

構の動向からみれば、弥生時代後期にはけっして優位とはいえない宇土半島基部地域であるが、古墳動向を根拠にすれば、古墳時代前期においては突出して有力な地域であったと判断することが可能なのである。

八代海側 上述のように、前方後円墳の築造が集中する点で、古墳時代前期における宇土半島基部地域の重要性は明らかである。しかし、出土古墳は不明ながら、八代平野から葦北にかけての地域で船載三角縁神獣鏡3面（伝八代郡1面、伝葦北郡2面）が出土したと伝えられている点は重要である。福永編年B・C・D段階の鏡が1面ずつあり、これは熊本県地域で出土した三角縁神獣鏡のじつに4分の3を占めている。従来、当地域は、古墳時代前期前半の有力古墳が知られていないため、宇土半島基部地域に比べてそれほど大きく取り上げられることはなかった。しかし、古墳時代前期前半に当地域が果たした役割について、いままで以上に注意が払われる必要がある。

前期後半になると氷川流域に前方後円墳が築造される。平野部の有佐大塚古墳（18）、丘陵部の大王山1号墳（17）である。これらのうち有佐大塚古墳では、川西宏幸編年Ⅱ期〔川西1978〕の円筒埴輪が出土している。これは、近畿地方中央部（以下では畿内地域と記述）の埴輪の情報を正しく理解して製作されたものとしては、当該時期の熊本県地域において唯一の存在である。しかし、こうした氷川流域において、有力な集落は知られていない。球磨川下流域の西方、八代海の海上に浮かぶ大鼠蔵島の頂部には、竪穴式石室を主体部とする楠木山古墳（円墳、19）が築かれている。碧玉製紡錘車1点などが出土している。また、宇土半島南岸の西端に位置する清水甲古墳箱式石棺（20）では筒形銅器1点が検出されている。

宇土半島基部地域と同様、八代平野周辺部は、弥生時代後期にはけっして有力とはいえない地域である。しかし、古墳時代になると、前期を通じて畿内地域にあった中央政権と密接に関係していたと思われるのである。

有明海側 一方、有明海側では、前期の前方後円墳は菊池川下流域にのみ築かれている。玉名湾西部の院塚古墳、藤光寺古墳（順に1・2）、東部の天水大塚古墳（3）、木葉川下流域の山下古墳（4）である。いずれも集成編年3期以降（前期後半）に位置づけられる。注意されるのは、天水大塚古墳は円墳の天水経塚古墳などに系譜が引き継がれるが、それ以外は単独の存在であることである。なお、玉名平野条里跡（柳町遺跡・両迫間日渡遺跡）という弥生時代後期から古墳時代前期まで継続した集落が存在する玉名湾北部には、前期の前方後円墳は存在しない。

有明海側でもっとも注目すべきなのは、集落や銅鏡、鉄器・鍛冶遺構の動向からみれば弥生時代後期にはもっとも優位な位置にあった菊鹿盆地周辺、すなわち菊池川中流域や合志川下流域に、前期の前方後円墳が築造されていない点である。わずかに、車輪石片が出土した津袋大塚古墳（6）や竪穴式石室を主体部とする竜王山古墳（5）といった円墳が築かれている程度である。同様に、白川中・上流域や井芹川・坪井川の中・上流域、熊本平野の北部地域と東部地域にも前方後円墳は存在しない。つまり、弥生時代後期に隆盛を誇った地域には、前方後円墳が築造されていないのである。

さらに興味深いのは、有力な前期古墳が知られていない白川下流域や江津湖左岸に所在する本庄遺跡、神水遺跡で、首長居館とも目される方形区画が検出されている点である。つまり、有力集落と有力古墳の動向が相関していないのである。

こうしたことからうかがえるのは、熊本県地域における古墳時代前期の有力古墳の築造地は、弥生時代後期までの集落動向、さらには古墳時代前期の集落動向とさえ関係しないところで決定されている可能性である。このことは、先に紹介した伊藤淳史の問題意識と共通するものである。すなわち、伊藤は、「出現期の大型古墳が築かれた位置」は「少なくとも庄内期から布留期にかけての遺跡動態をみる限りにおいて」「最有力との評価は難しい」グループが立地する地域であると指摘した〔伊藤 2005 : p.298〕。伊藤が分析対象とした京都府山城地域と同様の傾向が、熊本県地域でもみてとることができるのである。

⑤……………古墳時代前期有力首長墓系譜出現の背景

弥生時代後期にきわめて優位な地域であった菊鹿盆地周辺部などには有力な前期古墳は築造されず、一方、相対的に劣位であった宇土半島基部地域にきわめて有力な前期の首長墓系譜が形成された。

ではなぜ、宇土半島基部地域に古墳時代前期の有力首長墓系譜が形成されたのであろうか。

宇土半島基部地域の地形をみると、そこには大きな河川は存在せず、沖積低地も発達していない。つまり、水田稲作をはじめとする農耕の生産性はけっして高いとはいえない地域である。それに比べると、弥生時代後期に大いに発展をとげた菊池川流域や熊本平野東部地域などは、多くの中小河川が合流する流域面積の広い大河川、およびその周囲に発達した広大な低地部をかかえている。水田遺構がほとんど検出されていないため耕地開発の程度を具体的に知ることはできないが、その農耕にかかわる生産性は相当に高いと考えられる。しかし、そうした生産性の高さが古墳時代前期における古墳の築造や集落の維持には直結していないのである。

研究史の整理で述べたように、都出比呂志は、中小河川の水系ごとに形成された弥生時代中・後期の農業共同体的結合の領有圏が古墳時代首長の存立基盤であるとするが、少なくとも熊本県地域では、弥生時代後期の拠点的大規模集落の領有圏がそのまま順調に発展し、古墳時代前期の有力首長墓を生み出す基盤にはなっていない。つまり、農耕生産力の発展とは別の要因に、前期の前方後円墳出現の背景を求める必要があるのである。

そこで重要となるのは、宇土半島基部地域の地理的位置である。上でも幾度か指摘しているように、当該地域は九州島西岸陸地部における有明海側と八代海側の境界域にあたる。有明海沿岸としてみた場合、その九州島西岸沿いの最南端に位置するのである。

そうした宇土半島基部地域は、北部九州地域を特徴づけるさまざまな弥生文化要素の分布南限域にも相当する。北部九州地域を代表する弥生墓制の1つ、甕棺を例にとれば、飛地的な存在である薩摩半島西岸の吹上浜周辺をのぞけば、宇土半島基部地域（境目遺跡、畑中遺跡など）に分布の南限が存在する〔藤尾 1989, 中園 2004〕。また、今山産石斧の分布南限も宇土半島基部地域（田平遺跡、城山遺跡など）である〔高木 1983, 下條編 1989〕。武器形青銅器については宇土半島基部地域に分布はみられないが、熊本湾をはさんで北に面する八ノ坪遺跡で細形に分類される武器形青銅器の鋳型、さらには小銅鐸の鋳型も検出されている〔表2文献133 : 林田編 2008〕。武器形青銅器の生産が、少なくとも八ノ坪遺跡が所在する熊本平野北部地域で行われていたのである。

先に検討した銅鏡も含め、弥生時代の北部九州地域を代表する文化要素の多くが、宇土半島基部地域を分布の南限としている。とくに、人々の精神性を象徴する甕棺や武器形青銅器の主要分布範囲が宇土半島基部地域までである点は、北部九州地域から宇土半島基部地域までが共通の文化圏であった可能性を強く示唆する。つまり、宇土半島基部地域は、地理的には有明海の南端であり、文化的には北部九州地域の弥生文化がおよぶ南端でもあったのである。

古墳時代前期に宇土半島基部地域が重視され、そこにいちやくいくつもの有力な前方後円墳が築造されたこと背景には、こうした前代の地域的特性があるのではないかと考えられる。

第2・3章で検討したように、弥生時代の終末から古墳時代の初頭にかけて、熊本県地域では、甕の脚台が失われ、銅鏡の分布状況が変化し、鉄器生産が衰退するが、これらはすべて畿内地域にあった中央政権とのかかわりで説明できるものである。すなわち、甕の脚台消失は、近畿第Ⅴ様式系統や庄内式系統、布留式系統の甕、あるいはそれらの影響を受けて丸底に変化した北部九州系在地甕の影響である。また、銅鏡分布の変化は、それが漢鏡7期段階に起こっていることを考えれば、同時期に生じた日本列島規模の中国鏡分布の変化、すなわち北部九州地域から畿内地域へ中国鏡分布の中心が移動すること〔岡村1999、福永2008〕と連動するものであった可能性が高い。熊本県地域の三角縁神獣鏡が、それ以前の銅鏡分布の中心地域とは異なる場所にもたらされている点も、こうした列島規模での中国鏡分布の変化と関連していると思われる。さらに、鉄器生産の衰退は、畿内地域にあった中央政権が北部九州地域の首長と結びながら鉄素材を朝鮮半島南部地域に求めたことと大いに関連すると考えられる。つまり、朝鮮半島南部地域からの良質な鉄素材の入手ルートが整備され、福岡県博多遺跡群に精錬鍛冶、鍛錬鍛冶の一大中心地が成立することと相前後するように、熊本県地域での鍛冶活動は完全に衰退するのである。

このように、弥生時代終末から古墳時代初頭における熊本県地域の社会は、中央政権の政治・経済活動にかかわって大きく変化したと考えられる。おそらく当該時期にみられる集落の消長も、こうした動きに関連したものであるだろう。厳然とした前方後円墳の規模の格差にみられるように、当時の中央政権は中心・周辺関係の構築を目指していたと思われるが、その目的を達成するため、従来からの地域的枠組みを越えたところにおいて、各地域との新たな関係を取り結ぼうとしたのではないかと考えられる。地域において大胆な集落の再編が起こった理由は、ここにあると思うのである。

中央政権は、古墳にさまざまな階層的要素をもちこみ、それによって生み出された秩序にもとづいて中心的立場を確立していったが、その地理的射程は、前方後円墳の分布域を根拠にすれば、前代までの地域間関係に大きく影響されたものであったと考えられる。すなわち、弥生時代に水田稲作が主要な生業として定着した範囲である。そうしてみたとき、北部九州地域の弥生文化がおよぶ南端域であった宇土半島基部地域は、中央政権側からみた内なる世界の最前線の位置にあたる。そのため、外なる世界に対する内なる世界の共同性を象徴する場所として、内外の境界域に相当する宇土半島基部地域がとくに重視され、そこに大規模な前方後円墳がいちやく築造されるに至ったと考えることができよう。

なお、八代平野周辺部は、甕棺の分布域からははずれるが、その球磨川下流域には弥生時代前期から集落が営まれ、上日置女夫木遺跡では小銅鐸が出土している。宇土半島基部地域からも十分に視認できる位置にあり、八代海沿岸北半部における唯一の平野部である。そして、ここより南では、

山地が海岸線にまでせまっている。八代平野周辺部は、北部九州地域から九州島西岸を南へ下ってきた場合の本当の行き止まりのような場所である。そうしたいわばフロンティア的な位置であったからこそ、八代平野周辺部にも中央政権からの強い働きかけがあり、三角縁神獣鏡などがもたらされることになったと考えられる。

おわりに

広瀬和雄は、「首長の存立基盤が水田（畠）稲作を基調にした農耕共同体であれば、一定の拡がりをもった平野には一つの首長墓系譜がみられるのが普通だが、そうではない地域も目につく」と記す〔広瀬 2011：p.22〕。また、「『水田稲作に適した広い平野には強大な政治権力が育つ』との生産力史観では、解決しがたい地域がある。」「こうした他の地域や時期からは『浮いた』状態を示す前方後円墳は、非農耕的かつ非在地的な要因を考えないと、各地の歴史的な脈にはおさまりにくい」とも述べる〔同：p.23〕。熊本県地域の古墳時代前期の様相は、まさにこれに該当する。

ただし、若狭徹が検討した群馬県地域のように、低湿地開発にともなう水田経営の発達と前期の有力古墳の築造とが密接に関連する地域は確実に存在する〔若狭 2012〕。私も、はじめに述べたように、水田稲作は土地への強い執着を生じさせる性格を有するから、水系ごとに密接な結びつきが形成され、それが首長墓系譜を生み出す母体になるとの認識に異論はない。首長の主たる任務は自身が統括する農業共同体の維持であると考えられるから、そのさらなる成長を成し遂げた首長がより大きな尊敬を集め、古墳の被葬者になることは自然な流れである。

しかし、本稿で検討した熊本県地域のように、弥生時代後期の有力な農業共同体が前方後円墳築造の母体にはならず、従来の経済基盤を越えたところ、たとえば地域を象徴する場所に、あるいは交通の要衝に前方後円墳が築造される場合があることこそ、日本列島の古墳がもつ重要な特性なのである。つまり、古墳が相当の政治性を帯びた存在であることを如実に物語る現象である。おそらく、前方後円墳分布の周縁地域であるからこそ、熊本県地域においてはそうした古墳がもつ政治性が顕著に表れたともいえるであろう。

ところで、宇土半島基部地域の首長墓系譜は、集成編年 4 期で断絶する。それ以後、すなわち古墳時代中期以後の熊本県地域の古墳動向については以前に検討したことがあるが、河川づたいの内陸ルートに有力な前方後円墳が築かれる傾向がある〔杉井 2012〕。しかし、古墳と集落との関係についての検討はまだ果たせていない。今後も研鑽を積みたい。

註

(1)——脱稿後、2016 年度の水俣市北園上野古墳群発掘調査において、地下式板石積石室墓から 2 点の銅鏃が検出された。いずれも古墳時代前期末から中期前葉に属する最終段階の銅鏃と考えられる。現状では、この 2 点が九州島西岸最南端出土の古墳時代銅鏃である。

(2)——西弥護免遺跡の近くを流れる堀川は（図1～3）、

江戸時代に開削された農業用水路である。

(3)——脱稿後の 2016 年度、上高橋高田遺跡のすぐ南に位置する熊本市西区上代町遺跡群で第 5 次調査が行われ、上高橋高田遺跡と同様、弥生時代中期および古墳時代前期後葉から中期、後期の集落であることが明らかとなった。良好な遺存状態のウマ埋葬土坑も検出された。

引用・参考文献

- 阿南 亨 2007 「総括」『森北後田遺跡・藤田上原遺跡』、菊池市文化財調査報告第2集、菊池市教育委員会、pp.55-60.〈*〉
- 石橋新次 1983 「中九州における古式土師器」『古文化談叢』第12集、九州古文化研究会、pp.105-143.〈*〉
- 伊藤淳史 2005 「国家形成前夜の遺跡動態—京都府南部（山城）地域の事例から—」『国家形成の比較研究』、学生社、pp.282-303.
- 岡村秀典 1999 『三角縁神獣鏡の時代』、歴史文化ライブラリー 66、吉川弘文館
- 乙益重隆 1964 「中九州地方」『弥生式土器集成』本編1、東京堂、pp.13-19.〈*〉
- 亀田 学 2001 「熊本平野周辺の弥生土器の編年案」『梅ノ木遺跡』Ⅱ-下巻、熊本県文化財調査報告第199集、熊本県教育委員会、pp.115-119・124-135.〈*〉
- 亀田 学・藤島友美 2014 「考古学的分析」『山田松尾平遺跡』、熊本県文化財調査報告第304集、熊本県教育委員会、上巻 pp.117-167・下巻の考古学的分析 pp.8-19.〈*〉
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、日本考古学会、pp.1-70.
- 河森一浩 1998 「免田式土器の再検討—様式構造をめぐって—」『肥後考古』第11号、肥後考古学会、pp.1-34.〈*〉
- 木崎康弘 1996 「弥生時代後期土器群の編年学的研究」『蒲生・上の原遺跡』、熊本県文化財調査報告第158集、熊本県教育委員会、pp.217-232.〈*〉
- 木崎康弘 1997 「球磨・人吉地方の古墳時代土師器編年」『堂園遺跡・中尾遺跡・別府遺跡』、熊本県文化財調査報告第159集、熊本県教育委員会、pp.132-148.〈*〉
- 木崎康弘・吉田正一 1993 「弥生時代の狩尾遺跡群」『狩尾遺跡群』、熊本県文化財調査報告第131集、熊本県教育委員会、pp.466-477.〈*〉
- 久住猛雄 1999 「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIX、庄内式土器研究会、pp.62-143.
- 隈 昭志 1983 「中九州」『三世紀の考古学』下巻、学生社、pp.54-78.
- 熊本県教育委員会 1992a 「二子塚遺跡出土弥生土器の分類と編年」『二子塚』、熊本県文化財調査報告第117集、熊本県教育委員会、pp.341-358.〈*〉
- 熊本県教育委員会 1992b 「二子塚遺跡出土土器の時期」『二子塚』、熊本県文化財調査報告第117集、熊本県教育委員会、pp.359-362.〈*〉
- 熊本県教育会玉名郡支会編 1923 『玉名郡誌』、熊本県玉名郡役所（名著出版1972年復刻）
- 熊本県農政部 1971 『熊本県の干拓』
- 佐藤伸二 1970a 「中九州に於ける弥生終末期土器の諸問題」『熊本史学』第35・36号、熊本史学会、pp.51-62.〈*〉
- 佐藤伸二 1970b 「中部九州における前期古墳発生の一側面—とくに土師器の編年に関する再検討—」『法文論叢』第26号史学篇、熊本大学法文学会、pp.1-21.〈*〉
- 佐藤伸二 1998 「金石併用の文化—弥生文化—」『新熊本市史』通史編第1巻、熊本市、pp.503-604.
- 佐藤伸二 2003 「『松葉の瀬戸』はあったか」『新宇土市史』通史編第1巻、宇土市、pp.308-309.
- 島津義昭・高谷和生 1987 「下山西遺跡出土土器の編年（案）について」『下山西遺跡』、熊本県文化財調査報告第88集、熊本県教育委員会、pp.251-269.〈*〉
- 下垣仁志 2012a 「古墳出現の過程」『古墳時代の考古学』第2巻、古墳出現と展開の地域相、同成社、pp.13-31.
- 下垣仁志 2012b 「古墳時代首長墓系譜論の系譜」『考古学研究』第59巻第2号、考古学研究会、pp.56-70.
- 下條信行編 1989 『古代史復元』第4巻、弥生農村の誕生、講談社
- 杉井 健 1994 「山陰型甕形土器と山陰地方」『古文化談叢』第33集、九州古文化研究会、pp.95-116.
- 杉井 健 2002 「城ノ越古墳」『新宇土市史』資料編第2巻、宇土市、pp.208-211.
- 杉井 健 2003a 「古墳時代概説」『新宇土市史』通史編第1巻、宇土市、pp.421-444.（第4項 pp.437-444.の本文・編年図は高木恭二による）
- 杉井 健 2003b 「宇土半島基部における古墳文化のはじまり」『新宇土市史』通史編第1巻、宇土市、pp.445-471.
- 杉井 健 2004 「熊本県地域における古墳時代中・後期の首長墓系譜変動にかんする覚書」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』、平成13～平成15年度科学研究費補助金基盤研究（B）（1）研究成果報告書、大阪大学大学院文学研究科、pp.3-26.
- 杉井 健編 2009 『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』、2006年度～2008年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書、熊本大学文学部
-

- 杉井 健 2010 「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』, 第13回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表要旨集, 九州前方後円墳研究会, pp.131-184.
- 杉井 健 2012 「マロ塚古墳出現の背景」『国立歴史民俗博物館研究報告』第173集, 国立歴史民俗博物館, pp.541-562.
- 杉井 健 2014 「前方後円墳体制論の再検討」『古墳時代の考古学』第9巻, 21世紀の古墳時代像, 同成社, pp.35-49.
- 勢田廣行 1979 「山鹿市方保田白石遺跡出土古式土師器について」『古文化談叢』第6集, 九州古文化研究会, pp.129-136. 〈*〉
- 勢田廣行 1980 「竜北・高塚遺跡出土の古式土師器について—熊本県内出土複合口縁壺について—」『古文化論叢』, 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会, pp.415-436. 〈*〉
- 高木恭二 1983 「宇土半島基部の弥生資料(一)—境目遺跡出土の石器—」『宇土市史研究』第4号, 宇土市教育委員会, pp.27-36.
- 高木恭二 2001 「まとめ」『新宇土市史基礎資料』第9集, 宇土市教育委員会, pp.43-48.
- 高木恭二・藏富士寛 1998 「肥後における古墳文化の特性—筑後八女古墳群との比較—」『八女古墳群の再検討—周辺地域で、なにがおこったか—』, 第1回九州前方後円墳研究会シンポジウム発表要旨・見学会資料, 九州前方後円墳研究会, pp.69-84.
- 高木正文 1979 「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』第6集, 九州古文化研究会, pp.89-128. 〈*〉
- 高谷和生 2001 「柳町遺跡出土の弥生時代終末期から古墳時代前期土器について」『柳町遺跡』I-第2分冊, 熊本県文化財調査報告第200集, 熊本県教育委員会, pp.84-126. 〈*〉
- 高野啓一 1975 「古閑遺跡出土の弥生終末期土器について」『熊本史学』第45号, 熊本史学会, pp.31-38. 〈*〉
- 田辺哲夫 1953 「野辺田遺跡発掘調査中間報告」『肥後考古学会会報』第1号, 肥後考古学会, pp.1-10.
- 檀 佳克 2003 「分類と編年」『北無田遺跡』, 植木町文化財調査報告書第16集, 植木町教育委員会, pp.170-187. 〈*〉
- 檀 佳克 2004 「人吉盆地における古墳時代の土器編年について—系統的視点からみた併行関係の再検討—」『熊本古墳研究』第2号, 熊本古墳研究会, pp.88-100. 〈*〉
- 檀 佳克 2005 「九州出土の棒状浮文を有する土師器に関する一考察」『九州考古学』第80号, 九州考古学会, pp.27-43. 〈*〉
- 檀 佳克 2011a 「玉名市岱明町山下遺跡出土土器について」『熊本古墳研究』第4号, 熊本古墳研究会, pp.111-122. 〈*〉
- 檀 佳克 2011b 「九州」『古墳時代の考古学』第1巻, 古墳時代史の枠組み, 同成社, pp.57-67. 〈*〉
- 檀 佳克 2012 「南筑後・肥後地域と島原半島との交流」『有明海をめぐる弥生時代集落と交流』, 長崎県考古学会・肥後考古学会, pp.74-79.
- 堤 英介・上高原聡 2010 「総括」『小柳遺跡』, 益城町文化財調査報告第21集, 益城町教育委員会, pp.89-98. 〈*〉
- 都出比呂志 1988 「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』第22号, 史学篇, 大阪大学文学部, pp.1-16.
- 都出比呂志 1989 『日本農耕社会の成立過程』, 岩波書店
- 中里伸明 2009 「総括(弥生時代)」『戸坂遺跡』II, 熊本市教育委員会, pp.152-190. 〈*〉
- 中園 聡 2004 『九州弥生文化の特質』九州大学出版会
- 中村幸史郎 1982 「方保田東原遺跡出土の土器の編年(案)」『方保田東原遺跡』, 山鹿市立博物館調査報告書第2集, 山鹿市教育委員会, pp.229-235. 〈*〉
- 中村幸史郎 1987 「溝状遺構出土の甕について」『方保田東原遺跡』3, 山鹿市立博物館調査報告書第7集, 山鹿市教育委員会, pp.100-103. 〈*〉
- 西健一郎 1983 「黒髪式土器の基礎的研究」『古文化談叢』第12集, 九州古文化研究会, pp.77-104. 〈*〉
- 西嶋剛広 2002 「鉄製品」『石川遺跡』第1分冊, 植木町文化財調査報告書第14集, 植木町教育委員会, pp.222-253.
- 西住欣一郎 1992 「弥生時代について」『うてな遺跡』, 熊本県文化財調査報告第121集, 熊本県教育委員会, pp.209-218. 〈*〉
- 西山由美子 2009 「熊本県における弥生時代後期の社会変化」『弥生時代後期の社会変化』, 第58回埋蔵文化財研究集会発表要旨・資料集, 埋蔵文化財研究会, pp.339-344.
- 野島 永 2009 『初期国家形成過程の鉄器文化』, 雄山閣
- 野田拓治 1982 「古式土師器の成立と展開—特に中部九州における編年試案—」『古文化論集』下巻, 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会, pp.947-987. 〈*〉
- 馬場正弘 2011a 「弥生中期後半から後期前半について」『北の崎遺跡・鍛抜遺跡』, 熊本県文化財調査報告第264集,

- 熊本県教育委員会, pp.427-435. 〈*〉
- 馬場正弘 2011b 「古墳時代について」『北の崎遺跡・弼拔遺跡』, 熊本県文化財調査報告第264集, 熊本県教育委員会, pp.436-446. 〈*〉
- 林田和人 2006 「弥生土器」『八ノ坪遺跡』I-分析・考察・図版編, 熊本市教育委員会, pp.53-57. 〈*〉
- 林田和人 2011 「環有明海における熊本県地域の様相—集落・墓制・祭祀を中心として—」『環有明海の交流—台付甕をめぐる諸問題—』, 肥後考古学会・長崎県考古学会, pp.42-51.
- 原田範昭 1999a 「熊本」『弥生時代の集落—中・後期を中心として—』, 第45回埋蔵文化財研究集会発表要旨集, 埋蔵文化財研究会, 追加資料 pp.1-15.
- 原田範昭 1999b 「中九州における弥生時代後期土器の編年—熊本平野部の土器にみる社会背景—」『先史学・考古学論究』Ⅲ, 龍田考古会, pp.29-58. 〈*〉
- 原田範昭 2006 「総括」『江津湖遺跡群』Ⅱ, 熊本市教育委員会, pp.258-263. 〈*〉
- 肥後考古学会 1983 「肥後古鏡聚英」『肥後考古』第3号
- 広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編, 山川出版社, pp.24-26.
- 広瀬和雄 2011 「前方後円墳とはなにか」『講座日本の考古学』第7巻, 古墳時代(上), 青木書店, pp.3-53.
- 弘中正芳 2010 「小野原遺跡群出土の土器」『小野原遺跡群』第2分冊, 熊本県文化財調査報告第257集, 熊本県教育委員会, pp.167-179. 〈*〉
- 福田匡朗 2011a 「菊池川流域における古墳時代初頭前後の土器編年」『熊本古墳研究』第4号, 熊本古墳研究会, pp.62-76. 〈*〉
- 福田匡朗 2011b 「中九州における台付甕の盛衰—他地域との交流を視野に入れて—」『環有明海の交流—台付甕をめぐる諸問題—』, 肥後考古学会・長崎県考古学会, pp.32-41. 〈*〉
- 福田匡朗 2012 「白川流域における古墳時代初頭前後の土器編年」『熊本古墳研究』第5号, 熊本古墳研究会, pp.35-55. 〈*〉
- 福田匡朗 2014 「中九州における弥生後期集落の変遷」『東アジア古文化論攷』2, 中国書店, pp.144-153.
- 福永伸哉 2005 「三角縁神獣鏡の研究」, 大阪大学出版会
- 福永伸哉 2008 「青銅鏡の政治性萌芽」『弥生時代の考古学』第7巻, 儀礼と権力, 同成社, pp.112-126.
- 藤尾慎一郎 1989 「九州の甕棺—弥生時代甕棺墓の分布とその変遷—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第21集, 国立歴史民俗博物館, pp.141-206.
- 藤本貴仁編 2012 『宇土城跡(西岡台)』Ⅺ, 宇土市埋蔵文化財調査報告書第33集, 宇土市教育委員会
- 古川 匠 2011-2013 「桂川右岸地域における古墳時代集落の動向(1)~(5)」『京都府埋蔵文化財情報』第116-119/122号, 京都府埋蔵文化財調査研究センター, pp.42-45./30-35./13-34./28-37./1-23.
- 古庄浩明 1989 「中九州における古式土師器の成立—白川・緑川水系地域について—」『國學院大學考古学資料館紀要』第5輯, 國學院大學考古学資料館, pp.55-67. 〈*〉
- 松木武彦 2008 「弥生時代の集落と集団」『弥生時代の考古学』第8巻, 集落からよむ弥生社会, 同成社, pp.3-16.
- 松本健郎 1974 「中九州における古式土師器の新資料」『考古学雑誌』第60巻第3号, 日本考古学会, pp.41-49. 〈*〉
- 南健太郎 2007 「肥後地域における銅鏡の流入とその特質」『肥後考古』第15号, 肥後考古学会, pp.13-30.
- 宮崎敬士 1995 「九州4(熊本県)」『ムラと地域社会の変貌—弥生から古墳へ—』, 第37回埋蔵文化財研究集会発表要旨資料, 埋蔵文化財研究会, pp.245-268.
- 村上恭通 1992a 「中九州における弥生時代鉄器の地域性」『考古学雑誌』第77巻第3号, 日本考古学会, pp.63-88.
- 村上恭通 1992b 「鉄器生産の諸問題」『二子塚』, 熊本県文化財調査報告第117集, 熊本県教育委員会, pp.471-478. (本書の実際の発行年は2011年)
- 村上恭通 1997 「肥後における鉄研究の成果と展望」『肥後考古』第10号, 肥後考古学会, pp.1-19.
- 村上恭通 2007 『古代国家成立過程と鉄器生産』, 青木書店
- 村上恭通 2010 「肥後・阿蘇地域における弥生時代後期鉄器の諸問題—下扇原遺跡を中心として—」『小野原遺跡群』第2分冊, 熊本県文化財調査報告第257集, pp.283-299.
- 若狭 徹 2012 「耕地開発と集団関係の再編」『古墳時代の考古学』第7巻, 内外の交流と時代の潮流, 同成社, pp.29-43.

※ 〈*〉は熊本県地域の弥生時代後期前後の土器編年関連文献を示す。

図表出典

図1～3 カシミール 3D を用いて杉井作成

図4 1・2：表2 文献35 - 岡本編 2005

3・17・20・21：表2 文献44 - 中村ほか編 1982

4・9・10・14：表2 文献43 - 中村編 1987

5・11・15：表2 文献113 - 木崎編 1993

6・12：表2 文献128 - 長谷部ほか編 2013b

16：表2 文献129 - 長谷部ほか編 2013c

18・19：表2 文献139 - 原田・岩谷編 2006

22：表2 文献135 - 大坪編 2010

7・8・13：表2 文献159 - 島津ほか編 1992

図5 1：表2 文献54 - 木崎編 1996

2：表2 文献95 - 隈 1983

3：木崎康弘 1991「熊本県」『日本考古学年報』42（1989年度版），日本考古学協会，pp.343-350.

図6 表2 文献178 - 藤本編 2012

図7 村上 2007

図8 杉井 2010 を改訂

表1・2 杉井作成

（熊本大学文学部，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2017年3月23日受付，2017年6月5日審査終了）

表2 熊本県地域における弥生時代後期から古墳時代前期にかけての主要集落遺跡の内容

遺跡番号	地域区分			遺跡名	所在地	調査面積 (m ²)	対象住居数 (棟)	文献番号	弥生時代後期の環濠 ○	古墳時代前期の環濠 ● 方形区画	環濠継続時期
	川名	流域	玉名湾								
1	菊池川	下流域	玉名湾西部	築地池下	玉名市築地	1,119	1	1			
2	菊池川	下流域	玉名湾西部	狐ん路	玉名市築地	約30	1	2			
3	菊池川	下流域	玉名湾西部	今見堂	玉名市築地	250	0	3			
4	菊池川	下流域	玉名湾西部	築地市場	玉名市築地	約35	0	4			
5	菊池川	下流域	玉名湾西部	築地館跡	玉名市築地	6,647	24	5	○		脚台付長胴甕まで
	菊池川	下流域	玉名湾西部	築地館跡	玉名市築地	約20	0	6			
6	菊池川	下流域	玉名湾西部	蓮華	玉名市築地	2,600	7	3			
7	菊池川	下流域	玉名湾西部	南大門	玉名市築地	330	18	7			
8	菊池川	下流域	玉名湾西部	東南大門	玉名市築地	2,800	0	8			
9	菊池川	下流域	玉名湾西部	五郎丸	玉名市山田	533	0	9			
	菊池川	下流域	玉名湾西部	五郎丸	玉名市山田	533	2	9			
10	菊池川	下流域	玉名湾西部	山田松尾平	玉名市山田	2,700	6,78,24	10			
11	菊池川	下流域	玉名湾西部	平嶋	玉名市山田	250	11	11			
12	菊池川	下流域	玉名湾西部	高岡原	玉名市山田	986	1	9			
	菊池川	下流域	玉名湾西部	高岡原	玉名市山田	240	3	9			
	菊池川	下流域	玉名湾西部	高岡原	玉名市山田	692	1	2			
	菊池川	下流域	玉名湾西部	高岡原	玉名市山田	約65	8	4			
	菊池川	下流域	玉名湾西部	高岡原	玉名市山田	約60	2	6			
	菊池川	下流域	玉名湾西部	高岡原	玉名市山田	600	8	12			
13	菊池川	下流域	玉名湾西部	大原	玉名市岱明町野口	約3,000	?	13			
14	菊池川	下流域	玉名湾西部	塚原	玉名市岱明町野口	?	?	14	○		?
15	菊池川	下流域	玉名湾西部	山下	玉名市岱明町山下	30	1	15,16,17			
16	菊池川	下流域	玉名湾北部	小園	玉名市石貫	2,406	31,3	18			
17	菊池川	下流域	玉名湾北部	岩崎城跡	玉名市岩崎	1,000	9	19			
	菊池川	下流域	玉名湾北部	岩崎城跡	玉名市岩崎	約18	1	4			
18	菊池川	下流域	玉名湾北部	玉名平野条里跡 (C地点)	玉名市岩崎	5,427	0	6			
19	菊池川	下流域	玉名湾北部	柳町	玉名市河崎	10,722	7	20			
	菊池川	下流域	玉名湾北部	柳町	玉名市河崎	9,109	0	21			
	菊池川	下流域	玉名湾北部	柳町	玉名市河崎	9,372	9	22		●?	ハケ球形胴甕まで
20	菊池川	下流域	玉名湾北部	両迫間日渡	玉名市玉名・両迫間	4,800	0	23			
	菊池川	下流域	玉名湾北部	両迫間日渡	玉名市玉名・両迫間	18,106	20	24			
21	菊池川	下流域	玉名湾北部	玉名平野条里跡 (古閑前地区)	玉名市両迫間	2,538	15	25			
22	菊池川	下流域	玉名湾東部	中北	玉名市伊倉北方	500	4	4			
23	菊池川	下流域	玉名湾東部	野部田	玉名市天水町野部田	?	?	26,27,28	○		?
24	菊池川	下流域	木葉川下流域	北の崎	玉名市安楽寺	5,038	21,16	29			
25	菊池川	下流域	木葉川下流域	稲佐津留	玉東町稲佐	2,274	33	30			
26	菊池川	下流域	木葉川上流域	内山	熊本市北区植木町滴水	26	3	31			
27	菊池川	下流域	木葉川上流域	滴水館跡	熊本市北区植木町滴水	55	0	32			
28	菊池川	下流域	木葉川上流域	ラスギ	熊本市北区植木町滴水	1,100	18	33	○?		?
	菊池川	下流域	木葉川上流域	ラスギ	熊本市北区植木町滴水	17,092	4	34	○?		?
29	菊池川	下流域	江田川下流域	前田	玉名市月田	4,656	41,16	35			

黒髪式以前 〔～中期後半〕	出土土器の時期(甕の様相)					特徴的な遺物	特記・メモ
	ハケ 長胴 脚台付 〔後期〕	タタキ・ハケ 長胴 (長)脚台付 〔後期〕	タタキ・ハケ 長胴 脚台なし丸底 〔古墳前期初頭?〕	タタキ・ハケ 球形胴 丸底(尖り底) 〔古墳前期初頭?〕	ハケ 球形胴 〔古墳前期 ～中期前葉〕		
	○						
	?						
	○						
	?						包含層。
	○	○					断絶部を有する条溝。
	○						包含層。
	○						
	○						家形土器片出土。
	△	○	○	○	○	古墳時代銅鏃 1	墓域。弥生中期の甕棺墓群を切るかたちで墳丘墓造営、墳丘墓周溝より弥生後期～古墳前期の土器出土。
○	○						包含層。
△	○						
△	△	○	○	○	○	銅鏡片 1(包含層)	弥生後後半から古墳時代前期へ継続。
	○						
	○						
	○						
	○	○					
	?						
	?						
	○	○				既調査において小型仿製鏡 1, 銅鏡片 1	
	?	?				銅鏡片 2, 小型仿製鏡 1, 銅鏃	執筆時未報告のため詳細不明。
?	?	?					執筆時未報告のため詳細不明。
				△	○		
	○	○			△		
	○	○					
	?						
				○	○		繁根木川左岸沿い。土器集中窪地状遺構。
		△ (流路)	○ (流路, 井戸)	○ (流路, 井戸)	○ (流路, 井戸, 住居)		I・II・IV区(III区は玉名市調査範囲)。
		?	?	○	○	銅鏡片 1	報告不十分, 弥生末～古墳初頭の水田。
			△	○	○ (住居)	銅鏡片 1(大溝)	VII・VIII・IX区(VI・IX区は玉名市調査範囲)。 大溝により古墳時代の集落が囲われていると想定。大溝西側が居住域, 東側が水田域(大溝からの支流が流れ込む)。
					○		弥生中期の水田畦畔, 古墳中期の祭祀遺構。
			△	○	○		熊本県初の弥生水田の検出(弥生終末～古墳前期前葉, 古墳前期中葉～後葉の2面の溝・畦畔)。 住居は球胴甕以降。
	○ (住居, 井戸)	○ (住居, 井戸)	△ (井戸)	△ (自然流路)	○ (井戸)		菊池川右岸沿い。
	○						
		○	○	?	△		未報告のため詳細不明。
○ (住居)				△ (住居)	○ (住居)		弥生後期から古墳前期前半に盛期を迎える稲佐津留遺跡の西に隣接。 弥生中期: 北の崎→弥生後期: 稲佐津留→古墳前期: 稲佐津留・北の崎, の集落変遷か?
	△ (住居)	○ (住居)	?	○ (住居)	△ (住居)	巴形銅器片 1(住居), 小型仿製鏡 1(住居), 銅鏡片 1(住居)	山陰型甕形土器(把手二対縦横タイプ)出土。 弥生中期および古墳前期以降に盛期を迎える北の崎遺跡の東側に隣接。
		○					滴水館跡に北接。
		○					中世土塁下の旧表土とその下層。
	○					小型仿製鏡 1(住居), 銅鏃 1(住居)	
	○						墓域中心: 土壙墓 44・木棺墓 6・箱式石棺墓 1。 西側の県調査区が集落域。
○	○					銅鏃 1(住居)	

遺跡番号	地域区分			遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	対象住居数 (棟)	文献番号	弥生時代後期の環濠 ○	古墳時代前期の環濠 ● 方形区画	環濠継続時期
	川名	流域	江田川下流域								
30	菊池川	下流域	江田川下流域	諏訪原	和水町原口	?	73	36	○		脚台なし長胴甕まで?
	菊池川	下流域	江田川下流域	諏訪原	和水町恵田・原口	約700	3	37			
	菊池川	下流域	江田川下流域	諏訪原	和水町原口	150	4	38			
	菊池川	下流域	江田川下流域	諏訪原	和水町原口	約880	9	39			
31	菊池川	下流域	久米野川下流域	久米野前畑	和水町久米野	25	0	40			
32	菊池川	中流域	和仁川上流域	田中城跡	和水町和仁	約1500	2	41			
33	菊池川	中流域	菊鹿盆地西半部右岸	桜町	山鹿市山鹿	?	?	42	○		?
34	菊池川	中流域	菊鹿盆地西半部右岸	古閑白石	山鹿市古閑	? (試掘)	0	43	○?		脚台付長胴甕まで
35	菊池川	中流域	菊鹿盆地西半部右岸	方保田石原	山鹿市方保田	採集	0	43			
36	菊池川	中流域	菊鹿盆地西半部右岸	方保田東原	山鹿市方保田	約2500	80	44	○		脚台なし長胴甕まで?
	菊池川	中流域	菊鹿盆地西半部右岸	方保田東原	山鹿市方保田	550	24	45		●?	ハケ球形胴甕まで?
	菊池川	中流域	菊鹿盆地西半部右岸	方保田東原	山鹿市方保田	約850	7	45			
	菊池川	中流域	菊鹿盆地西半部右岸	方保田東原	山鹿市方保田	299	19	43	○		脚台なし長胴甕まで
	菊池川	中流域	菊鹿盆地西半部右岸	方保田東原	山鹿市方保田	433	8.52	46		●?	ハケ球形胴甕まで?
	菊池川	中流域	菊鹿盆地西半部右岸	方保田東原	山鹿市方保田	2,868	93	47	○①	●?②	①脚台なし長胴甕まで ②脚台なし長胴甕から
	菊池川	中流域	菊鹿盆地西半部右岸	方保田東原	山鹿市方保田	1,250	3	48			
	菊池川	中流域	菊鹿盆地西半部右岸	方保田東原	山鹿市方保田	1,172	59	49	○		脚台なし長胴甕まで
	菊池川	中流域	菊鹿盆地西半部右岸	方保田東原	山鹿市方保田	450	3	50	○		タタキ球形胴甕まで
	菊池川	中流域	菊鹿盆地西半部右岸	方保田東原	山鹿市方保田	1,062	12	51	○		タタキ球形胴甕まで
	菊池川	中流域	菊鹿盆地西半部右岸	方保田東原	山鹿市方保田	900	3.11	52			
	菊池川	中流域	菊鹿盆地西半部右岸	方保田東原	山鹿市方保田	1,030	0	53	○		タタキ球形胴甕まで
	37	菊池川	中流域	菊鹿盆地西半部右岸	藤井前田	山鹿市藤井	採集	0	43		
38	菊池川	中流域	上内田川中流域	蒲生・上の原	山鹿市蒲生	8,000	13	54	○		脚台付長胴甕まで
39	菊池川	中流域	上内田川中流域	津袋大塚	山鹿市鹿本町津袋	?	2	55	○?		脚台付長胴甕まで
40	菊池川	中流域	上内田川上流域	天岩戸岩陰	山鹿市菊鹿町山内	24	×	56			
41	菊池川	中流域	上内田川下流域	うてな	菊池市七城町台	?	約70	57	○		?
	菊池川	中流域	上内田川下流域	うてな	菊池市七城町台	8,000	0	58	○		脚台なし長胴甕まで
42	菊池川	中流域	米原台地	鞠智城跡	山鹿市菊鹿町米原	2,800	4	59			
43	菊池川	中流域	千田川流域	城尾屋敷	山鹿市鹿央町広	2,200	0	60			
44	菊池川	上流域	河原川下流域	藤田上原	菊池市藤田	1,640	0	61			
45	菊池川	上流域	河原川下流域	東鶴	菊池市下河原	1,700	4	62			
46	合志川	下流域	右岸	小野崎	菊池市七城町蘇崎・小野崎	32,360	約350	63	○		脚台なし長胴甕まで?

黒髪式以前 〔～中期後半〕	出土土器の時期(甕の様相)					特徴的な遺物	特記・メモ
	ハケ 長胴 脚台付 〔後期〕	タタキ・ハケ 長胴 (長)脚台付 〔後期〕	タタキ・ハケ 長胴 脚台なし丸底 〔古墳前期初頭?〕	タタキ・ハケ 球形胴 丸底(尖り底) 〔古墳前期初頭?〕	ハケ 球形胴 〔古墳前期 ～中期前葉〕		
	?	○	○				未正式報告なので詳細不明(写真より判断)。
	?	?	?				
	○	○					
	○						包含層。
	○						中世城主郭部の下層。
	?	?					古い調査のため詳細不明。
	○	○					方保田編年Ⅱ・Ⅲ期相当。
					○		
△	○	○	○	○	○	巴形銅器1(土坑), 銅鏡3・銅鏡片1(土器溜め, 石棺ほか), 銅鏃2(住居ほか)	第1～4次調査。溝状遺構5本。近江工業内1号溝埋没後の住居(2・4号住)から, 方保田東原編年Ⅲ-b期(タタキ・ハケ脚台付長胴甕の最終段階)の土器出土。農協東側トレンチの溝から, 脚台なし長胴甕出土。
		○	○	○	○		第5次調査。3号西側溝から, タタキ球形胴甕・ハケ球形胴甕出土…古墳初頭～前期の溝?。
	○	○					大道小学校校庭。溝は中世城関連。
	○	○	○	△	○	石包丁形鉄器(住居:ハケ長胴甕)	第7次調査。溝から, ハケ脚台付長胴甕～脚台なし長胴甕出土。
			○	○	○	篋被付銅鏃1(土坑)	個人住宅3地点。32番番地点3号溝から, タタキ・ハケ脚台付長胴甕～ハケ球形胴甕出土…主体は脚台なし以降, 古墳初頭～前期の溝?
	△	△	○	○	○	平成8年:小型仿製鏡2(住居)	平成8～12年度範囲確認調査。溝の時期は大きく2つに分かれる…①脚台なし長胴甕まで, ②脚台なし長胴甕から球形胴甕まで…①が弥生の環濠か?
△	△	○	△			家形土器(土器溜め:タタキ・ハケ脚台付長胴甕) 銅鏡片1(包含層)	大道小学校体育館・プール。弥生中期後半の甕棺墓群。
	△	○	○	○	○	小型仿製鏡1(包含層?)	平成14・15年度内容確認調査。検出された溝は, 集落中央を南北に走る…集落内部の区画溝?
	○ (10号溝)	○ (10号溝)	○ (10号溝)	○ (10号溝)	○ (方形周溝墓)		出土文化財管理センター。10号溝は, ハケ脚台付長胴甕～タタキ球形胴甕まで長期継続。その東側の方形周溝墓の周溝からは, ハケ球形胴甕が出土。方形周溝墓の確認は初。
	△ (2・4号溝)	○ (2・4号溝)	○ (2・4号溝)	△ (2・4号溝)	○ (3号溝:周溝墓?)	(平成20年段階で巴形銅器1, 銅鏡10, 銅鏃9との集計)	サンチェリー工業。2・4号溝は長期継続。3号溝は直角に曲がるため方形周溝墓か?
			○	○	○		平成6年度史跡整備。脚台なし以降の段階が中心。
	△	?	○	?			平成21年度史跡整備。溝1・2は, その北側で出土文化財管理センター内の7・10号溝と接続。
					○		
	○	○					溝Ⅰ～Ⅵ(Ⅳ→Ⅰ・Ⅴ→Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ)。 野部田Ⅱb期(=津袋Ⅱ新・方保田Ⅲ=脚台付の最後)で集落廃絶。
	○	○					溝状遺構(断面V字)出土土器による。
	○	△					包含層。
	?	?	?	?	?	小型仿製鏡1(城ノ山Ⅱ区57号住居), 貨泉1(城ノ上Ⅰ区31号住居)	未報告。弥生後期から古墳前期の住居約70, 溝7箇所(環濠?)。
	○ (10号-A溝)	△ (10号-B溝)	○ (10号-B溝)	○ (方形周溝墓)		銅鏡片1(10号-A溝), 銅鏃1(10号-A溝)	環濠→方形周溝墓(ここから球形胴甕に)。住居は城ノ上Ⅰ・Ⅱ区より。
△		△	○				
	△	△					
	○	○					
					○		
	○	○	○	△		銅鏡9, 銅鏡片3, 銅釘1, 銅鏃1	報告記述不十分。方形周溝墓は古墳前期?

遺跡番号	地域区分			遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	対象住居数 (棟)	文献番号	弥生時代後期の環濠 ○	古墳時代前期の環濠 ● 方形区画	環濠継続時期
	川名	流域	岸								
47	合志川	下流域	左岸	大橋	熊本市北区植木町田底	10	0	32			
48	合志川	下流域	右岸	北無田	熊本市北区植木町平井	6,222	23	64			
49	合志川	中流域	左岸	高熊	熊本市北区植木町古閑	37	0	65	○?		?
50	合志川	中流域	左岸	石立	合志市合生	2,500	4	66	○		脚台なし長胴甕まで
51	合志川	中流域	左岸	八反田	合志市合生	7,500	15	67			
52	合志川	中流域	左岸	八反畑	合志市合生	3,800	5	67	○		ハケ脚台付長胴甕まで
53	合志川	中流域	左岸	藤巻	菊池市泗水町福本	5,652	24	68	○		?
54	合志川	中流域	塩浸川流域	小合志原	合志市合生	476	1	69			
55	合志川	中流域	塩浸川流域	陣ノ内	合志市幾久富	1,800	0	70	○		脚台なし長胴甕まで
56	合志川	中流域	豊田川流域	一木中尾	熊本市北区植木町一木	10	1	31			
57	合志川	中流域	小野川流域	石川	熊本市北区植木町石川	4,739	約150	71			
58	合志川	中流域	小野川流域 (下岩野川流域)	松山	熊本市北区植木町岩野	164	1	72			
59	合志川	上流域	左岸	古閑下	菊池市旭志村小原	300	1	73			
60	合志川	上流域	矢護川下流域	伊坂上原	菊池市旭志村伊坂	24,000	3	74			
	合志川	上流域	矢護川下流域	伊坂上ノ原	菊池市旭志村川辺	1,260	10.1	75			
61	合志川	上流域	矢護川上流域	矢護川日向	大津町矢護川	約5,000	28.5	76			
62	井芹川	上流域	左岸	荻迫	熊本市北区植木町荻迫	210	3	77			
63	井芹川	中流域	右岸	五丁中原	熊本市北区貢町・和泉町	40,000	83.4	78,91	○		?
64	井芹川	中流域	右岸	扇田	熊本市北区貢町	15,000	3.21	79			
65	坪井川	上流域	左岸	立石遺跡群	熊本市北区改寄町	1,864	17以上?	80			
66	坪井川	上流域	右岸	小糸山遺跡群	熊本市北区明德町	4,000	93	81	○		?
67	坪井川	上流域	右岸	楠野遺跡群	熊本市北区楠野町	600	6	82			
68	坪井川	上流域	左岸	梶尾遺跡群	熊本市北区梶尾町	2,700	19	81	○		?
69	坪井川	中流域	左岸(堀川合流点)	清水町遺跡群	熊本市北区八景水谷	230	4	83			
	坪井川	中流域	左岸(堀川合流点)	清水町遺跡群	熊本市北区八景水谷	250	3.2	84			
70	坪井川	中流域	右岸	徳王	熊本市北区高平	500	29	81			
71	白川	中流域	右岸	庵ノ前	熊本市北区龍田	6,900	3	85			
72	白川	中流域	右岸	迫ノ上	熊本市北区龍田	6,400	7	86			
73	白川	中流域	左岸	西谷	熊本市東区下南部	1,500	8	87			
74	白川	中流域	左岸	下南部	熊本市東区下南部	810	8	88			
75	白川	中流域	左岸	長嶺	熊本市東区長嶺東	1,050	1	89			
	白川	中流域	左岸	長嶺遺跡群	熊本市東区長嶺東	777	49	90			
	白川	中流域	左岸	長嶺	熊本市東区長嶺東	420	9	91			
	白川	中流域	左岸	長嶺遺跡群	熊本市東区長嶺東	457	27	92			
76	白川	中流域	左岸	吉原	熊本市東区吉原町	1,127	0	93			
77	白川	中流域	右岸	法王鶴	熊本市北区龍田町弓削	1,889	18	94	○		脚台付長胴甕まで
78	白川	中流域	左岸	石原亀甲	熊本市東区石原	?	55	95,96			

出土土器の時期(甕の様相)						特徴的な遺物	特記・メモ
黒髪式以前 〔～中期後半〕	ハケ 長胴 脚台付 〔後期〕	タタキ・ハケ 長胴 (長)脚台付 〔後期〕	タタキ・ハケ 長胴 脚台なし丸底 〔古墳前期初頭?〕	タタキ・ハケ 球形胴 丸底(尖り底) 〔古墳前期初頭?〕	ハケ 球形胴 〔古墳前期 ～(中期前葉)〕		
	○	○					包含層、合志川を挟んで小野崎遺跡の対岸低地。
			○ (北無田Ⅰ)	○ (北無田Ⅰ)	○ (北無田Ⅱ・Ⅲ)		沖積低地。 北無田Ⅰ～Ⅲ期編年。Ⅲ期で住居が長方形2本主柱から方形4本主柱に変化=古墳前期後半とする。
△	△	○			△		環濠埋没後、その上に高熊古墳(集成7期)が築造される。
	○	○	△				方形周溝墓(古墳中期前葉)が環濠を切るが、古墳前期のものは未検出。
	○						
	○						
	○				○		SD1601は環濠?、SD901・1301は区画溝? 報告では溝SD901・1301は弥生中期末から古墳前期まで継続すると認定。しかし、住居を含め出土土器全体をみると弥生後期後半が欠けるか?
	?						
		?	○				環濠のみ検出。環濠は弥生中期後半の甕棺墓を切る、ハケのみ脚台付長胴甕は未出土。
					○		植木町内初の古墳前期集落発見。
	△	○	○			小型仿製鏡1(住居)	古墳前・中期の断絶、6世紀はじめに甕付き住居出現。
					○		北無田Ⅲ期、ただし住居は長方形2本主柱。
	○	△					
	○						
○	△						
○	○				△		
○	○						調査区外で弥生中期後半～古墳初頭の土器表採。
	?	?				小型仿製鏡1(住居)、銅鏃2(住居)、巴形銅器1(Ⅸ区・住居)	未正式報告なので詳細不明。 弥生後期中頃～後半主体か?
△	○				○		第1次調査区。住居は弥生後期前半、古墳前期後半に二分。五丁中原遺跡に先行するとする。
		?					第3次調査区。年報のため詳細不明。
	?	?					第1次調査区。年報のため詳細不明。
		○					第1次調査区。
	?	?					第1次調査区。年報のため詳細不明。
	○				△	銅鏡片1(包含層)	第1次調査区。堀川は江戸期用水路。
	○				○		第2次調査区。堀川は江戸期用水路。
		?				小型仿製鏡1(採集)	第1次調査区。年報のため詳細不明。
					○		沈目Ⅱ期・塚原Ⅰ期(前期後葉～中期前葉)。
					○		沈目Ⅱ期・塚原Ⅰ期(前期後葉～中期前葉)。 庵ノ前遺跡の南に隣接。
	○						
△	○						
	○						
	○	○	○				第8次調査区。
?	?	?				小型仿製鏡1	第11次調査区。年報のため詳細不明。
	△	○					第14次調査区。 第1・8・14次調査区に囲まれた範囲に集落の中心ありと想定。
		○					包含層。
	○	○					第1次調査区。 溝SD1953、SD230は環濠(あるいは区画溝)の可能性高い。
		?				小型仿製鏡2(採集)	未報告のため詳細不明。住居のほとんどが後期後葉との記述。 弓削中原遺跡と同集落か?

遺跡番号	地域区分			遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	対象住居数 (棟)	文献番号	弥生時代後期の環濠		環濠継続時期
									○	● 方形区画	
79	白川	中流域	左岸	弓削山尻	熊本市東区石原・平山町	3,000	23	95,97,98	○		脚台なし長胴甕まで？
80	白川	中流域	左岸	石の本	熊本市東区平山町	12,770	1,9	99			
81	白川	中流域	右岸	梅ノ木	菊陽町津久礼	6,000	27	100			
	白川	中流域	右岸	梅ノ木	菊陽町津久礼	8,000	215	101			
82	白川	中流域	右岸	六地藏	菊陽町津久礼	?	0	102			
	白川	中流域	右岸	六地藏	菊陽町津久礼	50	1	101			
83	白川	中流域	左岸	鹿婦瀬	熊本市東区鹿婦瀬町	90	8	101			
84	白川	上流域	立野火口瀬以西 右岸	西弥護免	大津町大津	24,500	224	95,103, 104,105	○		？
85	白川	上流域	立野火口瀬以西 左岸	中島宝満鶴	大津町岩坂	1,020	6	106			
86	白川	上流域	立野火口瀬以西 左岸	岩坂葉柳	大津町岩坂	1,958	10	106			
87	白川	上流域	立野火口瀬以西 左岸	岩坂樋ノ口	大津町岩坂	3,127	3	106			
88	白川	上流域	立野火口瀬以西 左岸	立石	大津町錦野	2,050	10	107			
89	白川	上流域	立野火口瀬以西 右岸	瀬田裏	大津町瀬田	約 13,600	6	108			
90	白川	上流域	立野火口瀬以西 右岸	瀬田池ノ原	大津町瀬田	1,600	2	109			
91	白川	上流域	立野火口瀬以西 左岸	大鶴A	大津町外牧	2,420	3.6	107			
92	白川	上流域	白川・黒川合流点	河陽F	南阿蘇村河陽	1,100	0	110			
93	白川	上流域	阿蘇谷	宮山	阿蘇市の石	2,713	23	111	○		脚台なし長胴甕まで
	白川	上流域	阿蘇谷	宮山	阿蘇市の石	?	2	112			
94	白川	上流域	阿蘇谷	狩尾・湯の口	阿蘇市狩尾	6,140	45	113	○		脚台なし長胴甕まで
95	白川	上流域	阿蘇谷	狩尾・方無田	阿蘇市狩尾	7,146	38	113			
96	白川	上流域	阿蘇谷	狩尾・前田	阿蘇市狩尾	2,796	13	113			
97	白川	上流域	阿蘇谷	池田・古園	阿蘇市狩尾		35	113			
	白川	上流域	阿蘇谷	池田	阿蘇市狩尾	4,280	9	114			
98	白川	上流域	阿蘇谷	小野原A遺跡	阿蘇市狩尾	21,000	18	115			
99	白川	上流域	阿蘇谷	下扇原遺跡	阿蘇市三久保	18,000	86	115			
100	白川	上流域	阿蘇谷	下山西	阿蘇市乙姫	1,300	28	116			
101	白川	上流域	阿蘇谷	下の原	阿蘇市小里	400	1	117			
102	白川	上流域	阿蘇谷	陣内	阿蘇市西湯浦	約 1,700	22	118			
103	白川	上流域	南郷谷	柏木谷	南阿蘇村久石	12,000	16	119			
104	白川	上流域	南郷谷	南鶴	南阿蘇村吉田	2,830	182	120	○		脚台なし長胴甕まで？
105	白川	上流域	南郷谷	幅・津留	南阿蘇村両併 高森町高森	?	?	121,122	○		？
106	熊本平野	北部	現井芹川下流域	千原台遺跡群	熊本市西区島崎	750	14.6	123			
107	熊本平野	北部	現井芹川下流域	戸坂	熊本市西区戸坂町	約 400	18	124			
	熊本平野	北部	現井芹川下流域	戸坂	熊本市西区横手	1,814	約 58	125			
108	熊本平野	北部	現井芹川下流域	野添平	熊本市西区谷尾崎町	497	2	126			
109	熊本平野	北部	現坪井川・現井芹川 下流域	上高橋高田	熊本市西区上高橋	約 3,000	6(古墳)	127			
110	熊本平野	北部	白川・現坪井川 下流域	二本木遺跡群	熊本市西区田崎	6,363	多数密集	128			
111	熊本平野	北部	白川・現坪井川 下流域	八島町	熊本市西区蓮台寺	4,976	多数密集	129			
112	熊本平野	北部	白川下流域	上ノ郷	熊本市南区島町	2,000	2,13	130			
	熊本平野	北部	白川下流域	上ノ郷	熊本市南区島町	662	0	131			
113	熊本平野	北部	白川下流域	苜草	熊本市南区刈草・合志	?	0	132			
114	熊本平野	北部	白川下流域 半島状地形先端 (現在は緑川下流域)	八ノ坪	熊本市南区護藤町	3,300	0	133			

黒髪式以前 〔～中期後半〕	出土土器の時期(甕の様相)					特徴的な遺物	特記・メモ
	ハケ 長胴 脚台付 〔後期〕	タタキ・ハケ 長胴 (長)脚台付 〔後期〕	タタキ・ハケ 長胴 脚台なし丸底 〔古墳前期初頭?〕	タタキ・ハケ 球形胴 丸底(尖り底) 〔古墳前期初頭?〕	ハケ 球形胴 〔古墳前期 〔～中期前葉〕〕		
	○	○	○				未報告のため詳細不明。弓削中原とも(緒方1977)。石原亀甲遺跡と同集落か?
	○				○		古墳時代は前期後葉～中期前葉。
○	△	△					六地藏遺跡の西に隣接。
○	○						梅ノ木遺跡の東に隣接、包含層。
	△						
		○	△				梅ノ木・六地藏遺跡の南、白川対岸。
	?	○	○			小型仿製鏡1	未正式報告のため詳細不明。堀川は江戸期用水路。
	○	△					中島宝満鶴・岩坂葉柳・岩坂樋ノ口はそれぞれ隣接。
△	○	△					中島宝満鶴・岩坂葉柳・岩坂樋ノ口はそれぞれ隣接。
					○		中島宝満鶴・岩坂葉柳・岩坂樋ノ口はそれぞれ隣接。
	○	○				銅鏃1(住居)	土器図化されず、記述・写真より判断。
	○	○	○			器種不明青銅器片(住居)	
		○					
		○			○		土器図化されず、記述・写真より判断。古墳時代は中期前葉?
○	○						包含層。
△	△	○	○				
	△	△	△				
	○	○	○			多量の鉄器、銅鏡片1(箱式石棺)、無茎銅鏃1(鉤加工?)、住居)	
	△	○	○			多量の鉄器	
		○	○				
	○	○	○			多量の鉄器	第Ⅰ・Ⅱ調査区。
	○	○					第Ⅲ調査区。狩尾Ⅲ期並行とする。
△	△	○	△			鍛冶関連遺物	小野原1～5段階区分、1段階は中期的様相、5段階で長脚化。脚台なしは包含層出土。
	○	○				多量の鉄器、鍛冶関連遺物、銅釘2(住居)	小野原1～5段階区分、1段階は中期的様相、5段階で長脚化。
	○	○	○			小型仿製鏡1(住居)、銅鏃1(包含層)	
	○						
		○	○				古墳後期の住居1検出。
	○ (住居)	△ (住居)		△ (住居)	○ (方形周溝墓)		
△	△	○	○			小型仿製鏡片1	第3区で溝、報告不十分のため継続時期は推定。
?	?	?	?				執筆時未報告のため詳細不明。
	○	○			○		第2次調査区。
	○	○				小型仿製鏡1(住居)、銅鏃1(住居)	
	○	○					第3次調査区。
	△	△			○		第1次調査区。
○	△				○	銅鏡片2(飛禽鏡：破鏡、鳥文鏡)	未正式報告のため詳細不明。2世紀から4世紀半ばまでの遺物がほとんどなく、古墳時代は4世紀後半から5世紀とする。
	○	○				小型仿製鏡1(住居)、銅鏡片1(住居)	遺跡群の南端、中心部は古代の官衙跡。
	○	○	△			小型仿製鏡1(住居)、小型仿製鏡片1(住居)	二本木遺跡群の南に隣接。
△		○					
	○						第4次調査区。住居は古墳時代。
		○					『新熊本市史』での整理。
		△	?	○	△		弥生前期～中期が中心。弥生中期中頃に集落廃絶。後期後半に再興、しかし竪穴式住居ではなく掘立柱建物主体…地下水位の上昇が一要因。

遺跡番号	地域区分			遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	対象住居数 (棟)	文献番号	弥生時代後期の環濠 ○	古墳時代前期の環濠 ● 方形区画	環濠継続時期
115	熊本平野	北部	白川下流域	本庄	熊本市中央区本荘	589	9	134			
	熊本平野	北部	白川下流域	本庄	熊本市中央区本荘	172	4	135			
	熊本平野	北部	白川下流域	本庄	熊本市中央区本荘	1,024	約7	135		方形区画?	
	熊本平野	北部	白川下流域	本庄	熊本市中央区本荘	206	2	135			
	熊本平野	北部	白川下流域	本庄	熊本市中央区本荘	334	0	136			
	熊本平野	北部	白川下流域	本庄	熊本市中央区本荘	2,405	15	137			
116	熊本平野	東部	江津湖左岸	江津湖遺跡群	熊本市東区広木町	3,372	4	138			
	熊本平野	東部	江津湖左岸	江津湖遺跡群	熊本市東区若葉・広木町	3,080	24	139	○		タタキ球形胴瓦まで(9号溝)
	熊本平野	東部	江津湖左岸	江津湖遺跡群	熊本市東区若葉	100	0	140	○		第7次調査区9号溝と同じか?
	熊本平野	東部	江津湖左岸	江津湖遺跡群	熊本市東区広木町	220	2	140			
117	熊本平野	東部	江津湖左岸	上ノ門	熊本市東区湖東	約7	1	141			
118	熊本平野	東部	江津湖左岸	神水	熊本市中央区出水	?	12	142			
	熊本平野	東部	江津湖左岸	神水	熊本市中央区出水	4,788	70	143			
	熊本平野	東部	江津湖左岸	神水	熊本市中央区神水本町	1,200	35	144			
	熊本平野	東部	江津湖左岸	神水	熊本市中央区神水本町	1,036	119	145			
	熊本平野	東部	江津湖左岸	神水	熊本市中央区神水本町	429	55	146			
	熊本平野	東部	江津湖左岸	神水	熊本市中央区神水本町	230	26	147			
	熊本平野	東部	江津湖左岸	神水	熊本市中央区神水本町	550	21	148	○①	方形区画?	①ハケ脚台付長胴瓦まで(SD002)
	熊本平野	東部	江津湖左岸	神水	熊本市中央区神水本町	540	87	149			
	熊本平野	東部	江津湖左岸	神水	熊本市中央区神水	556	2	150			
	119	熊本平野	東部	秋津川右岸	梨木	益城町広崎	15,000	0	151		
120	熊本平野	東部	秋津川右岸	古閑北	益城町古閑	28,700	1	152			
	熊本平野	東部	秋津川右岸	古閑	益城町古閑	?	?	28,153			
121	熊本平野	東部	秋津川右岸	古閑	益城町古閑	?	?	28,154			
	熊本平野	東部	秋津川右岸	古閑	益城町古閑	?	?	28,154			
122	熊本平野	東部	木山川右岸	小柳	益城町寺迫	750	11	155			
123	熊本平野	東部	木山川左岸	杉の久保	益城町福原	189	5	156			
124	熊本平野	東部	矢形川右岸	塔平	益城町小池	3,725	27	157			
	熊本平野	東部	矢形川右岸	塔平	益城町小池・島田	8,170	33	158			
125	熊本平野	東部	矢形川右岸	二子塚	嘉島町北甘木	35,500	267	159	○		脚台付長胴瓦まで
126	熊本平野	東部	緑川下流域右岸 (現在は加勢川右岸)	御幸木部遺跡群	熊本市南区御幸木部	1,100	3	160	○?		
127	熊本平野	東部	緑川下流域左岸	西天神原	熊本市南区城南町坂野	約380	4	161			
128	熊本平野	東部	浜戸川下流域右岸	新御堂	熊本市南区城南町宮地	25,000	528	162	○		ハケ脚台付長胴瓦まで?
129	熊本平野	東部	浜戸川下流域右岸	沈目	熊本市南区城南町沈目	28,800	25	163			
130	熊本平野	東部	浜戸川下流域左岸	上の原	熊本市南区城南町塚原	38,000?	90	164			
131	宇土半島基部	北半部	東側・潤川上流域	古保山打越	宇城市松橋町古保山	?	4	165			

出土土器の時期(甕の様相)						特徴的な遺物	特記・メモ
黒髪式以前 〔～中期後半〕	ハケ 長胴 脚台付 〔後期〕	タタキ・ハケ 長胴 (長)脚台付 〔後期〕	タタキ・ハケ 長胴 脚台なし丸底 〔古墳前期初頭?〕	タタキ・ハケ 球形胴 丸底(尖り底) 〔古墳前期初頭?〕	ハケ 球形胴 〔古墳前期 〔～中期前葉〕〕		
					○		0712 調査地点。
					○		0006 調査地点。
					○	小型仿製鏡片 1(古代の住居より、混入)	0104 調査地点。 30 号溝は直角に屈曲する…方形区画か?。
				△	○		0119 調査地点。1 号溝は古墳前期。
					○		0304 調査地点。51 号溝が古墳前期…0104 調査地点の 30 号溝に近接、関連するか?
					○		9901 調査地点。
				△	○		
△	○ (住居)	○ (住居)	△ (住居)	○ (9 号溝、住居 (IV-1))	○ (溝 SD02、 住居→周溝墓) (IV-2・3)		第 7・10 次調査区。 江津湖編年 IV-1(古閑期に後出)、IV-2(沈目 I、前期中葉)、IV-3(沈目 II)。IV-3 で方形周溝墓出現。V 字溝 = 9 号溝 = 環濠?、溝 SD02 の性格?。
△	○	○					第 23 次調査区。 溝 SD06 は第 7 次調査区検出の 9 号溝に接続か?
		○ (円形周溝状遺構)					第 24 次調査区。
				△	○		
○	△					銅鏡 1(住居)	県立図書館地点。
○	○	△				銅鏡 2(住居・包含層)、銅鏡 1(住居)、青銅製刃器片? 1	第 1 次調査区。
○							
○	○	△					第 13・23・25 次調査区。 溝多いが、住居と同程度の深さなので環濠とは考えがたいとする。
○	○	○					第 20・28 次調査区。
△	○	○			○		第 34 次調査区。
○	○				○ (方形区画? の溝)		第 40 次調査区。 溝 SD002 は V 字溝 = 環濠?。 溝 SD004 は第 38 次調査区検出の溝 SD001 と共に方形区画をなすか、前期後葉埋没。
○	○	○	?				第 41 次調査区。
	○						第 42 次調査区。
△	○	△	△				包含層。
△	○						梨木遺跡の東に隣接、包含層。
			○	○			九州道関連。北地区。溝より出土。
			○	○			土器のみ整理、場所地図無、九州道関連。南地区。
		○ (溝)			○ (住居、溝)		住居は古墳前期後葉中心。したがって、古墳前期前葉から中葉が断絶する。
		?					
	○	○					
	○	△					
	○	○				鍛冶遺構、多量の鉄器、銅鏡片 3・小型仿製鏡片 1(住居)、免田式	サントリー工場地点。
		○					北東 100m の熊本市 2003 調査区で環濠?
	○						
○	○					本調査にて：銅鏡片 1、小型仿製鏡 2、銅鏡 3、大泉五十 1 以前：巴形銅器 1、銅鏡片 1、貨泉 1、半両銭 1	住居 528 棟のうち後期は 450 棟程度。 環濠掘削は弥生後期中葉、遺物から後期後葉以前との記述、また環濠は構築後短期間に廃棄との記述→継続時期はハケ脚台付甕までか? (報告不十分のため判断困難)。 3 世紀後半～4 世紀前半は皆無とする。
					○		九州道関連。
					○		
	○	○					

遺跡番号	地域区分			遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	対象住居数 (棟)	文献番号	弥生時代後期の環濠 ○	古墳時代前期の環濠 ● 方形区画	環濠継続時期
	宇土半島基部	北半部	東側・澗川下流域								
132	宇土半島基部	北半部	東側・澗川下流域	上松山	宇土市松山町	約 3,000	4	166			
133	宇土半島基部	北半部	東側・澗川下流域	境目	宇土市境目町	60	2	167			
	宇土半島基部	北半部	東側・澗川下流域	境目	宇土市境目町	?	1	168,169			
	宇土半島基部	北半部	東側・澗川下流域	境目西原	宇土市境目町	148	1?	170			
134	宇土半島基部	北半部	東側・澗川下流域	畑中	宇土市松山町	?	0	171			
135	宇土半島基部	北半部	東側・澗川下流域	下松山	宇土市松山町	?	0	172			
136	宇土半島基部	北半部	西側	城山	宇土市古城町	441	0	173			
	宇土半島基部	北半部	西側	城山	宇土市古城町・神馬町	?	0	174			
	宇土半島基部	北半部	西側	城山	宇土市古城町・神馬町	?	0	175			
137	宇土半島基部	北半部	西側	西岡台	宇土市神馬町	?	0	176		●居館	
	宇土半島基部	北半部	西側	西岡台	宇土市神馬町	448	0	177		●居館	
	宇土半島基部	北半部	西側	西岡台	宇土市神馬町	830	0	178		●居館	
	宇土半島基部	北半部	西側	西岡台	宇土市神馬町	?	0	166		●居館	
138	宇土半島基部	北半部	西側	轟	宇土市宮庄町	?	0	179			
139	宇土半島基部	南半部	東側・大野川流域	松橋前田	宇城市松橋町松橋	?	0	180			
140	宇土半島基部	南半部	東側・大野川流域	大塚台地	宇城市松橋町松橋・きらら	1,800	27	181			
141	宇土半島	南岸	郡浦川右岸	文蔵貝塚	宇城市三角町中村	約 55	1	182			
142	球磨川	下流域	右岸	島田	八代市島田町	3,200	3,11	183			
143	球磨川	下流域	右岸	用七	八代市長田町	1,100	17	184			
144	球磨川	下流域	右岸	上日置女夫木	八代市上日置町	5,239	21	185			
	球磨川	下流域	右岸	上日置女夫木	八代市上日置町	2,800	11	186			
	球磨川	下流域	右岸	上日置女夫木	八代市上日置町	2,480	4	187			
	球磨川	下流域	右岸	上日置女夫木	八代市長田町	1,537	2	188			
145	球磨川	下流域	右岸	西片百田	八代市西片町	3,271	13.2	189			
	球磨川	下流域	右岸	西片百田	八代市西片町	6,488	39	190			
146	球磨川	下流域	右岸	西片園田	八代市西片町	4,700	0	189			
	球磨川	下流域	右岸	西片町	八代市西片町	1,000	0	191			
147	球磨川	下流域	左岸	下堀切	八代市豊原下町	約 300	0	192,193	○?		ハケ脚台付長胴甕まで?
148	球磨川	下流域	左岸	万年寺	八代市平山新町	5,000	0	194			

表2 文献

1. 齋父雅史編 2010 『築地池下遺跡』, 玉名市文化財調査報告第22集, 玉名市教育委員会
2. 末永 崇編 2004 『玉名市内遺跡調査報告書』Ⅱ, 玉名市文化財調査報告第13集, 玉名市教育委員会
3. 末永 崇編 2002 『今見堂遺跡・平町遺跡・蓮華遺跡』, 玉名市文化財調査報告第10集, 玉名市教育委員会
4. 兵谷有利編 2006 『玉名市内遺跡調査報告書』Ⅲ, 玉名市文化財調査報告第15集, 玉名市教育委員会
5. 宮崎敬士編 2013 『築地館跡』, 熊本県文化財調査報告第283集, 熊本県教育委員会
6. 田中康雄編 2008 『玉名市内遺跡調査報告書』Ⅳ, 玉名市文化財調査報告第17集, 玉名市教育委員会

黒髪式以前 〔～中期後半〕	出土土器の時期(甕の様相)					特徴的な遺物	特記・メモ
	ハケ 長胴 脚台付 〔後期〕	タタキ・ハケ 長胴 (長)脚台付 〔後期〕	タタキ・ハケ 長胴 脚台なし丸底 〔古墳前期初頭?〕	タタキ・ハケ 球形胴 丸底(尖り底) 〔古墳前期初頭?〕	ハケ 球形胴 〔古墳前期 〔～中期前葉〕〕		
				○ (住居, 周溝墓)	○ (住居, 周溝墓)		2号住居を3号方形周溝墓の主体部が切る。布留式最古段階のあいだに居住域から墓域への変化を想定。
					○		第7次調査。
○	△	△		○	○		『新宇土市史』での整理。
			△	△			
○	○	○					『新宇土市史』での整理。
	○						『新宇土市史』での整理。
	△						
	△	○	△		△		
					○		『新宇土市史』での整理。
					○		古墳前期の濠(首長居館)。
					?		古墳前期の濠(首長居館)。
					△		古墳前期の濠(首長居館)。
					○		『新宇土市史』での再整理。古墳前期の濠(首長居館)。西岡台1～3期に区分…タタキ消滅後から須恵器出現前まで。
△	△					銅鏡片1(貝塚)	『新宇土市史』での整理。
				○	○		未正式報告のため詳細不明。
		○	○				報告不十分のため詳細不明。
△	△						
	△			○	○		
○ (住居)	○ (住居)	○ (住居・溝)	○ (方形周溝墓)			銅鏡1(中期?), 珠文鏡1(古墳時代?)	
△ (住居)	○ (住居)	○ (住居)	?	○ (方形周溝墓)		小銅鐸1・舌1(中期の土器を伴う)	
		○ (住居)	○ (住居, 方形周溝墓)				住居を方形周溝墓が切る。
○	○						弥生前期: 島田10棟, 中期: 用七5棟。 後期: 島田7棟・用七12棟・上日置女夫木21棟・西片百田53棟。 古墳前期: 集落消滅し周溝墓群へ, 上日置女夫木周辺14棟, 用七+上日置女夫木=周溝墓13基。
○	△				○ (住居)		
	○			△	△		
	○						土器埋納土坑は古墳前期初頭。
					○		包含層, わずかに脚台や免田式出土。
	○				○		包含層。 弥生後期中頃に洪水→古墳前期中頃に集落再興。
	○						上東式土器の出土。
	○						5基の土坑より出土, 下掘切遺跡と関連?

7. 大野泰輔編 2013『南大門遺跡』, 玉名市文化財調査報告第28集, 玉名市教育委員会
8. 田中康雄編 2001『東南大門遺跡』, 玉名市文化財調査報告第8集, 玉名市教育委員会
9. 竹田宏司編 2002『玉名市内遺跡調査報告書』I, 玉名市文化財調査報告第11集, 玉名市教育委員会
10. 亀田 学編 2014『山田松尾平遺跡』, 熊本県文化財調査報告第304集, 熊本県教育委員会
11. 後藤貴美子編 2001『平嶋遺跡』, 熊本県文化財調査報告第204集, 熊本県教育委員会
12. 齋父雅史・大倉千寿編 2009『玉名市内遺跡調査報告書』V, 玉名市文化財調査報告第18集, 玉名市教育委員会

13. 岡部裕俊編 2014『狗奴国浪漫—熊本・阿蘇の弥生文化—』, 平成26年度伊都国歴史博物館開館10周年記念特別展示図録, 糸島市立伊都国歴史博物館
14. 熊本日日新聞社 2011「弥生の環壕集落跡 確認」『熊本日日新聞』2011年12月9日, 熊本日日新聞社
15. 松本健郎 1973「玉名郡岱明町山下遺跡調査報告」『玉名考古学部 部報』30号, 熊本県立玉名高等学校考古学部, pp.1-15.
16. 松本健郎 1974「中九州における古式土師器の新資料」『考古学雑誌』第60巻第3号, 日本考古学会, pp.41-49.
17. 檀 佳克 2011「玉名市岱明町山下遺跡出土土器について」『熊本古墳研究』第4号, 熊本古墳研究会, pp.111-122.
18. 坂口圭太郎編 2010『小園遺跡』, 熊本県文化財調査報告第253集, 熊本県教育委員会
19. 末永 崇編 2003『岩崎城跡』, 玉名市文化財調査報告第12集, 玉名市教育委員会
20. 高谷和生編 2001『柳町遺跡』I, 熊本県文化財調査報告第200集, 熊本県教育委員会
21. 田中康雄編 2009『柳町遺跡』, 玉名市文化財調査報告第20集, 玉名市教育委員会
22. 坂田和弘編 2004『柳町遺跡』II, 熊本県文化財調査報告第218集, 熊本県教育委員会
23. 荒木隆宏編 2009『両迫間日渡遺跡』, 玉名市文化財調査報告第19集, 玉名市教育委員会
24. 山下義満編 2014『玉名平野条里跡3・両迫間日渡遺跡2・玉名の平城跡』, 熊本県文化財調査報告第299集, 熊本県教育委員会
25. 長谷部善一編 2011a『玉名平野条里跡(古閑前地区)』, 熊本県文化財調査報告第261集, 熊本県教育委員会
26. 田辺哲夫 1953『野辺田遺跡発掘調査中間報告』『肥後考古学会会報』第1号, 肥後考古学会, pp.1-10.
27. 乙益重隆 1964「中九州地方」『弥生式土器集成』本編1, 東京堂, pp.13-19.
28. 野田拓治 1982「古式土師器の成立と展開—特に中部九州における編年試案—」『古文化論集』下巻, 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会, pp.947-987.
29. 馬場正弘編 2011『北の崎遺跡・鈕拔遺跡』, 熊本県文化財調査報告第264集, 熊本県教育委員会
30. 長谷部善一編 2011b『稲佐津留遺跡・西安寺遺跡』, 熊本県文化財調査報告第263集, 熊本県教育委員会
31. 中原幹彦編 2002『平成13年度植木町内遺跡発掘調査報告書』, 植木町文化財調査報告書第15集, 植木町教育委員会
32. 中原幹彦編 2001『平成12年度植木町内遺跡発掘調査報告書』, 植木町文化財調査報告書第12集, 植木町教育委員会
33. 亀田 学編 2003『ラスギ遺跡』, 熊本県文化財調査報告第214集, 熊本県教育委員会
34. 中原幹彦編 2004『塔ノ木遺跡・今古閑久保遺跡・滴水尖遺跡・轟城跡・ラスギ遺跡』, 植木町文化財調査報告書第18集, 植木町教育委員会
35. 岡本真也編 2005『前田遺跡』, 熊本県文化財調査報告第225集, 熊本県教育委員会
36. 緒方 勉ほか 1971『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査概報』福岡熊本線(南関～植木), 熊本県九州縦貫自動車道文化財調査団
37. 池田道也ほか編 1982『諏訪原』, 菊水町文化財調査報告第4集, 菊水町教育委員会
38. 池田道也編 1987『岩尻』, 菊水町文化財調査報告第10集, 菊水町教育委員会
39. 益永浩仁編 1996『諏訪原遺跡』, 菊水町教育委員会
40. 池田道也ほか編 1984『川沿』1, 菊水町文化財調査報告第6集, 菊水町教育委員会
41. 黒田裕司編 1997『田中城跡』X I・X II, 三加和町文化財調査報告第11・12集, 三加和町教育委員会
42. 隈 昭志・杉村彰一 1968「熊本県山鹿市桜町環濠遺跡調査報告」『熊本史学』第34号, 熊本史学会, pp.44-51.
43. 中村幸史郎編 1987『方保田東原遺跡』3, 山鹿市立博物館調査報告書第7集, 山鹿市教育委員会
44. 中村幸史郎ほか編 1982『方保田東原遺跡』, 山鹿市立博物館調査報告書第2集, 山鹿市教育委員会
45. 中村幸史郎ほか編 1984『方保田東原遺跡』2, 山鹿市立博物館調査報告書第3・4集, 山鹿市教育委員会
46. 中村幸史郎編 1992『方保田東原遺跡』, 山鹿市立博物館調査報告書第12集, 山鹿市教育委員会
47. 中村幸史郎編 2001『方保田東原遺跡』IV, 山鹿市文化財調査報告書第14集, 山鹿市教育委員会
48. 中村幸史郎編 2006『方保田東原遺跡』7, 山鹿市文化財調査報告書第2集, 山鹿市教育委員会
49. 山口健剛編 2007『方保田東原遺跡』8, 山鹿市文化財調査報告書第4集, 山鹿市教育委員会
50. 中村幸史郎編 2008『方保田東原遺跡』9, 山鹿市文化財調査報告書第6集, 山鹿市教育委員会
51. 中村幸史郎編 2009『方保田東原遺跡』11, 山鹿市文化財調査報告書第8集, 山鹿市教育委員会
52. 中村幸史郎編 2010『方保田東原遺跡』13, 山鹿市文化財調査報告書第11集, 山鹿市教育委員会

-
53. 宮崎 歩編 2011『方保田東原遺跡』14, 山鹿市文化財調査報告書第12集, 山鹿市教育委員会
 54. 木崎康弘編 1996『蒲生・上の原遺跡』, 熊本県文化財調査報告第158集, 熊本県教育委員会
 55. 高木正文 1979『鹿本地方の弥生後期土器』『古文化談叢』第6集, 九州古文化研究会, pp.89-128.
 56. 松本健郎ほか 1978『菊池川流域文化財調査報告書』, 熊本県文化財調査報告第31集, 熊本県教育委員会
 57. 高木正文 1990『熊本県菊池郡七城町うてな遺跡』『日本考古学年報』41 (1988年度版), 日本考古学協会, pp.596-598.
 58. 西住欣一郎編 1992『うてな遺跡』, 熊本県文化財調査報告第121集, 熊本県教育委員会
 59. 古閑敬士編 2001『鞠智城跡』, 菊鹿町文化財調査報告第9集, 菊鹿町教育委員会
 60. 西林一弘編 1998『城尾屋敷遺跡 (広域推定地)』, 鹿央町埋蔵文化財発掘調査報告書, 鹿央町教育委員会
 61. 阿南 亨編 2008『森北後田遺跡・藤田上原遺跡』, 菊池市文化財調査報告第2集, 菊池市教育委員会
 62. 西住欣一郎編 2004『東鶴遺跡』, 熊本県文化財調査報告第222集, 熊本県教育委員会
 63. 高見 淳編 2006『小野崎遺跡』, 菊池市文化財調査報告第1集, 菊池市教育委員会
 64. 中原幹彦編 2003『北無田遺跡』, 植木町文化財調査報告書第16集, 植木町教育委員会
 65. 西嶋剛広編 2004『高熊古墳第1次・第2次調査概要』『考古学研究室報告』第39集, 熊本大学文学部考古学研究室, 本文 p.20・図版 p.6.
 66. 浦田信智編 1994『石立遺跡・八反田C遺跡』, 西合志町文化財調査報告第4集, 西合志町教育委員会
 67. 浦田信智編 1993『八反田A・B遺跡, 八反畑遺跡』, 西合志町文化財調査報告第3集, 西合志町教育委員会
 68. 坂本憲昭編 2009『藤巻遺跡 第1次調査・第2次調査』, 菊池市文化財調査報告第5集, 菊池市教育委員会
 69. 田添夏喜 1981『小合志原遺跡』, 小合志原熊本総合運動場遺跡調査報告, 小合志原遺跡調査団
 70. 米村 大編 2007『陣ノ内遺跡』, 合志市埋蔵文化財調査報告第1集, 合志市教育委員会
 71. 中原幹彦編 2002『石川遺跡』, 植木町文化財調査報告書第14集, 植木町教育委員会
 72. 中原幹彦編 2003『平成14年度植木町内遺跡発掘調査報告書』, 植木町文化財調査報告書第17集, 植木町教育委員会
 73. 坂本憲昭編 1998『古閑下遺跡』, 旭志村文化財調査報告第4集, 旭志村教育委員会
 74. 村井眞輝ほか編 1986『伊坂上原遺跡・石佛遺跡』, 熊本県文化財調査報告第78集, 熊本県教育委員会
 75. 坂本憲昭編 2004『伊坂上ノ原遺跡』, 旭志村文化財調査報告第8集, 旭志村教育委員会
 76. 佐藤伸二・本田京子編 1980『矢護川日向遺跡調査報告』, 日向遺跡調査団
 77. 西住欣一郎編 1992『荻迫遺跡』, 植木町文化財調査報告第3集, 植木町教育委員会
 78. 金田一精編 1997『五丁中原遺跡』, 五丁中原遺跡群第1次調査区概要報告書, 熊本市教育委員会
 79. 林田和人編 2004『扇田遺跡』, 熊本市教育委員会
 80. 金田一精・藤島志考編 2013『熊本市埋蔵文化財調査年報』第15号, 熊本市教育委員会
 81. 金田一精編 1999『熊本市埋蔵文化財調査年報』第2号, 熊本市教育委員会
 82. 金田一精ほか 2009『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集—平成20年度—』, 熊本市教育委員会
 83. 赤星雄一ほか 2003『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集—平成13・14年度—』, 熊本市教育委員会
 84. 美濃口雅朗ほか 2006『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集—平成17年度—』, 熊本市教育委員会
 85. 濱田彰久編 1997『庵ノ前遺跡』Ⅲ, 熊本県文化財調査報告第160集, 熊本県教育委員会
 86. 濱田彰久編 1999『迫ノ上遺跡』, 熊本県文化財調査報告第170集, 熊本県教育委員会
 87. 浦田信智編 1985『西谷遺跡』, 熊本県文化財調査報告第76集, 熊本県教育委員会
 88. 大城康雄・廣瀬正照編 1979『昭和53年度 下南部遺跡発掘調査報告書』, 熊本市教育委員会
 89. 大城康雄・柿内順也編 1981『長嶺遺跡発掘調査報告書』, 熊本市教育委員会
 90. 網田龍生ほか 2014『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集—平成25年度—』, 熊本市の文化財第32集, 熊本市教育委員会
 91. 山下宗親編 2000『熊本市埋蔵文化財調査年報』第3号, 熊本市教育委員会
 92. 吉田麻子編 2010b『長嶺遺跡群』Ⅱ, 熊本市教育委員会
 93. 柿内順也・大城康雄編 1983『吉原遺跡発掘調査報告書 (昭和56・57年度)』, 熊本市教育委員会
 94. 三好栄太郎編 2014『法王鶴遺跡』1, 熊本市の文化財第33集, 熊本市教育委員会
 95. 隈 昭志 1983『中九州』『三世の考古学』下巻, 学生社, pp.54-78.
 96. 光沢徳行・高木正文 1979『熊本県石原亀甲遺跡の小形仿製鏡』『九州考古学』54号, 九州考古学会, pp.39-40.
 97. 緒方 勉 1977『弓削中原遺跡』『日本考古学年報』28, 日本考古学協会, p.261.
-

-
98. 古庄浩明 1989「中九州における古式土師器の成立—白川・緑川水系地域について—」『國學院大學考古学資料館紀要』第5輯, 國學院大學考古学資料館, pp.55-67.
 99. 中村幸弘編 1999『石の本遺跡群』I, 熊本県文化財調査報告第177集, 熊本県教育委員会
 100. 平岡勝昭ほか編 1983『梅ノ木遺跡』, 熊本県文化財調査報告第62集, 熊本県教育委員会
 101. 亀田 学編 2001『梅ノ木遺跡』II, 熊本県文化財調査報告第199集, 熊本県教育委員会
 102. 木崎康弘編 1989『六地藏遺跡』I, 熊本県文化財調査報告第105集, 熊本県教育委員会
 103. 瀬丸敬二ほか編 1980『西弥護免遺跡調査概報』, 西弥護免遺跡調査団
 104. 瀬丸敬二 1982「西弥護免遺跡」『阿蘇山の考古学』, 日・豊・肥・古文化研究会資料1, 湯山シンポジウム実行委員会, pp.26-27.
 105. 石橋新次 1983「中九州における古式土師器」『古文化談叢』第12集, 九州古文化研究会, pp.105-143.
 106. 飯富英博・越知陸和編 2013『中島西鶴遺跡・中島宝満鶴遺跡・岩坂葉柳遺跡・岩坂樋ノ口遺跡』, 大津町文化財調査報告第10集, 大津町教育委員会
 107. 戸田清恵編 1999『立石遺跡・大鶴A遺跡・上揚遺跡・前畑遺跡』, 熊本県文化財調査報告第176集, 熊本県教育委員会
 108. 緒方 勉編 1991『瀬田裏遺跡調査報告』I, 大津町文化財調査報告, 大津町教育委員会瀬田裏遺跡調査団
 109. 稲葉一文ほか編 2010『瀬田池ノ原遺跡』, 熊本県文化財調査報告第252集, 熊本県教育委員会
 110. 岡本真也編 2003『河陽F遺跡』, 熊本県文化財調査報告第209集, 熊本県教育委員会
 111. 緒方 徹編 2011『宮山遺跡』II, 阿蘇市文化財調査報告第2集, 阿蘇市教育委員会
 112. 緒方 勉 1972『宮山遺跡』, 阿蘇町埋蔵文化財調査報告第1集, 阿蘇町教育委員会
 113. 木崎康弘編 1993『狩尾遺跡群』, 熊本県文化財調査報告第131集, 熊本県教育委員会
 114. 吉田正一編 1994『池田遺跡』, 熊本県文化財調査報告第140集, 熊本県教育委員会
 115. 宮崎敬士編 2010『小野原遺跡群』, 熊本県文化財調査報告第257集, 熊本県教育委員会
 116. 高谷和生編 1987『下山西遺跡』, 熊本県文化財調査報告第88集, 熊本県教育委員会
 117. 宮本利邦編 2012『下の原遺跡』, 阿蘇市文化財調査報告第3集, 阿蘇市教育委員会
 118. 清田純一編 1982『陣内遺跡』, 阿蘇町埋蔵文化財調査報告第2集, 阿蘇町教育委員会
 119. 江本 直編 1993『柏木谷遺跡』, 熊本県文化財調査報告第134集, 熊本県教育委員会
 120. 笠 健編 2002『南鶴遺跡』, 白水村文化財調査報告書第1集, 白水村教育委員会
 121. 幅・津留遺跡発掘調査事務所 2013『今明らかになる弥生時代の巨大集落—幅・津留遺跡—』, 熊本県教育庁教育総務局文化課
 122. 幅・津留遺跡発掘調査現場事務所 2014『幅・津留遺跡見学会説明資料』, 熊本県教育庁教育総務局文化課
 123. 岩谷史記編 2005『千原台遺跡群』, 熊本市教育委員会
 124. 大城康雄編 1986b『戸坂遺跡発掘調査報告書』, 熊本市教育委員会
 125. 中里伸明編 2009『戸坂遺跡』II, 熊本市教育委員会
 126. 稲津暢洋ほか 2005『都市計画道路清水・野口線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』, 熊本市教育委員会
 127. 網田龍生編 1992『上高橋高田遺跡 第1次調査区発掘調査概報』I, 熊本市教育委員会
 128. 長谷部善一ほか編 2013b『二本木遺跡群』7, 熊本県文化財調査報告第280集, 熊本県教育委員会
 129. 長谷部善一ほか編 2013c『八島町遺跡』, 熊本県文化財調査報告第281集, 熊本県教育委員会
 130. 今村和徳編 2007『上ノ郷遺跡』, 熊本県文化財調査報告第239集, 熊本県教育委員会
 131. 中里伸明編 2012『上ノ郷遺跡』I, 熊本市の文化財第21集, 熊本市教育委員会
 132. 佐藤伸二 1996「苜草遺跡(今村遺跡)」『新熊本市史』史料編第1巻, 考古資料, 熊本市, pp.452-457.
 133. 林田和人編 2008『八ノ坪遺跡』IV, 熊本市教育委員会
 134. 小畑弘己編 2009『熊本大学構内遺跡発掘調査報告』V, 熊本大学埋蔵文化財調査報告書第5集, 熊本大学埋蔵文化財調査室
 135. 大坪志子編 2010『熊本大学構内遺跡発掘調査報告』VI, 熊本大学埋蔵文化財調査報告書第6集, 熊本大学埋蔵文化財調査室
 136. 大坪志子編 2013『熊本大学構内遺跡発掘調査報告』IX, 熊本大学埋蔵文化財調査報告書第9集, 熊本大学埋蔵文化財調査センター
 137. 大坪志子編 2014『熊本大学構内遺跡発掘調査報告』X, 熊本大学埋蔵文化財調査報告書第10集, 熊本大学埋蔵文化財調査センター
-

-
138. 坂田和弘・濱田教靖編 2008『江津湖遺跡群・健軍京塚下遺跡』, 熊本県文化財調査報告第245集, 熊本県教育委員会
139. 原田範昭・岩谷史記編 2006『江津湖遺跡群』Ⅱ, 熊本市教育委員会
140. 三好栄太郎・岩谷史記ほか 2012『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集—平成23年度—』, 熊本市の文化財第12集, 熊本市教育委員会
141. 富田紘一編 1979『昭和53年度 熊本市内埋蔵文化財発掘調査報告書』, 熊本市教育委員会
142. 緒方 勉編 1986『神水遺跡』Ⅱ, 熊本県文化財調査報告第82集, 熊本県教育委員会
143. 大城康雄編 1986a『神水遺跡発掘調査報告書』, 熊本市教育委員会
144. 竹田宏司編 1993『神水遺跡』Ⅱ, 熊本市教育委員会
145. 林田和人編 2003『神水遺跡』Ⅴ, 熊本市教育委員会
146. 吉田麻子編 2004『神水遺跡』Ⅵ, 熊本市教育委員会
147. 吉田麻子編 2005『神水遺跡』Ⅶ, 熊本市教育委員会
148. 吉田麻子編 2007『神水遺跡』Ⅸ, 熊本市教育委員会
149. 吉田麻子編 2008『神水遺跡』Ⅹ, 熊本市教育委員会
150. 吉田麻子編 2010a『神水遺跡』ⅩⅠ, 熊本市教育委員会
151. 野田恒親ほか編 1999『古閑北・梨木遺跡』, 熊本県文化財調査報告第175集, 熊本県教育委員会
152. 野田恒親ほか編 1999『古閑北遺跡』, 熊本県文化財調査報告第184集, 熊本県教育委員会
153. 高野啓一 1975「古閑遺跡出土の弥生終末期土器について」『熊本史学』第45号, 熊本史学会, pp.31-38.
154. 隈 昭志編 1980『古保山・古閑・天城』, 熊本県文化財調査報告第47集, 熊本県教育委員会
155. 堤 英介・上高原聡編 2010『小柳遺跡』, 益城町文化財調査報告第21集, 益城町教育委員会
156. 堤 英介編 2004『杉の久保遺跡』, 益城町文化財調査報告第19集, 益城町教育委員会
157. 水上公誠ほか編 2013『塔平遺跡』1, 熊本県文化財調査報告第285集, 熊本県教育委員会
158. 佐藤哲朗ほか編 2014『塔平遺跡』2, 熊本県文化財調査報告第302集, 熊本県教育委員会
159. 島津義昭ほか編 1992『二子塚』, 熊本県文化財調査報告第117集, 熊本県教育委員会
160. 岡本真也編 2006『御幸木部遺跡群』, 熊本県文化財調査報告第233集, 熊本県教育委員会
161. 島津義昭編 1978『益城郡衙』, 熊本県文化財調査報告第32集, 熊本県教育委員会
162. 清田純一編 2003『宮地遺跡群』, 城南町文化財調査報告第13集, 城南町教育委員会
163. 江本 直ほか編 1974『沈目』, 熊本県文化財調査報告第13集, 熊本県教育委員会
164. 野田拓治編 1985『上の原遺跡』Ⅲ, 熊本県文化財調査報告第73集, 熊本県教育委員会
165. 村井眞輝編 1987『古保山打越遺跡』, 熊本県文化財調査報告第93集, 熊本県教育委員会
166. 高木恭二編 2001『新宇土市史基礎資料』第9集, 考古, 宇土市教育委員会
167. 藤本貴仁 2001『境目遺跡—第7次調査—』, 宇土市教育委員会
168. 金田一精 2002a「境目遺跡」『新宇土市史』資料編第2巻, 考古資料・金石文・建造物・民俗, 宇土市, pp.55-65.
169. 杉井 健 2002a「境目遺跡」『新宇土市史』資料編第2巻, 考古資料・金石文・建造物・民俗, 宇土市, pp.133-146.
170. 富樫卯三郎 1969『境目西原遺跡』, 宇土市教育委員会
171. 金田一精 2002b「畑中遺跡」『新宇土市史』資料編第2巻, 考古資料・金石文・建造物・民俗, 宇土市, pp.68-70.
172. 原田範昭 2002「下松山遺跡」『新宇土市史』資料編第2巻, 考古資料・金石文・建造物・民俗, 宇土市, pp.71-72.
173. 能登原孝道編 2011『宇土城跡(城山)』熊本県文化財調査報告第259集, 熊本県教育委員会
174. 高木恭二・木下洋介編 1985『宇土城跡(城山)』, 宇土市埋蔵文化財調査報告書第10集, 宇土市教育委員会
175. 杉井 健 2002b「宇土城跡城山遺跡」『新宇土市史』資料編第2巻, 考古資料・金石文・建造物・民俗, 宇土市, pp.185-189.
176. 原口長之ほか 1977『宇土城跡(西岡台)』, 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集, 宇土市教育委員会
177. 藤本貴仁 2003『宇土城跡(西岡台)』Ⅵ, 宇土市埋蔵文化財調査報告書第24集, 宇土市教育委員会
178. 藤本貴仁編 2012『宇土城跡(西岡台)』ⅩⅠ, 宇土市埋蔵文化財調査報告書第33集, 宇土市教育委員会
179. 原田範昭 2002b「轟遺跡(貝塚)」『新宇土市史』資料編第2巻, 考古資料・金石文・建造物・民俗, 宇土市,
-

pp.84-85.

180. 佐藤伸二 1970「中部九州における前期古墳発生の側面—とくに土師器の編年に関する再検討—」『法文論叢』第26号 史学篇, 熊本大学法文学会, pp.1-21.
181. 丸山武水ほか 2003『大塚台地遺跡』, 松橋町埋蔵文化財発掘調査報告書, 松橋町教育委員会
182. 米倉秀紀・吉武 学編 1984『文蔵貝塚』, 三角町文化財報告第2集, 三角町教育委員会
183. 坂口圭太郎編 2007『島田遺跡』, 熊本県文化財調査報告第241集, 熊本県教育委員会
184. 西山由美子編 2005『用七遺跡』, 八代市文化財調査報告書第27集, 八代市教育委員会
185. 米崎寿一ほか編 2005『上日置女夫木遺跡』, 八代市文化財調査報告書第26集, 八代市教育委員会
186. 長谷部善一ほか編 2013a『下江中島遺跡・上日置女夫木遺跡』, 熊本県文化財調査報告第278集, 熊本県教育委員会
187. 山内淳司ほか編 2010『上日置女夫木遺跡』, 八代市文化財調査報告書第42集, 八代市教育委員会
188. 濱田健資 2008『上日置女夫木遺跡』, 八代市文化財調査報告書第37集, 八代市教育委員会
189. 長谷部善一・高山直也ほか編 2006『西片百田遺跡・西片園田遺跡』, 熊本県文化財調査報告第234集, 熊本県教育委員会
190. 長谷部善一・上高原聡編 2007『西片百田遺跡』, 熊本県文化財調査報告第242集, 熊本県教育委員会
191. 高谷和生編 1996『西片町遺跡』, 熊本県文化財調査報告第153集, 熊本県教育委員会
192. 吉永 明編 1988『下堀切遺跡』I, 八代市文化財調査報告書第3集, 八代市教育委員会
193. 吉永 明編 1989『下堀切遺跡』II, 八代市文化財調査報告書第4集, 八代市教育委員会
194. 園村辰実編 1997『万年寺遺跡』, 熊本県文化財調査報告第163集, 熊本県教育委員会

An Analysis of the Rise and Decline of Late Yayoi Settlements as Factors behind the Emergence of Clusters of Prominent Chiefs' Tombs in the Early Kofun Period : Why Did Mounded Tombs Appear There?

SUGII Takeshi

This article examines the rise and decline of settlements in the late Yayoi and early Kofun periods and the trend of constructing mounded tombs (keyhole tombs) for powerful chiefs in the early Kofun period in the Kumamoto area. This study finds that no prominent early tombs were built in the Kikuchi River Middle Basin, which was prosperous in the late Yayoi period, while a cluster of early tombs for prominent chiefs was formed at the root of the Uto Peninsula, which was relatively worse off in those days. Although the geographical features, such as rivers and plains, imply that farmers, especially rice producers, in the Kikuchi River Middle Basin had much higher productivity than those at the root of the Uto Peninsula, this high productivity was not directly related to the creation of mounded tombs or maintenance of settlements in the early Kofun period. In other words, the territories of large settlements serving as district centers in the late Yayoi period did not coincide with the areas where prominent chiefs' tombs were constructed in the early Kofun period, at least in the Kumamoto area.

The root of the Uto Peninsula is considered as the southern border of the Yayoi culture, whose elements, such as burial jars and bronze weapons, have characterized the northern Kyūshū region. The central government, located in the Kinai region, introduced various hierarchical elements into the tumulus system and used the order built on them to establish its position as the mainstay of the state. The geographical range of influence of the government, presumed from the distribution of keyhole tombs, is considered to have coincided with the areas where rice production was accepted as a means of livelihood in the Yayoi period. If this is the case, the root of the Uto Peninsula on the southern border of the Yayoi culture, which was dominant in the northern Kyūshū region, seems to have been regarded as the forefront of the inside world from the perspective of the central government. In other words, it is presumed that some of the first large keyhole tombs were constructed at the root of the Uto Peninsula because the central government placed a particularly high value on the area as a symbol of solidarity of the inside world (vs. the outer world).

Thus, some keyhole tombs were constructed outside the conventional economic sphere. This fact clearly indicates that tumuli were of considerable political significance.

Key words: Late Yayoi period, early Kofun period, settlement, chief-tomb cluster, Kumamoto area

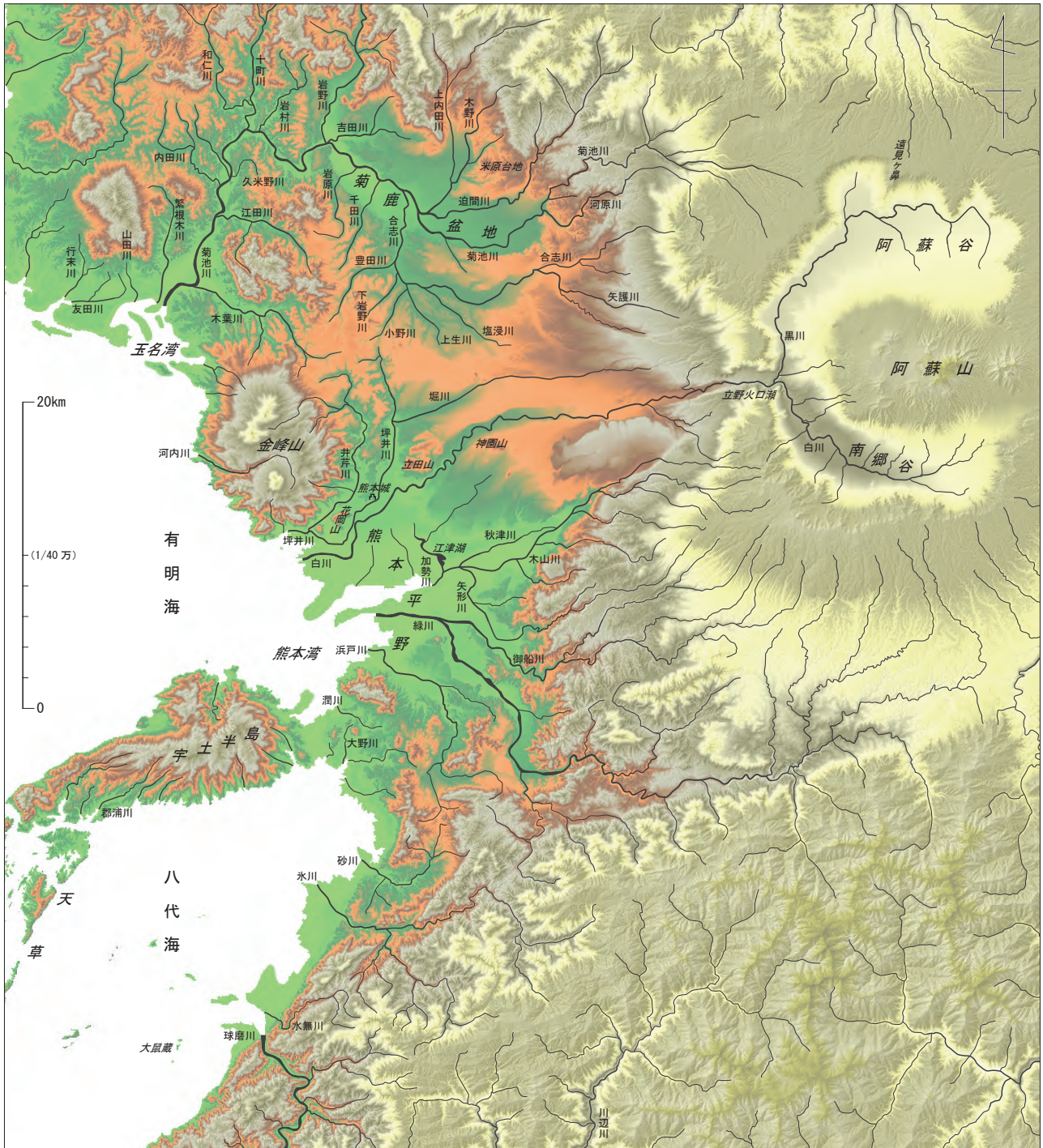


図1 熊本県地域の地理

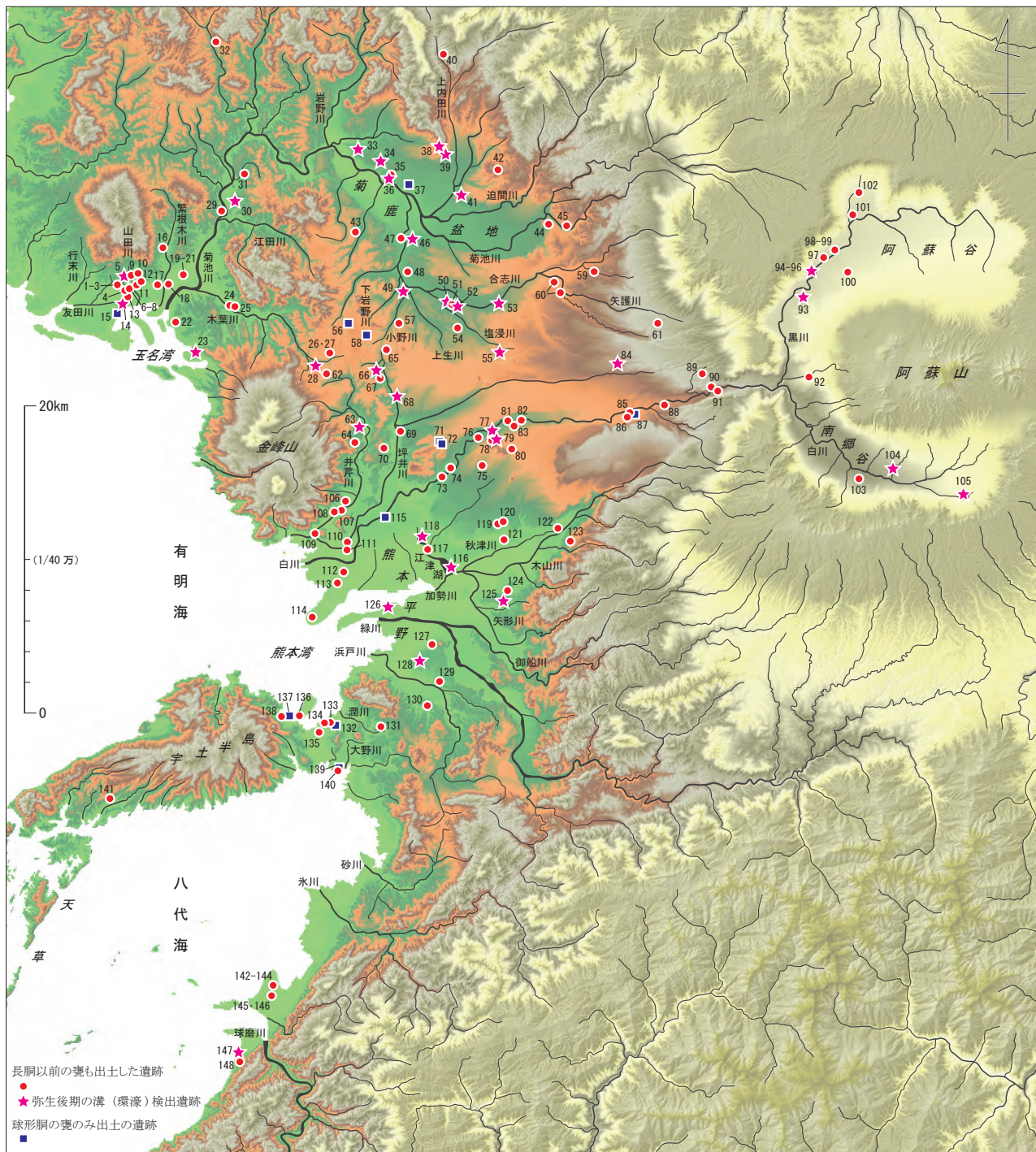
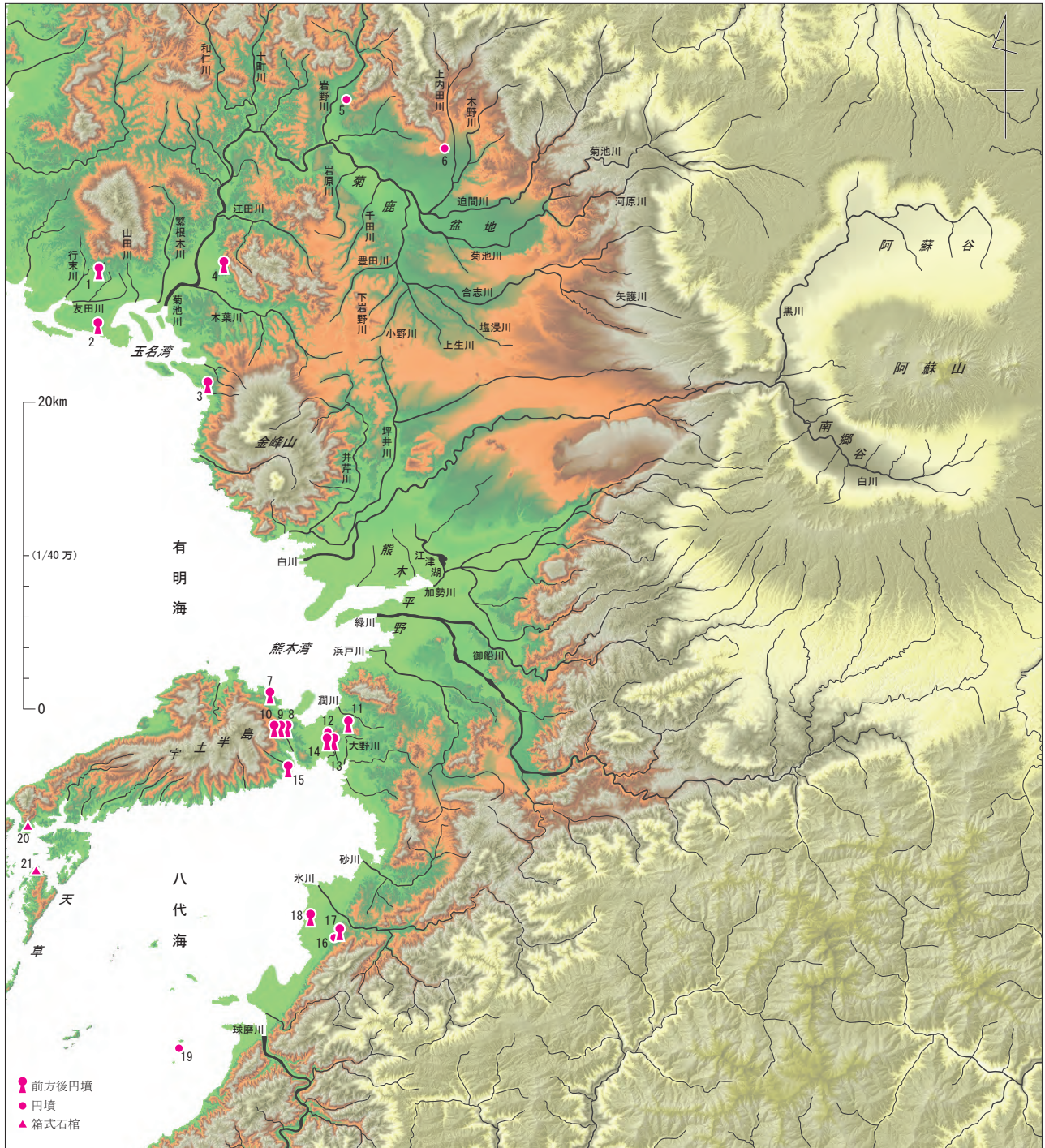


図2 熊本県地域における弥生時代後期から古墳時代前期にかけての主要集落遺跡の分布



1. 院塚古墳 2. 藤光寺古墳 3. 天水大塚古墳 4. 山下古墳 5. 竜王山古墳 6. 津袋大塚古墳 7. 天神山古墳 8. 城ノ越古墳 9. 迫ノ上古墳 10. スリバチ山古墳
 11. 潤野3号墳 12. チャン山古墳 13. 御手水古墳 14. 向野田古墳 15. 弁天山古墳 16. 大王山3号墳 17. 大王山1号墳 18. 有佐大塚古墳 19. 楠木山古墳
 20. 清水甲古墳 21. 千崎古墳群

図3 熊本県地域における主要前期古墳の分布